

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

開発支援の実践をめぐる文化人類学的研究
—専門知のリハビリテーションへむけて—

An Anthropology of Realities of Development:
Towards a “Rehabilitation” of Professional Knowledge

2020年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

内藤 順子

NAITO, Junko

目次

序章

- 1. 本研究の目的と構成 6
- 2. 開発支援と貧困をめぐる研究動向 6
 - 2-1. 「貧困」概念の再検討：貧困研究と人類学 6
 - 2-2. チリにおける「貧困」問題 8

第1章 調査地概要：チリにおける貧困の諸相

- 1. 調査地概要 13
- 2. 複数の貧困：ふたつのスラムの比較から
 - 2-1. ポブラシオン・ヴジャガルバリーノとポブラシオン・ラ・バンデーラ 14
 - 2-2. 教育と投資 22
- 3. チリにおける暫定的貧困の3類型 23
- 4. 「貧困」のハビトゥス 24
 - 4-1. 「貧困のハビトゥス」の生成・再生産現場 24
 - 4-2. 貧困者の生活サイクル：“コシータ”の民族誌 25
 - 4-3. 貧困下における「時間のハビトゥス」 27
 - 4-4. 再生産概念としてのハビトゥス 27
 - 4-5. 「出来事時間」と「時計時間」 28

第2章 「貧困空間」の人類学

- 1. 「貧困空間」について 31
- 2. 上からの「下からの視点」：“善意”の意図せざる暴力性 33
- 3. しあわせの外部性：「第一世界」の文脈の侵入 34

第3章 「貧困空間」の民族誌

1. 貧困が沈殿／浮遊する空間としての都市	38
2. 路上で育まれる身体	38
3. 「ある世界」と「あるべき世界」：人はどこから来て、どこへ行くのか	40
4. 路上に交錯する「環境世界」	45
5. 「小さき人びと」がうみだすグローバリゼーション	47
5-1. アルピジェラという民芸品	48
5-2. アルピジェラが国境を超える	50
6. 「様々な他者の価値観のあいだを生きる」こと	50
6-1. 差別を成り立たせる文脈：「社会的承認」	50
6-2. 「些細なプロジェクト」の可能性	51
6-3. 小さき人びとのプロジェクト	52

第4章 開発現場の人類学

1. 文化人類学と支援	
1-1. ことばから見る	55
1-2. 「受動的差し控え」：支援の心得のひとつとして	56
2. 「地域リハビリテーション（CBR）の紆余曲折：“鳥の目”7割の民族誌	58
2-1. リハビリテーションは誰のために	58
2-2. 病院リハビリテーション（IBR）	60
2-3. 医療従事者の事情	61
2-4. 地域リハビリテーション（CBR）	63
2-5. INRPACにおける地域リハビリテーションの実施	63
2-6. 小括	67
3. 支援現場の「文化摩擦」：チリの医療従事者と日本の医療従事者の齟齬	69
3-1. 来日研修員の「暴言」	69

3-2. 開発支援の現場をフィールドにする	70
3-3. 「途上国」の彼ら：教える態度・教わる態度	71
3-4. 開発支援は誰のために	72
4. 専門性という異文化	73
5. 「人類学の専門家」とは：「自他ともに認める不確かさ」のなかで	74
第5章 開発現場で人類学	
1. 地域リハビリテーション（CBR）の紆余曲折：“獣の目” 7割の民族誌	78
1-1. 院内で放し飼いになる	78
1-2. 「手ぶら」で歩き始める	79
1-3. 「あたりまえ」に馴染めず悩む	80
1-4. 日本人だけど、日本人じゃない	81
1-5. フィールドに出る	82
1-6. 昨日の友は今日の敵	82
1-7. 「ほかならぬあなた」と出会う場で	69
第6章. 専門知のリハビリテーションにむけて	
1. 開発援助と人類学	87
2. 専門知にもとづくハビトゥス	88
2-1. 専門家の偏知	89
2-2. グレーゾーンと専門家	89
2-3. 専門家的身体につくられかた：独特のリアリティ・システム	91
3. 専門家と文脈	92
文脈の移動と専門知	92
4. 専門知のリハビリテーションへ	93
4-1. 人類学という専門	93

4-2. 専門知のリハビリテーション	95
謝辞	97
引用参考文献	99-109
注	110-117

序章

1. 本論文の目的と構成

本論文はチリにおける「貧困者」・「障害児」・「開発・支援者（専門家）」の三者それぞれと20年にわたる関係が続けてきた筆者による、支援¹をめぐる民族誌的研究である。はじめて開発の現場に接し、ときに強者の立場でかかわることにより見えてきたのは、支援という営みが不思議なまでに空転し、暴力的にもみえることであつた。その暴力性について、強い反発をおぼえて批判的にとらえてきた筆者だが、支援の現場に身を置きはじめた当初と、断続的かつ継続的に20年付き合い続けてきた今では文脈が異なることもあり、強すぎる批判は何もうまぬことを反省するに至っている。本論文の章立ては、筆者のチリとのかかわりの時系列に沿っており、序から終わりにむけて、筆者が文脈や立場を変えてフィールドとむきあうなかで思考や視点の置きどころをリハビリをする過程ともなっている。筆者個人の自伝などというものでは決してなく、支援現場において人類学を志す者が、様々な文脈を生きなければならないという特殊さをもつということ、20年かけた民族誌的営みをとおして、文化人類学の知と営為には可能性があることを述べるものである。

具体的な研究目的は、開発支援という営みがよりよくまわり、いわゆる社会的弱者とそうでない人びとがうまく共生するにはどのような道がありうるのか、そのためのわずかばかりの提案と提案にいたるプロセスの詳述である。

まず、主題となる貧困について人類学とのかかわりから概観したのちに、チリにおける貧困問題の概要を述べる（序章）。つぎに、「社会的弱者」と前提されている「貧困者」の生活世界の民族誌と、「社会的弱者とされる人びとと強者とのかかわりの民族誌」とおして、問題含みにとらえられる支援のありかたを明らかにする（第1章、第2章、第3章）。そこではあわせて、貧困研究に対して「貧困空間」というひとつのみかたを提案し、「被支援者＝小さき人びと」の文脈から世界をまなざすことを試みる。それは本論文をとおして扱う「社会的弱者」と支援者たるわれわれの文脈のちがいが、意外にも大きな影響をもたらしていること、文脈移動にヒントがあるのではないかということを示唆する。

そして、前章までと同じ貧困地区に住まう障害児を対象としたプロジェクトを研究のフィールドとして、筆者自身が支援の実践に加わった経験から、「開発支援の実践のなかで異文化間の共約性を「専門家」として模索する、2段構え（鳥の目と獣の目）の民族誌」（第4章、第5章）を描く。それらをふまえ、専門知のリハビリテーションの提案（第6章）について論じていくことにする。

2. 開発支援と貧困をめぐる研究動向

2-1. 「貧困」概念の再検討：貧困研究と人類学

世界にはさまざまな貧困の形がある。たとえば、インドの売春宿に生まれて育った子どもが年端もゆかないうちに売春するような暮らし、ケニアの紛争地域の難民キャンプにおいて身ひとつで暮らす人びと、チリで肥満に悩むスラム住民、フィリピンのごみの山で資源ゴミを換金して日銭にする家族、日雇いで生活する日本のホームレスなど、挙げたらきりが無い。思いつくままに簡単に挙げただけでもその多様性がわかる困難な状況を、「貧困」と一括りにして呼んで社会問題化する現状をまず考えたい。経済的に困窮した暮らしは存在する。だが、その現実がひとたび「貧困」と名付けられることによって生じている問題もまた指摘できる。ここでは、そうした広範囲におよぶ「貧困」概念とその悪循環につい

て、文化人類学的な視点に拠りながら、チリの貧困の現場に即して整理し、貧困概念再考の手始めとしたい。

貧困という語はもともと経済学分野から出てきたものである。本来の意味を要約するなら、「自分の属する社会において一人前の社会的成員として生活するための諸条件；食料、栄養、住居、被服、社会的に認知された仕事、公共サービスへのアクセスなどのいくつか、あるいはすべてにおいて欠乏状態にあること」といえよう²。ところが現代においては、貧困は「何かの欠乏」という用語の原意をこえて拡張されており、そこに生きる人間をも悪としてとらえて、改善対象とする傾向がある。人類学が対象から概念を規定していく傾向があるとすれば、まずこうした価値表象に立ち止まって検証が行われたはずであろう。しかし、そうではなかった。その理由を探るべく、人類学と貧困研究とのかかわりを軸として、「貧困」概念成立の歴史をみていく。

貧困に関する先行研究を一瞥してみると、人類学においては国内外を問わずあまり活発に議論が行われてこなかったことに気づく³。著名なのはアメリカの人類学者 O. ルイスである。彼は 1960 年代にプエルト・リコやメキシコのスラムの家族の暮らしぶりを詳細に描き出し、そこに見いだされる、ある特徴的な生活と行動の様式を「貧困の文化」とよんだ⁴。世代から世代へと文化的に引き継がれるからこそ貧困の暮らしは再生産され、日々の暮らしから「貧困の文化」がより強化されるという循環を指摘したのである。それ以降 70 年代初頭まで、「貧困の文化」の是非をめぐる批判と応答が続いたものの、貧困の民族誌とその理論的研究の系譜は途絶え、以後じつに半世紀のあいだ人類学における新しい研究は出されなかったといつてよい⁵。

一方、同時代背景に目をうつすと、1947 年のマーシャルプランにはじまる第二次大戦後のヨーロッパの復興と支援に乗り出したアメリカが、1949 年トルーマン大統領就任演説を皮切りに開発に力を注ぎはじめていた。しかも米ソ冷戦のさなかで、「新興独立国への援助合戦ともいべき状況が生じ、途上国各国を自らの陣営にとどめ置くための競争が行われ、援助がその道具として活用されるようになった」のである [初鹿野 2005:77]。そうした流れのなかで、国連はケネディ米国大統領の呼びかけに応じて 1960 年代を「開発の 10 年」と宣言し、欧米諸国を中心に貧困国の経済開発推進が図られはじめた。貧困がはじめて問題化されたのである⁶。

さらに 70 年代に入ると、所得分配の不平等や貧困層の状態にも関心が向けられるようになり、対開発途上国という国家枠だけではなく、途上国内の貧困層支援にも力が注がれるようになる。ここでの開発とはあくまで経済的發展を目指すものであり、「資本集約的な都市開発援助とマクロ経済学を重視するような援助パラダイム」であったため、専門家としてリクルートされたのは、開発学や経済学分野からであった [松園 1999:5]。そこでは、経済学者ヌルクセらが主張した「貧困の悪循環」——「貧困」は教育機会や選択の機会を剥奪し、それゆえ「貧困」からの脱出は困難になり、環境破壊をともないつつ悪循環をおこすのだ、といった主旨の議論がなされた。それ以降、開発学や経済学の領域においては環境保護の側面でも、また貧困者の生活向上を図るためにも、貧困の悪循環を絶ち、飢餓や生命の危機に晒されるような貧困の削減と撲滅を推進するのは当然であると、疑う余地のない合意事項となつていったのは想像に難くない⁷。

ところがそれだけでは貧困の解消への寄与は乏しかった。そこで開発学の R. チェンバー

スおよび経済学の A. センという 2 人の研究者は、1980 年代前半にそろって、貧困は「ハードで量的なデータ」だけではかされるような単純なものではないとして、計量経済学的な貧困の捉え方を批判しはじめる。両者の批判の要点は、貧困といっても地域や国ごとに性質のバリエーションがあるので、貧困線で一括して貧困を定義し、所得向上を目指しても効果はない[チェンバース 1983]ということと、人が困窮状態に陥るかどうかは、自由に用いることのできる財の幅があるかどうか、すなわち個人のエンタイトルメント⁸のありかたが重要であり、購買力だけの問題ではない[セン 1981]ということである。つまり、貧困と定義される人びとの社会的・文化的背景を見ることなしに、貧困問題を根本的に解決することはできないという主張である。ここから、「絶対的貧困」と「相対的貧困」とを区別すべきである、という議論がもちあがった。ある人が世界基準の貧困定義の核となる貧困線を上回る収入があったとしても、エンタイトルメントの欠如や選択幅が少ないならばそれは貧困状況と同様であるとして、地域ごとの自然条件や、所得分布、生活習慣なども考え合わせて定義するのが相対的貧困の考えかたである⁹。こうした、貧困層の置かれている個々の状況を理解する必要に迫られたとき、ようやく開発における人類学の必然性が認められたと考えられる。人類学が開発学の領域や現場にかかわりを持ちはじめたのは古くは 1970 年代以降からだ¹⁰、こと貧困削減と銘打った開発に目立って参入するようになるのは 90 年代に入ってからである。

開発の領野に遅れてやってきた人類学は、そこで使用される貧困概念にしたがい、貧困の悪循環の是正と削減という目的に沿う形で参入することとなる。開発における人類学の適応の困難さは、現在でも学会や研究会においてよりよい関係が模索されているように、難題である¹¹。なぜなら開発現場における人類学とは、ハードのうえでパフォーマンスするソフトのような存在であり、人類学者がどの程度援助にかかわるかは、政府援助機関側が主導権を持っているという意味で独立変数であり、関与する人類学者の数とその関与の仕方は従属変数である[松園 1999:6]¹²。しかも、人類学はポスト・コロニアリズム状況のなかで、学としての存在意義を問いはじめていた頃でもある。となると開発の分野で力を発揮し、役割を果たすことは人類学の新たな領域開拓としても重要となっていた。したがって「貧困」などの理論枠組みへの注視よりも、人類学になにが可能かという実践論的な傾向が増すこととなった。「文化を参照すること」が役割として期待され、「貧困」は解消されるべき対象だという前提事項は不問のままにとどまり、枠組みそのものを相対化することは容易ではなかった。こうした経緯によっていくつかの議論と現実の状況とが不幸な形で符号し、貧困概念に悪のイメージが纏わされるようになったと同時に、そこに住まう人びとをもひと括りで悪とする「貧困」表象が確立されたと考えられる。

しかしながら、従来人類学が対象としてきたのは「未開社会」や、植民地下とその後の先住民族であったことを考えると、ほとんどの研究対象はほぼ貧しい。だが各々のフィールドから「貧困」という用語が出てくることは稀であったであろうし、また人類学者がふだん相手にしている対象をあえて貧困と呼ぶ必要性はなかった。資本主義が浸透しておらず、貨幣経済市場から隔たりがあるまとまりや社会をわざわざ「貧困」と名づけて主題化し、対象化すること自体が、近代の欺瞞的な営みであるようにも見える。

2-2. チリにおける「貧困」問題

前節のような世界状況と「貧困」研究が連動するただなかで、チリ都市部における貧困の急増は起こった。それは1970年の新社会主義をうたうアジェンデ政権樹立の少しまえからはじまり、首都に仕事の需要を夢みた地方農村の人びとがひととときにサンチャゴへ流入したのである。しかしアメリカ合衆国の介入と軍部のクーデターによりわずか3年でアジェンデ政権が崩壊し、政治も社会も混乱するなかで膨れあがった人口をカバーするような雇用があるはずもなく、市内は失業者であふれた。それどころかあてもないまま農村を出てきた人びとは住むところもなく、市内の空き地を不法に占拠して住まうようになる。これが現在のスラムの前身である。その後の16年におよぶピノチェト軍政の経験と、民主主義への移行といっためまぐるしい政治的变化のなかで、貧困はつねに社会問題としてありつづけてきたが、多くの場合は政治的ツールとして引き合いに出されるにすぎなかった。

つまり、貧困者の生活向上を公約に掲げることで貧困者を味方につけるのが目的であり、真に貧困に向き合う取り組みとはいきれなかった。たとえば軍政府は反発の強い対象を黙らせるために、左派勢力が組織した結束力のある貧困地区に対して住居を与える政策をとった。そうした地区はいまでもスラムだが家屋だけはしっかりとしている。また、こうした政策のもとで軍政府の介入を積極的に受ける貧困地区も出てくるようになった。このように、政府をはじめとする貧困外部の介入の度合いの違いから、サンチャゴには複数のレベルの、異なった性質の貧困が混在することとなり、それらは地理的にも、市内や郊外の一箇所にまとまることなく、まばらに点在している。

この状況は、世界のさまざまな大都市に共通するといわれるスラムの形成の特徴をあげつつ、その未来について悲観するデーヴィスが指摘することとも部分的に一致する。「ラテンアメリカの外縁部では、新たな農村移民が住む掘っ立て小屋街が、中心街の犯罪や危険から逃れてきた中産階級の通勤者が暮らす壁をめぐる近郊住宅地の隣にあるというのが一般的である」¹³。しかしこれらの等質でない複数の貧困がどのように存在しているかといった、暮らしの具体や社会文化的背景については触れられていない。

ラテンアメリカは1980年代初頭における債務危機発生後の「失われた10年」以降、各国の経済学者を惹きつけてきたが、その危機の煽りをダイレクトに受けているスラム住民の日々の営みに関心がもたれることはなく、ただ介入と解消の対象として存在していた。

チリにおいてはじめて貧困を数量化した経済学的研究が50年代半ばに見られるものの¹⁴、いわゆる都市型の貧困問題としてクローズアップされるようになったのは80年代からである。ただし軍政下(1973-1988)では政策批判に制約があり、本当の意味での貧困研究と対策の開始は90年代を待たねばならなかった¹⁵。軍政が終わってから最初の米州サミットが94年にアメリカ合衆国で行われ、その折に(1)「民主主義の定着」(2)「経済統合と自由貿易による繁栄」(3)「貧困と差別の撲滅」(4)「持続可能な開発」の4つが地域全体の目標として掲げられた¹⁶。このときチリは再民主化の波にあり、94年に誕生したfrey政権では(1)「近代化」(2)「民主化」とともに(3)「貧困克服を政権課題の柱にする」という政策が進められた¹⁷。チリでは貧困についての研究¹⁸と実際の介入とが当初から同時進行しており、その手本は国連開発計画や世界銀行などの指針だった。したがって、貧困問題を扱う文書では公私を問わず、世界標準の決まり文句や流行語である「社会的排除」「権利」「統合」「連帯」「人間開発」「資源の欠如」「倫理」「社会的公正」という単語がならんでいる。チリにおいては、社会的現実として空間的にも接触可能な貧困者をいかに減らしていくかが課題

であり、社会防衛の観点から貧困は問題化されている。

しかも、「チリは極貧から解放されるのだ。もう誰も、生きのびるために他人の施しに頼るような恥ずべき行為や屈辱に身を委ねることはない。(中略) 不利な状態を生きてきた同じチリ人の兄弟たちに、連帯と寛大な手を差し伸べたい (傍点は筆者による)。だからこの新しい政策“チリ国家連帯(*Chile Solidario*)”について話そう。われわれの歴史のなかではじめて、貧困の中でもっとも貧困な人びとにも、厚生と教育、社会保障へのアクセス(権利)が保障される。チリはまさしく連帯を築くのだ。」という大統領演説にも顕著なように、その領域内の人々は明らかに救うべき存在として位置づけられている。(2002年5月21日“チリ国家連帯計画”(極貧層を対象とした社会保護政策)の開始を祝う大統領演説の一節)

このような、貧困に陥っている人びとを助けることを祝う、といういささか転倒した祝賀会の開催からも政府の貧困に対する姿勢がうかがえ、それは、「国内における取り除くべき異物」といった表象に集約される¹⁹。「連帯」や「統合」とは、近代国家の国民は一体であるべきだという思想にもとづいており、一体化するには彼ら貧困者を引き上げなければならず、だからこそ寛大にも手を差し伸べるのだという論理であるが、その理念もまた「貧困」概念の増幅につながっている。たとえば「人間開発」という単語を用いて貧困地区での支援活動を進めると、UNDPが意図する意味ではなく文字通りに「貧困者が人間的に未開発な人びとである」と受け止められる。

たしかに政府にとっては、貧困者の権利は、寛大にも手を差し伸べてあげることで達成されるのだが、その場合、貧困者が享受できる権利とは、統合あるいはラベリングされることとの引きかえとなる。貧困地区では出生届や居住場所などを把握できない状況が多い。そうした「内なる辺境(*Fronteras Interiores*)」²⁰をいかに統合してゆくか、それがチリ政府や貧困外部にとっての貧困問題なのである。

こうしたまなざしのもとで実施されてきた政策により、チリにおける貧困率は1990年から現在まで、数値の上では改善の一途をたどってきた。国勢調査²¹によると1990年には貧困層が国の総人口の38,6%を占めていたが2000年には20,6%まで減少し、2010年調査の結果²²では15,1%となっている。90年から2000年にかけての大幅な減少については、この期間のチリ全体の持続的な経済成長が反映されているという見解を政府は示しており、これは国内外の経済学者たちの見解とも一致する²³。

しかし問題は2000年から2010年の結果に明らかのように、減少率が5,5%と停滞していること、そして1990年代の急激な経済成長²⁴においても解消されなかった貧困層が存在することである。このことはチリ政府も、根強い貧困(*Pobreza dura*)として認識しており、その対策として計画されたのが先の“チリ国家連帯(*Chile solidario*)”という3年計画の社会政策²⁵だった。この政策では、全国において経済的数値から極貧層に分類される家族のうち「もっとも極貧状況にある家族」から順に選定²⁶した22万5千家族に対して、開始から2年間は家族保護年金を支払う²⁷。受給家族には就業訓練プログラムへの参加などの「社会化」に従事する義務が伴い、社会化促進を見越してその年金を半年ごとに減額してゆく。その他、各種年金制度や一定額の飲料水手当てなど、「国民として享受すべき権利」に預かるための手続きを援助し、生活環境改善のために「身元」「健康」「教育」「家族」「住環境」「就労」「所得」の7項目についての適切なありかたとその訓練を受けることになる²⁸。こ

のことが貧困者たちに要求することは、ひとことで言えば「管理」である。

またもうひとつの問題は、貧困層に分類されていた人びとに一時的であれ収入があればそのまま貧困層を脱したと数えられる点で、そうしたケースではまた貧困層に出戻る場合が多く、出戻らなかったとしても貧困線付近にあることには違いない²⁹。劇的に暮らしぶりが変わるわけでもなく、むしろ貧困層にカウントされないことで援助対象から外されてかえって困窮する例もある。さらに、貧困率が減少しても所得格差は相変わらず大きく³⁰、失業率も減少してはいない³¹。

チリ政府および政策決定を行う上層部をはじめ、「貧困」にかかわる外部において、貧困から脱するとはどういうことをいうのか。貧困克服プロジェクト開始の祝賀会はいったい何を祝ったのだろうか。チリではたしかに「貧困」は問題化されているが、貧困に生きる人びとは置き去りにされている。

第1章

調査地概要：チリにおける貧困の諸相

1. 調査地概要

サンチャゴ市は世界資本が集まる金融市場としての機能を果たす大都市である。いまや南米でいちばん物価水準が高く、アメリカ合衆国を100とした場合に他の南米10カ国の平均が46,3であるのに対し、60をマークしている。サンチャゴの街の形成は1818年のスペインからの独立後しばらく経った1930年頃からだが、劇的に変化するのは前章で述べたとおり、1970年前後である。サンチャゴ市の人口は筆者が調査を開始した2001年現在、6百1万3千185であり、チリ総人口³²の約40%が集中しており、サンチャゴ人口の23.2%が貧困層に分類される。そして、チリ全国の貧困層の84%と、極貧層の79%がサンチャゴに集中している(2000年CASEN)³³。チリは明確な階層社会であり、政府独自の経済指数によって極貧層³⁴、貧困層³⁵、中流層、上流層の4つに分類されている。首都圏在住の場合の世帯の1人あたりの月々の収入が34,272ペソ(約5,700円)以下の場合は貧困層であり、世帯の1人あたりの収入が17,136ペソ(約2,800円)以下の場合は極貧層である。この階層区分によって医療費の支払額や免除資格、年金受給資格、社会保障資格のすべてが決定されるほか、今世紀に入ってから開始された政府主導の貧困克服計画の対象選定基準とされている。

貧困地区とはこれまで述べてきたとおりチリ政府の経済的指標にしたがって分類される貧困層・極貧層が集合して居住する地区であるが、チリでは区(コムーナ comuna)の下位にあたる居住区をセクトール(sector)、さらにその下位のまとまりをポブラシオン(población)といい、同じポブラシオン居住者は大体同じレベルの経済階層にある場合が多い。ポブラシオンとはもともとスペイン語で「人口」を意味する普通名詞だが、チリにおいてはローカルな一帯を指し示す固有名詞でもあり、多くの場合に「スラム」と同義で使用されている。ただし、スラムはときとしていくつかのポブラシオンがまとまって形成されていることもあれば、あるポブラシオンの一部と別のポブラシオンの一部があわさって形成されていることもあり、必ずしも1ポブラシオン=1スラムという対応関係にはなっていない。

現在ではサンチャゴ市は南米において、サンパウロやブエノスアイレスと肩をならべる世界に開かれた都市であり、現在の金融資本および人口の集中といった経済の規模と役割から考えると、半周辺諸国の第二級都市³⁶とあって差し支えない。そのように資本主義システムの内包されたサンチャゴのなかに無数に存在する貧困の事情について、ポブラシオン(スラム的集合居住区)に住む人びとの日常のフィールドワークをもとにその複数性を提示したい。

2001年調査当時のサンチャゴ市の資料によると以下のとおり、サンチャゴ市全人口の4分の1弱が、経済的指標に準じて貧困層または極貧層に分類されている。

サンチャゴ市人口 6,013,185(2001年)

チリ最低賃金 100,000ペソ/月(2001年) ※日本円約2万円

チリ全国失業率 9.4%(2001年)

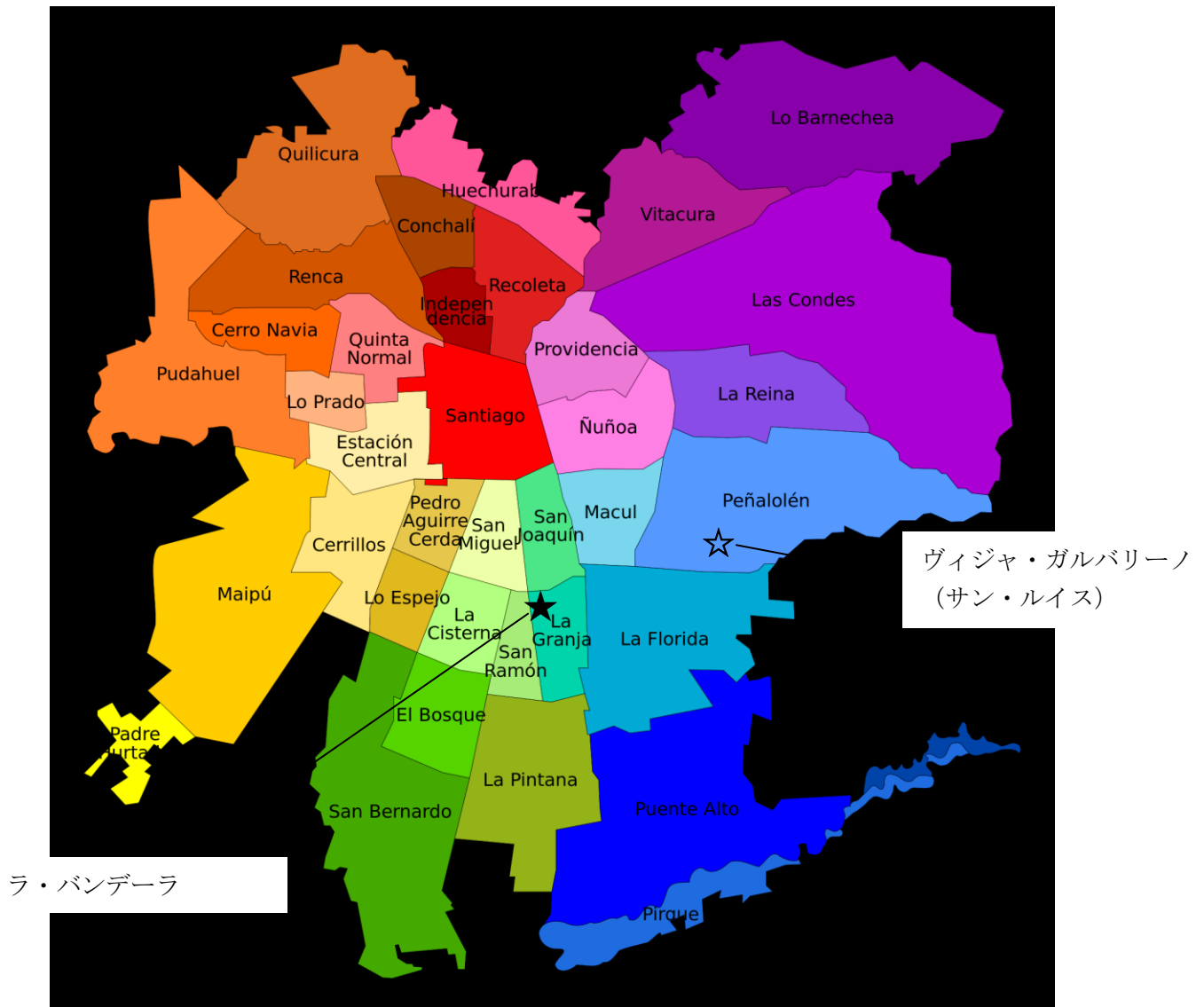
サンチャゴ市失業率 18.9%(2001年)

サンチャゴ市貧困率 23.2%(2001年)=極貧層³⁷17.4%・貧困層³⁸5.8%

(MIDEPLAN チリ企画協力省 2001年・INE チリ国家統計局資料 2001年より)

2. 複数の貧困：ふたつのスラムの比較から

2-1. ポブラシオン・ヴィジャ・ガルバリノとポブラシオン・ラ・バンデーラ



あつかう事例のひとつは、サンチャゴ市東南部ペニャロレン区のサンルイス地区にあるポブラシオン「ビジャ・ガルバリノ(Villa Galvarino)」(2001年人口4587人:以下VGとする)、であり、他方は市南部サンラモン区のポブラシオン「ラ・バンデーラ(La Bandera)」(2001年人口4299人:以下LBとする)である。このふたつを取り上げる理由として、筆者が深くコミットメントしたということのほか、いずれもが名の知れた地区であり市内の最下層地区の代名詞となっていること、不衛生で、ドラッグや犯罪が横行する危険区域でサンチャゴ住民でもうかつには近けない、というイメージがもたれているという理由からである。

ここでは貧困者が広く行なっていて、誰でもできる営みである「カルトネーロ(ラ)」と、フェリア(市)、イベントのありようについて取り上げる。カルトネーロとは、ダンボールや紙類を集めるリサイクル業を意味し、ダンボール収集のための三輪車(相場10万ペソから15万ペソ:約2万円から3万円)や

台車で、町の随所からダンボールや再生できる紙や、雑誌、新聞紙を収集して、業者に持って行って換金する仕事である。

ポブラシオン・ヴィジャ・ガルバリーノ (VG)

【カルトネーロ】

VGのカルトネーロの収入平均は、調査の結果(資料)、男性だと月収で18,000ペソ前後(家長でカルトネーロである38名の平均値)、女性は10,000ペソ弱(家長でカルトネーラである12名の平均値)である。この数値によると、ほとんどの家庭が極貧層に分類されることになる。また、VGにおいて一家族に同居する平均人数は4.5人であり、また調査時のVG付近の小売店での物価は、牛乳1リットルが約150ペソ、パン1キロ約600ペソであった。家長の収入が、家族の収入のほとんどを埋めているとするならば、経済的困難が認められることになる。

カルトネーロのおもなダンボール収集先の大半は、近くにある巨大なスーパーマーケットだった。他に、馴染みのパン屋、近所の商店、区役所で事務用品や搬入のために使ったダンボールを回収している。それらのダンボールを地区にある小規模の取りまとめ作業所に持ち込んで、即金にかえる。買取りの値段は、業者の規模や地区によってまちまちだが、VGの人たちが行く近場の業者では、たとえばぬれたダンボールや湿った形跡のあるものは1キロあたり40ペソ(8円)、状態のいいものは1キロ50ペソ(10円)で買い取られる。

VGのカルトネーロの特徴

- ・ 収集は近場でおこない、必要があるときに出かける
- ・ 3輪車ではなく1輪車(より安価)を使用するカルトネーロがよく見られる
- ・ あまり収穫がない場合は、早くに収集作業を切り上げて、近所で暇を潰す
- ・ 5月から8月の雨期に備えて、自宅の敷地内に必要分のたくわえをする
- ・ 売却値段が比較的安価でも近場で売却する



画像1:一輪車で段ボールを収集するVGのカルトネーロ(筆者撮影)



画像2:

VG の居住敷地内貯蔵庫のようす。雨期やうまく回収できなかった時のためにこの程度の量を蓄え備えている(筆者撮影)



画像3:

フェアとイベントについては VG のエリカ Erika P.N.34歳の例をあげる。

エリカの来歴:

小学校三年まで通学／専業主婦＋区の臨時清掃業／家族の合計月収 38 万ペソ／夫(36)・息子(14)・娘(13)・母(69)・妹(30)・妹の夫(38)・妹の息子(13)(12)(1)・妹の娘(9)・(7)・(3)の合計 13 名で同居(カッコ内は年齢)／34 年間 VG に居住



画像4:エリカとその家族
左のネイビーの着衣の女性がエリカ。その右の女性はこの地区のソーシャルワーカー(筆者撮影)

画像5: エリカの家寝室。この部屋で8人が寝る。画像6: エリカの家廊下(いずれも筆者撮影)



【フェア】

エリカ一家がフェアに出店するのは生活がいよいよ苦しくて、今日食べるものもないという場合である。出店の場所代は支払わずに物品を並べる形態の出店をする。フェアに出店する場合には、市の条例で場所代(区や場所によって価格は異なる)ときまったテントを自腹で支払う義務があるため、こうした不法出店の出店のことを俗に「コレロ」(列をなす人の意味)と呼ぶ。売るための商品は、ダンボール回収のときにめぼしいものを一緒に捨てるか、区からの寄付でとりあえず何でももらっておいて、不要なものを出すといたやりくりをしている。



画像7:

不法出店のフェア。必要に応じて不定期に無許可の出店を行っている(いずれも筆者撮影)



画像8:

コレロは警察にみつかれば処罰の対象になるほか、彼らは布の上に物品をおくという形で屋根がないため、雨期には出店が出来ない。エリカー一家の場合、コレロをして売上収入があった場合には、自分が並べた近くの食料フェアで安く食料を買い込んでくる。以上から、特徴を述べるとつぎのようになれる。

- ・ 不法出店
- ・ 不定期の出店
- ・ 家庭内の不用品かダンボール回収時にみつけた、売れそうなものを並べる
- ・ 売上収入で食料品を買う

【イベント】

エリカー一家は近隣に親戚が多数いるが、イベントごとに集まったり、フィエスタ(パーティー)をすることはあまりない。資源や資金がないからできないというのが理由である。誕生日だからといって個人的に訪問しておしゃべりしたり、両親が子どもにフェアで誕生日プレゼントを用意するといったことが稀にあるようだが、現実的問題として余裕がないことのほうが多い。

- ・ 誕生日プレゼントはフェアで買うこともある
- ・ フィエスタはしない
- ・ クリスマスプレゼントは区のソーシャルワーカーからもらう

ポブラシオン・ラ・バンデーラ (LB)

【カルトネーロ】

LBのカルトネーロの活動の特徴としていえるのは、VGにくらべて、規模が大きいことである。収集時にはサンチャゴを走る環状線の大道路に出て、三輪車型カートで車に混じりながら繁華街まで遠出する。収集作業が近場ばかりではなく、越境する場合がおおいこと、決まった曜日の定時出勤するケースが多いこと、連れだって仲間と仕事している人が多いことがいえる。また彼らは、集めたダンボールを売るときに、多少遠くても、少しでも高く買い取る業者へ行く、ということを行っている。



画像9: 幹線道路を走り越境するLBのカルトネーロ



画像10: 三輪車のカルトネーロたち
(筆者撮影)

LBには、簡易プレハブのような小屋をダンボール貯蔵場所として、4人の身内で(うち三人は兄弟とイトコ、1人は友人)管理しているケースがあった。自宅敷地内の貯蔵と比べると、規模が大きい。その貯蔵は雨期であるかどうかにかかわらずほぼ満たされており、週ごとに車にすべて積んで、この倉庫から車で20分ほどのSOREPAというリサイクル会社へ持っていく。SOREPAでは、VGの作業所では乾いたダンボールでもキロ50ペソだったものが、状態が極上のダンボールであれば、ここではキロ115ペソで買い取られる。ただし、ダンボールの状態を厳密にランク分けしており、滅多に一級ダンボールとして買ってもらえることはないが、二級でも105ペソ、ややしなったものでも70ペソで買い取ってもらえる。この貯蔵庫を管理する兄弟とイトコと友人は、中産階級に嫁いだ妹とポブラシオン設立当初からのパトロンから借金をし、3年前に中古トラックを共同購入した。足りなかった分は後払いした。



◀画像11 ▲画像12:

LBにおいて身内や友人同士で共同出資して借りている貯蔵庫(筆者撮影)

LBのカルトネーロの特徴

- ・ 三輪車による収集、車による売却
- ・ 収集時には時として越境する
- ・ たいてい定時出勤する
- ・ 大量のたくわえを持つ
- ・ 遠くても比較的高価で買い取る業者へ売却する

画像13:共同出資でかりたトラックでSOREPAへまとめて段ボールを売却に行くようす(筆者撮影)



フェアとイベントについては LB のジョアナ Yoana M.M.34歳の例をあげる。

ジョアナの来歴:

小学校四年まで通学／専業主婦＋臨時売り／家族の合計月収 36 万ペソ／夫(36)・息子(9)・母(48)・母の内縁の夫(50)・弟(33)・弟の妻(23)・弟の息子(1)・妹(30)・たまに妹の夫(30)・妹の息子(7)・いとこ2人(29)(31)の合計 13 名で同居／34 年間LBに居住

*エリカ家との比較で出費に関しては、LBのほうがやや高めで 42000 ペソ～40000 ペソ／月、VG は 30000 前後である。しかし VG はそのぶん学童年齢の子どもが多く、学費として 6 人に年 6000 ペソかかる。



画像 14:ジョアナ一家と筆者。左端、少年の陰に隠れているのがジョアナ。ジョアナの祖母ラケル(1995 年逝去)はチリ南部出身の生粋の左翼主義者で 1970 年の新社会主義政権樹立時に首都へきた。LB 占拠時の立役者のひとり。

【フェア】

ジョアナは毎年クリスマス前の12月13日から10日間、連日フェアに出店する。彼女が住むいちばん近くで出店すると、10日ぶんの場所代として 18000 ペソ(約 3600 円)徴収されるので、オバが住んでいる隣の区の出店料が 15000 ペソのところ、オバの名前で登録・出店する。

ジョアナは基本的に、3月末のイースター、9月の独立記念日、12月のクリスマスといったイベント時期のフェアに出店する。季節ものフェアの場合、通常よりも人手が多く、たとえば独立記念日の旗、クリスマスプレゼント、イースターエッグやウサギのぬいぐるみなどは、毎年需要があるものなので確実に売上に繋がるからである。売るものは家庭で手作りする³⁹か、フェア専用の大きな市場⁴⁰でまとめ買いをする。また、ジョアナは毎回、誰かしら親戚のぶんの委託販売を行なう。その場合、売上の3%をもらうか、出店料の一部を負担してもらうことにしている。



画像 15:
出店準備中のジョアナ



画像 16:
クリスマス時期の出店のため、ラッピング袋を用意するジョアナの妹スサナ



画像 17:

隣近所の女性たち(場所によっては隣組的組織の婦人会)が集会所 SEDE に集まってフェアで販売するものや、趣味の手芸をする。なかにはなにもせず話をしにくるだけの人もいる。ここで委託販売の約束が結ばれることもある
(筆者撮影)

ジョアナは、フェアの売上を身内のクリスマスプレゼント購入資金とする。そのほか、来年の商品用の布地や糸、紙粘土などの素材を買うための準備金としてとっておき、残りは生活費にする。特徴をまとめると、以下のようになる。

- ・ 出展料は支払う。しかしより安いところを選んで出店する
- ・ イベント時期に出店する
- ・ ひごろから隣組の婦人会で作っている民芸品や製品を売る
- ・ ディスカウント市場でまとめ買いしたものを売る
- ・ 親戚からの委託販売を行なう。3%の手数料を受け取る
- ・ 売上でクリスマスプレゼントを買い、残りの一部は来年の資金にまわす

【イベント】

LBではイベントを祝う。クリスマス、イースター復活祭、さらに個人の誕生日についてもパーティーをひらき、ジョアナの息子の誕生日パーティーでは、となり近所の子ども、学校の友だち、親戚を招いて盛大に催す。こうした場合の食料はもちよりで、ジョアナ自身の出費は、2001年の場合はジュース代の2000ペソだった。独立記念日、イースター、聖人の日ごとに年中人が集まる機会があって、消費行為である一方で、血縁と同時に地縁関係を深めているといえる。また、こうした機会に、フェアでの委託販売契約をするなど、仲間内で仕事を協力してやる約束をすることも多い。



←画像 18:

画像 19: →
9月18日チリ独立記念日兼ジョアナの息子の誕生日祝い。親戚、近所の隣人とともに祝う
(筆者撮影)



- ・ イベントごとにパーティーをする
- ・ 派手に行なうが、最低限の消費で済ませる
- ・ 近隣の人間と頻繁に交流をもつことで血縁のみならず地縁関係の強化がなされている

VG と LB の比較考察

VG と LB では、同じカルトネーロという貧困者に特徴的な仕事にもかかわらず、収入、仕事時間、仕事範囲、移動手段、たくわえの方法と量、などのちがいみられる。VG が「小規模」「近隣で」「必要に応じて収集に出かける」「蓄えは微量」「売却先の買取額は安い」である一方で、LB では、「カルトネーロ同士、身内や友人間で協力する」「定時」「越境」「車という投資有効性を認識している」ことがいえる。さらに「投資資本を都合するためのネットワークを持っている(投資の有効性を認識している、投資による活動範囲のひろがり、投資金獲得のためのネットワーク共同性をもっている)」ことがわかる⁴¹。あとでより大きな収入が見込めるのであれば投資するという LB の実践は、「一定以上の収益」をめざしている。多少高いけれども借金しても車を買って、より高く買ってくれるところへダンボールを持ち込み、定時に出勤し、質の良いダンボールを集めることがそれにあたる。一日サイクル以上で物事を考えるというこの時間感覚は、VG で見られるような、その日暮らしたな一日サイクルよりはるかに長いスパンでものごとをとらえているといえる。

もう一点いえることは、LB の人々にとっては、VG との比較で言えば、よりおきな社会からくる「人間的幸せ」や「スタンダード」というステイタスイメージがある程度共有されていることである。ジョアナが、「わたしたちは貧しいけれども、心は豊かだと思う。人並みの生活をしていると思えることが重要。」とよく言う。つまり、こうしたニーズを満たす必要から、投資や仕事が組み立てられ、生活戦略としての仕事(定時出勤、車使用、一定以上の収入を目指す)が日々実践される。

ここまで見てくると、LB は貧困の再生産から離陸する可能性があるのではないかと思えてくる。しかし、貧困からの脱却はそう簡単ではない。つぎに貧困から実際に貧困者から中産階級へ抜け出した例をあげながら検討をすすめたい。

2-2. 教育と投資

VG と LB のあいだには投資に関する展望について相違がみられた。しかし、いずれも貧困からの脱却を果たすことは困難であり、いまのところ再生産のループにある。そこで、再生産しなかった貧困者との比較からサンチャゴ市における貧困の類型を暫定的に示していきたい。

ここで示すのは、将来性あるいは教育という長期の投資についてである。

LB のジョアナ

ジョアナにはハビエルという8歳になる息子がいる。ジョアナは彼について、いつ行っても、いつ話を聞いても、成績が良くて本当に頭がいいといっており、実際にそう思っているらしい。あるとき、ハビエルより年下の親戚(中産階級に嫁いだ親戚の息子)が、来年から月謝 150,000 ペソ(約 3 万円)の私立に行くことについて語ったときに、その子は医者や弁護士になるかもしれないという話が出た。ハビエルの将来についてジョアナについてたずねると、返ってきたのは、頑張れば消防士かエンジニアか、という答えだった。たとえ本当に息子に能力があると考えていたとしても、ハビエルが大学を出て医者や弁護士になるという考えには結びついていない。つまり、不確実なものに対しては長期の投資をしないことがいえる。チリでは他の南米諸国と異なり、国立大学でも学費がかかる。

最高峰のチリ大学でさえ奨学金をもらえるのは宝くじに当たるくらいむつかしいといわれている。

ペニャロレン・VG 近くに在住のファン・ムニョス

VG の位置するペニャロレン区に住む、現在は中産階級に仲間入りしているファン・ムニョスは、17歳のときにチリ最南端の町からサンチャゴにきた。実家も貧しかったうえ、サンチャゴでは当初は無職であり、そんなに良い暮らしができるはずもなかった。サンチャゴへ連れて行ってくれたのは看護師の叔母である。ファンの出身はパタゴニア地方で、叔母は観光にやってきたドイツ人医師と恋に落ち結婚した。ドイツ人医師はサンチャゴで開業しており、当時まだ若かった叔母はドイツ人医師の勧めもあり大学へ進学して看護師資格をとった。ファンはその家へ手伝いとして連れて行ってもらっており、身近で叔母の努力を見ていた彼は准看護師を目指し、資格を取得した。そしてサンチャゴの国立障害児病院に就職して働いている。とにかく寸暇を惜しんで働き、「ずるいことをするよりも勤勉に働くほうが結局は儲かる」といった座右の銘をもって、病院の勤務時間外にはタクシーの副業をもち、またJICAプロジェクトなどの手伝いをしている。彼の妻も同じ病院の准看護師であり、医者や専門職に囲まれている。彼らの娘はチリ大学の森林環境保護にかんする学位をとって卒業し、コンクリート会社に就職した。現在は環境庁の環境資源プロジェクトにも参加している。息子はチリ大学医学部の歯科学科を卒業し、開業している。ファン・ムニョスについて以下のことがいえる。

- ・ 身近にモデルがあることで、教育という長期投資の有効性を認識している
- ・ 共働きによって資本を蓄積している
- ・ 低収入だが安定した雇用
- ・ 不要なぜいたくはしない
- ・ 教育という投資に価値をおいている
- ・ 投資のための資源獲得ネットワークを広く持っている
- ・ 仕事柄、貧困を脱出したときのモデルが身近にある

LBの人びとにとって、人並みを実感させる消費財を購入することは不可能ではない。しかし、カルトネーロとして総元締めになれるなら話は別だが、カルトネーロのままでは、これ以上生産性をあげることはまず不可能である。本当の意味で貧困から脱出するためには、違う職種、より生産性の高い仕事への移行か、より高い収入をもたらす雇用の獲得が必要となる。それには教育が必要である。しかし教育への投資観念が欠如しているため、もっと有利な仕事につくための資本の蓄積は困難であろう。その意味で彼らは資本の面と、教育の面と両ブロックされている状況にあるといえよう。

貧困にはいろいろな種類があり、地域や国によっても違う。少なくともチリでは、以上のような様相で貧困が重層化したり多面化しており、複数の貧困が存在する。VGとLB、そしてもともと貧困状況下にあったファン・ムニョスといったサンチャゴ市に存在する複数の貧困について、まとめると次のようになる。

3. チリにおける暫定的貧困の3類型

前節のふたつのスラムについての比較およびファン・ムニョスの半生より、サンチャゴには少なくとも次の3つの貧困にかかわる傾向性があるという仮説をたてることができ、

それらにしたがって暫定的に類型化することが可能と思われる。

1) 貧困の再生産サイクル埋没型

生活戦略＝サバイバル／その日のニーズに忠実で計画性・投資観念をもたない

2) 貧困の再生産サイクル浮遊型

生活戦略＝人なみの生活／効果が可視的な範囲での、短期的投資を行なう

3) 貧困の再生産サイクル離床型

生活戦略＝自立自尊／効果が可視的ではなくとも長期的投資に価値をおく

この3つの型を貧困再生産サイクルからの脱却という視点から見ると、それぞれが異なる段階にあると見ることができ、現在進行形での段階的並存といえるのかもしれない。この3段階の間にある違いとしてもっとも大きいと想定されるのは、時間感覚とそれに伴う計画性のありようである。投資という実践を例にとってみると、埋没型では投資的实践は行なわれにくく、その日のニーズに最大の関心が寄せられる。浮遊型では効果が目に見える短期的なものであれば投資を行い、離床型では身近な成功モデルを参照しつつ、たとえ長期にわたる投資になるとしてもモデルに倣ってみる、という態度の違いがある。

そして埋没型の人びとに見られる時間感覚こそが、われわれ貧困外部にいる人間にとって馴染まないと感じる点のひとつである。そこでここでは、「貧困の再生産サイクル埋没型」と暫定的に分類した人びとに焦点をあて、貧困下において構築される身体について、時間とのかかわりから検討する。具体的な事例検討をまえに分析の視点を提示しておきたい。

4. 「貧困のハビトゥス」

4-1. 「貧困のハビトゥス」の生成・再生産現場

文化人類学における貧困研究では先述のとおり、1960年代のO.ルイスによる「貧困の文化」という概念が提出されて以降、世界各地の貧困の報告と「貧困の文化概念」の妥当性が議論されるほか、「貧困の文化」への批判がなされてきた。筆者はルイスの「調査する者とされる者がひとつの世界を共有する」という貧困者への態度に共感しており、かつ、「貧困者は秩序が混乱しているとか、何かが欠如しているとか、経済的困窮しているばかりでなく、それがあつたために貧困が再生産される」と主張した点を評価すべきだと考える。

しかしルイスが提出した「貧困の文化」とは、貧困の客観的な特徴とその生成条件を言いあてたものであるから、時代の流れとともに書き換えられるべきものだともいえる。筆者が目当たりしているサンチャゴ市における貧困も、またいずれの社会における貧困も、常に変化しているからである。筆者の体験した例であれば、1週間あいだをおいて同じ家を訪ねてみると、部屋の間取りが変わっていたり、夫が行方不明になっていたり、息子が服役していたりする。もっと大きい世界的な流れでいえば、グローバル化という歴史のなかで貧困も近代化・現代化している。テレビはいまや貧困地区の生活必需品の地位を確立しており、貧困者は現金が手元に入ってきたら何よりも先にラジオを買い、金額に応じてテレビを求める。しかしその音声や画面からは彼らの現実とはかけ離れた情報が頻繁に入ってくる。シェイプアップのためのマシンの宣伝ひとつをとっても、シェイプアップの何たるかを貧困者が共有しないことから始まり、そのマシンの金額に驚き、マシンの動

作音が静かだという売り文句の意味がわからず、マシンに必要なスペースは貧困者の生活空間の半分を占めてしまうかもしれないことを知る。

このようなまったく自分たちの生活に馴染まないようなものを情報として得ることは、その情報が有益になるような外部が実際にあるということ、彼らに強烈に認識させる。現実世界と情報の溝が創りだしているともいえる、そうした一連の変化が貧困地区にも起こっている。

貧困の場に身をおいて実感するのは、貧困の生活とはある種の拘束性をもつ反面、そこにはまってしまうと、その場につかたまま人を安住させてしまう引力があることである。こうした気楽さとか奇妙な安心感や、貧困の日常生活の内部で起こっている流動性や、日常生活の積み重ねによって生みだされ、構築されているはずの彼らの感覚や身体性をとらえるには、P.ブルデュのいうハビトゥスという概念が有効であろう。貧困という環境下において構築される身体やその感覚とはいかなるもので、その身体をとおして貧困者はいかなるリアリティを構築しているのか。貧困者の日常実践とそれを通じて形成される心的傾向を内在させた身体に焦点をあてる分析概念をここでは「貧困のハビトゥス」と呼ぶことにする。「貧困のハビトゥス」とは、P.ブルデュのハビトゥス概念に従い、次のように定義できる。

「あるもの（たとえば投資）への価値観や心的状況、貧困者たちが置かれている状況すべてがからみあって行なわれる実践があるとき、それをうながしている背景にあるものを「貧困のハビトゥス」と呼んでおく。ハビトゥスは過去の生存状況から形成され、現在の生存状況を反映し、実践をかたちづくっている（方向づける）傾向性の総体である。」

次節ではVG⁴²の暮らしを例にしながら貧困のハビトゥスについてより細かくみていく。

4-2. 貧困者の生活サイクル：“コシータ”の民族誌

VGに住む人びとの会話においては、特別にたずねているわけでもないのに、「毎日が同じように過ぎていって、何もすることがない」「毎日同じだ、なにかコシータがあるだけだ」と語るのをよく耳にする。彼らがコシータ（ちいさな出来事）というものには、子どもが風邪をひいたことや、応援しているサッカーチームが勝ったこと、犬が帰ってこないこと、自分の体調がすぐれないこと、しばらく夫が帰ってこないことなどがある。こうした日常は貧困者に限らず、貧困外部の人間の生活のなかでも起こりうる。しかし貧困外部にいる者はそのあたりまえのことを、貧困者たちがいうほど「相変わらず同じ毎日」として取り沙汰しない。貧困者は貧困外部にいる者よりも毎日が同じだという意識が強いらしいというのが筆者の実感である。何が彼らに同じ毎日という感覚を持たせるのか、時間にまつわる問題を考えるため、具体的にVGの人びとの生活サイクルをみてゆきたい。次にあげる5つの事例は、いずれもサンルイス地区居住者であり、経済指標からして貧困層または極貧層に分類されるカルトネーロたちである。

2001年6月27日曇り

①(E. D. 28歳 約\$48,000/月 家長で扶養家族3人)

今日は9時頃目が覚めた。冬場は寒くて、用を足しに行きたくなるから早起きになる。エクストラスーパー(スーパーの名前)は開店直後に行ったほうがダンボールを集めやすい。でも今日は昨

日の残りのポロト(豆スープ)を食べて出たから、スーパーに着いたのは昼過ぎだった。大きいダンボールは3つしかなかった。でも帰りにワインのボトルを5本見つけたから良かったな。今日はもう終わりだ。もうちょっとしたら子どもを学校へ迎えにいったら、広場でサッカーする約束なんだ。でもあんまり動くとお腹がすくからそこそこにする。

②(H.M. 19歳 約\$40,000/月 家長で扶養家族2人)

今日は彼女(20歳の同居人)に12時に起こされた。曇っているうちにダンボールを集めて来いっていわれて。雨が降ると寒くなるし出たくない。それに濡れたダンボールはほんとに重たいんだ。ソパイピージャ(揚げパン)を食べながら区役所の裏まで行ってきた。自動販売機の搬入車からダンボールをもらえた。24缶用が5枚。帰りにいつも行くキオスクで中くらいのを2枚集めた。水曜日ほどこもあんまり置いてない。今日は別に予定はないよ。

③(J.S. 40歳 \$約40,000/月 家長で扶養家族4人)

自分は11時に目が覚めたけど、寒いからベッドの中でテレビをみていた。ダンボールはこれから集めに行くかどうか迷っているところだ。行こうとしたら友達がこうして話していたから、それに加わっていて行きそびれているんだ。でも蓄えがないから行くべきだ。

2001年7月4日 15時 小雨

④(R.M. 38歳 \$30,000/月 家長で扶養家族は母親1人)

今日は10時ころ起きたと思う。いつも見ている番組が途中だったから10時半かもしれない、わからない。妻がいなくなったから家に何も無い。時計も持って行ってしまった。(出て行ったのは夏の終わりだったから、もう3ヶ月前かな。ダンボールについては、自分は一輪車しか持ってないから、たくさんは集められない。今日はエクストラに2枚しかなかったから、集めるのをやめて、甥の三輪車を借りて先週集めた分を売ってきた。全部で4,000ペソちょっとになった。今夜は牛肉を食べることもできる。でもまずパンを買わなくちゃいけない。今日はこれからショッピングだ。

2001年7月5日 曇りのち雨

⑤(C.A. 52歳 約\$40,000/月 家長で扶養家族3人)

11時に目が覚めたけどお腹が痛かったから休んでいた。でも雨が漏るから屋根を修理しなくちゃいけない、塞ぐためのビニールをさがしてきた。スーパーに行ったけどダンボールには出会えなかった。これから屋根を直すために友だちを呼びに行くところだ。ダンボールは先週比較的集めたから今週はそこそこでも生きていける。



画像 20 : 日中、コシータの語りをする男性たち

4-3. 貧困下における「時間のハビトゥス」

これらの事例から、VG の人びとの日常的実践の特徴として少なくとも以下の4つについて指摘できるだろう。①労働に限らず、食事や家事全般においても決まった時間に何かをするという毎日のルーティーンがないこと、②時間的拘束がないこと、③労働日と休息日の区別がないこと、④行動範囲はスーパー・友人宅・区役所・ダンボール収集場といったいずれも徒歩20分圏内であること、いいかえると労働の1サイクル=労働への集中が持続する目安、である。

学校教育を相対的に早く脱落してしまいがちな彼ら⁴³は、資本主義社会に見合った規律訓練をうけておらず、また、定職を持って働く親や近隣者を持つことも少ない場合が多い。子どもが学校へ行かなくなる理由には大きく2つあり、ひとつは制服のサイズが合っていないかったり、汚かったり、必要な文具がなかったりするため、もうひとつは、子どもが学校で何をするのにも「もたつく」からだという。時間内に食事や作業を終えられないことで教師に注意を受け、劣等生のレッテルを貼られるうちに通学が面倒になる。生徒数が多いために2部から3部制で通学している子どもたちは、朝起きて学校へ行く、というルーティーンがない場合も多い。子どもだけでなく貧困の暮らしをする人びとの毎日の生活は「気まま」に過ぎ、起きる時間はまちまちで、気分で行動を決められ、時間に拘束されることのない毎日の繰り返しから形成されたハビトゥスを身につけていると考えられる。それが「貧困のハビトゥス」のひとつとしての「時間のハビトゥス」である。

ダンボールを集めれば最低限の食料は確保できるから、とくに仕事を探すということはなく、彼らなりの仕事をしていない時間は仲間と雑談し、遊ぶ。差し迫って必要がない時は仕事よりも他を優先させ、明日に向かって余剰を蓄積するような実践とはならない。したがって、昨日より今日、今日より明日の生活を変えようという努力が企てられることは稀になる。こうした蓄積の不在は、貧困下における時間のハビトゥスによって産み出され、蓄積の不在によってまた時間のハビトゥスが形作られ、ハビトゥスはより強化され、ここに循環ができる。こうしたプロセスによって毎日が同じだという感覚が生まれているのではないだろうか。

ブルデュは下層プロレタリアートは夢を見ることしかできず、その想像と現実の間の溝が大きいと述べているが、チリの現実では、蓄積を必要とするような職業に就いて金持ちになるといった非現実的な夢について言及することは少ない。彼らの夢をたずねたときそれは極めて現実的で、天井を張り替えられればいいとか、病気になれるような暇が欲しい、といった手に届く範囲のことを答える。こうした態度もおそらく彼らの、蓄積とは無縁に近いところにある時間感覚に関係しているのではないだろうか⁴⁴。

4-4. 再生産概念としてのハビトゥス

以上のような時間感覚を想定すると、もし何か貧困の再生産サイクルに働きかけるような新しい導入物や参照物があったとしても、彼らの時間のハビトゥスは容易にそれを受け入れないように見える。VGに住む20歳女性KはVGの男たちについて次のように話す。

「とにかく怠け者なの。好きなときに働くのがあたりまえだから。機会があれば働くというアイデアがないの。ソーシャルワーカーが仕事をもってきてくれてもそれを利用しないの。だからソーシャルワーカーだって飽きちゃってもう持ってきてくれなくなる。好き

なのよ、こういうふう生きるのが。貧しい人間の全体ではないけど、一部でもない、多くがそうね。頭が閉じちゃってるのね。」と。

これはたんに雇用機会を増やしただけでは、貧困の解消につながるわけではないことを示している。貧困克服計画を立案する時には、貧困者の時間のハビトゥスを考慮した内容が必要であろう。新しい生活条件を受け入れる時に生じるさまざまなコスト——決まった起床時間や定時出勤、8時間労働に慣れる努力や理解の必要性など——を払ったとして、本当に貧困の克服が達成されるのか、それはどのように幸福な生活なのか。これまでの不便でも慣れた生活と、あらゆる面で予測不可能な「貧困克服」の魅力との綱引きの結果、より安易な方向へ、つまり過去に経験してきた「経路依存」⁴⁵の方向へ流れてしまう可能性が高いのは自然なことでもある。貧困に生きる人びとは、貧困の克服とは良いものだとか聞かされても、いざ選択を迫られたとき、予測不可能ななにかに投資するよりは生存可能な従来の暮らしを選んでいる。その意味では、この経路依存という傾向性も、貧困者と外部とのかかわりをブロックする理由となっている。

そして彼らが経路依存する大きな要因として考えられることの一つに、「貧困の克服」が彼らを魅きつけない点を指摘できる。彼らには、いまある形での「貧困の克服」が必要ないのかもしれない。彼らは最底辺といわれようと、多くを望むことができにくくろうと、少なくとも彼らなりの方法で生きていくことができる。むしろ、貧困を克服せよと提言するのは、貧困の外部にいる人間である。そうだとすると、ここまで述べてきたような、貧困下に育まれる時間のハビトゥスとは、彼らの生き方そのものを形づくって、受け入れにくいもの(たとえば貧困克服計画)を取り入れずに、彼らの生活の仕方を再生産していくものといえる。そして、その再生産には時間のハビトゥスが大きくかかわっている。

文化人類学者の田辺繁治によると、ブルデュはハビトゥスという概念をとおして、「文化的に構築された環境に対する身体をもった個人の相互作用に光をあてた点では、文化を単純に集合的、社会的な表象とみなす従来の社会学をはるかにのりこえている」が、しかし「ハビトゥスが身体のなかにどのように刻み込まれるかはほとんど分析されることがない」[田辺 2003 年]。つまり、ハビトゥスというブラックボックスに入れてしまった、という。たしかに、ハビトゥスを想定した以上、ハビトゥスとそれをとりまく日常の出来事からめて人間や社会をとらえていく必要がある。

4-5. 「出来事時間」と「時計時間」

本節では、VG の貧困者たちの日常を具体的に考察することによって、その日常的実践をとおして構築され、再生産される時間に関するハビトゥスを検討してきた。この貧困者のもつ時間感覚の傾向を表現する時間のハビトゥスのことを、「出来事時間(レーヴィン 2002 年)のハビトゥス」と呼びたいと思う。社会心理学者のレーヴィンによれば「出来事時間」とは、「行動自体の成り行きにしたがって組み立てられる時間」をいい、「人間が、時計に示された時刻を使って行動の始まりと終わりを予定する」ものを「時計時間」という。

VG での日常には、出来事時間に沿った生活の流れがあり、出来事を中心に実践が行なわれる。目覚めた時が一日の始まりであり、雑談をしておえたときが仕事への行き時であり、腹痛がおさまったときが起き時なのである。これに対して、資本主義社会の主流に適応して生活しているわれわれが馴染んでいるのが「時計時間のハビトゥス」である。

もちろん、これらの出来事時間と時計時間のふたつのハビトゥスははっきりと二分されるものではない。われわれの日常を考えても、混在可能な傾向性である。したがって、「出来事時間のハビトゥス」それ自体が貧困埋没型の必要条件ではない。しかし「出来事時間のハビトゥス」が再生産をくりかえして傾向性を強化し、そこに住む人びとの感覚の主流をなしてVGの貧困空間を形づくる、ということには差し支えないだろう。主流の違うふたつのハビトゥスの出会いとすれ違いを具体的に見るとすると、次のような場面がある。

ペニャロレン区役所のソーシャルワーカーは週に1度以上、必要に応じて担当地区の家庭訪問するほか、担当する家族をオフィスに呼んで補助金手続きの申請補助をしたり、相談を受けたりする。そのため、たびたび貧困者に「何時にわたしのオフィスにきて」という約束をする。しかし、貧困者たちはすっぽかすか大幅に遅れてくることが多い。彼らは友人宅にいたままこないか、途中で夫の参加する草サッカーを見ていて遅れたりなど様ざまな理由である。ソーシャルワーカーが時間を指定した裏には、その時間であれば手続きが可能である、という意味が含まれており、そのことを彼らに伝えても繰り返し守られることのない約束がなされている。

貧困者にとっての物事のプラオリティの順序は、ソーシャルワーカーが思うものとは全く異なる。それは貧困下に育まれたハビトゥスによって方向づけられているからである。

先のKの話のように、機会に応じて働くということをしなないのも、この出来事時間ハビトゥスに関わるといえる。出来事時間に慣れた身体にとって、時計時間で生きることは息苦しい。先に述べたように、学校教育や規律訓練とは離れたところでの生活では時計時間を身につける機会も少なく、さらにVGのような貧困の再生産サイクルに埋没した環境にある貧困下においては、時計時間で生きることの無意味かもしれない。貧困の日常において、われわれが「気まま」とか「自由」あるいは「自堕落」と呼ぶ、時間的拘束のゆるい生活が存在しているのは確かだが、その善悪を説くまえに、何が貧困であり、何が貧困の克服であるのか、根底から考え直すことが必要である。

貧困の克服というものはおしなべて外部の人間が言っているという点からわかるのは、本研究を含めて、貧困についての研究は資本主義的視点のバイアスから逃れにくいということである。先に本節の冒頭に下線で示した日常実践の特徴にかんしても、「〇〇がない」という否定的な言いかたになるのは、資本主義的価値観にほかならない。たしかにG地区では、SWのもってくる就労訓練プログラムを試しても時間が守れなくて脱落する人が多い。また刑務所帰りの住人は「大統領のような分刻みの生活がつかつた」という。実際にそんなに忙しいことはない壁の中の生活であっても、感覚の違いを認識するのに十分な資本主義的システムとの接点である。時間感覚に差異はあっても、本来そこに優劣はないのだが、ゆるいテンポの人びとは矯正されることが必要とされ、システムに適応できないと自堕落のレッテルを貼られてしまうのである。このように固定化した価値観のもと「貧困」は自明化しているといえる。

われわれ時計時間になれた身体を育ててきた人間は、彼らに特徴的な悪を見出し、その悪からの脱却のさき、時計時間のくらしを描いている。貧困とは悪であるのか、その根本を問うと同時に、悪とされる場面を検討し、接触可能ながらも、われわれの想像とは「別の」世界を生きる貧困者をとらえなおし、いっぽうで、とらえそこなっている我々のことも考えねばならない。

第2章 「貧困空間」の人類学

貧困の現状はサンチャゴのようなある国家の一都市においてすら、先に見たような複数の様相を見せている。これまでの貧困研究では、「貧困」概念自体が強者の論理にもとづく不自由な側面を持っていたことに加え、対象としての貧困なりスラムだけを一極集中的に見ていたことに気づく。だが、サンチャゴについていえば、もはや貧困は縦横無尽に都市を覆っており、貧困も貧困者もグローバル化している。すなわち、全体の部分として貧困を見ること、それが本章での提案の骨子である。

貧困者が生活の拠点とする貧困地区とは、貧困のハビトゥス（暮らしと環境に見合った動作や身体知、身体配慮）を身体化させる環境であり、そうした身体によって形作られたものでもある。環境に適応した身体的・感覚的要素を強固にする循環があるために閉じているように見えるが、じつは閉じることのない貧困空間の母船のような場所と考えられる。グローバル化がすすむにつれて、貧困者は生活拠点ではない富裕地区へ資源を得るなどして、都市を浮遊するかのよう覆う貧困は、この母船から伸びたアメーバの偽足のようなものとしてイメージされる。そのように都市の貧困と貧困者をとらえたうえで、貧困の母船的地区はどのような歴史的深度をもって形成され、そこで多くの時間を過ごす人びとはいかなる身体性を育んできたのか。それは貧困の母船地区の文脈と、そこに入り込んでくる文脈をつぶさに見て、考えてゆくことでしか可能にならない。われわれの未来が過去、現在と切り離せないように、貧困母船地区で多くの時間を過ごす貧困者もまた同じように切り離せない過去、現在、未来という時間の流れのなかに生きている。そのあたりの生の多様さや複雑さ、彼らの暮らしの文脈や「環境世界」をあらためて見なおしたい。



画像 21：卵のケースで組み立てた壁

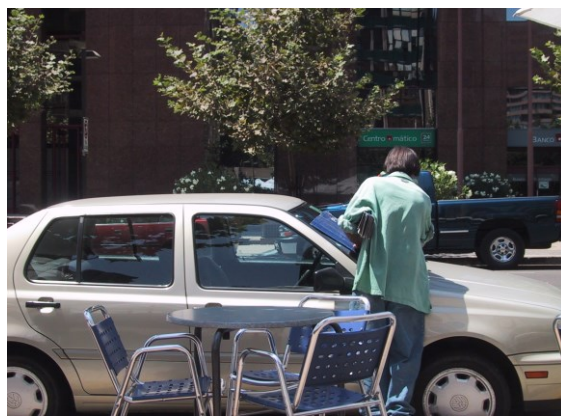


画像 22：カルトネーラたち

1. 「貧困空間」について

チリの首都サンチャゴ市の路上では日々、貧困者たちの生業が繰り広げられている。ここ数年で上流地区に乱立しはじめたカフェで流行のサラダ・ランチをする富裕階級の女性たちの傍ら、自治体が極貧層向けに斡旋する超短期アルバイトのユニフォームをきた人が道を掃いている。オフィス街のビルに出されているダンボールをリヤカーで収集して廻るカルトネーロがいる。家政婦の仕事を終えてスラムにある自宅へと戻る道すがら、乗り合いバスを待つ暇つぶしに物乞いする人がいる。あるいは、道端の緑を保つために設置された、高級住宅街ならではのスプリンクラーから 10 ガロン級のボトルいっぱい水を注いで、自宅用と近隣に安価でわけるために持ち帰る人がいる。ピエロ風の衣装をまとう青年は、

信号が赤になると車道に躍り出て大道芸をはじめ（画像 23）。高級レストランにやってくる車の駐車誘導を自発的に請け負う人たちは、車主が戻るまで番をして、ハンドルが熱くならないように日除けのサービスも怠らない（画像 24）。物売りは、飲食物や農産物といった定番商品に加えて旬のものを扱う。独立記念日前には国旗、ローマ教皇逝去の際はそのプロマイド、日本の女子高生ファッションで一世を風靡したロシアの TAT00 の、遅れてやってきたブームに乗じたルーズソックス、様ざまな DVD の海賊版、オリンピックの非公式グッズ、ハロー・キティならぬアロハ・キティ……。彼らの、グローバリズム下の流行にたいする敏感さは目を見張るものがある。これらの様ざまな都市雑業は貧困者たちが編み出し、いうまでもなくグローバル化とともにあり、しかしながらローカルに根ざした趣向とニーズを汲みとっては、素早く消え、新たにうみだされ、工夫を重ねて部分的に競争社会に顔を出しつつ続けられもする生業である。彼らにとって都市のどこでもが暮らしのフィールドである。



画像 23：信号待ちのあいだの芸とチップ回収 画像 24：貧困層の主要な仕事、車守り

貧困者は都市内部を縦横無尽に移動し、都市は貧困に覆われる。貧困は浮遊するかのようには漂い、ある場所では沈殿し、貧困者はその浮沈の濃淡を織りなすアクターでもある。彼らの都市における経験は、彼らの身体が「都市化」するプロセスともなる。都市化といっても、進歩史観的な文明化ではなく、都市に見合った身体のあるかたをすること、都市に育まれている、ということである。詳しくは本稿をとおして試論するとして、この彼らの身体を育むサンチャゴの都市空間を「貧困空間」と見たてたい。現象する「貧困空間」の詳察によって目論むところをより説明するには、次の引用が適切だろう。

「都市の理論化とは、われわれが生きているポスト工業化、高度資本主義、ポストモダン期の変化を理解するのに欠かせない一部である。日常実践の現場としての都市は、そうしたマクロなプロセスと人間の経験の織りと肌触りといった様ざまな結合について貴重な見通しを与えてくれる。都市とはそうした結合が見られる場であるだけでなく、それらのプロセスと人間への影響が強くと現れるところであり、そうした結合がもっともよく理解できる、そういう場なのだ。“都市”とは、都市生活の日常実践の文化的で社会・政治的なあらわれの具体化ではなく、それらのあらわれが焦点を結ぶ場なのである。」(Seta M. Low 1996 : 384)

ロウは上述の都市研究以前に、中米のネルビオスといういわゆる民俗病についての論考において、世界各都市での病み方の比較をとおして、それが社会政治的背景をもって身体に現象するということを論じている[Low 1994]。個人の身体感覚の間文化的な多様性が苦痛についての社会政治文化的状況と相関する、というその主張がこの引用研究の下敷きとなっているとすれば、ここでいう「人間」を「身体」とおきかえて差し支えないであろう。彼女は「身体は自己と社会の気まぐれな仲介者である」ということも示しており[Low 1994 : 157]、それは貧困者が都市においてするグローバル化に連なる経験を身体化するうえで取捨選択し、作り変えたり、飽きたりしながら「気まぐれに」（しかし人の日常としてはあたりまえの）暮らしを営む現実とも通じる。サンチャゴで現象する貧困空間における身体がいかなるものであるか、とりわけ都市の路上において育まれる貧困者の身体について、マクロなプロセスと肌感覚との相互関係を焦点に述べていきたい。

2. 上からの「下からの視点」：‘善意’の意図せざる暴力性

チリ国家連帯のプログラムにおいて「もっとも極貧状況にある家族」として選出される対象家族は、企画協力庁(MIDEPLAN)の用いる家族カルテ⁴⁶がもとになっている。それは開発者側からみれば「住民視点から」あるいは「ボトムアップ」を象徴するものでもある。カルテには細かく様ざまな記入項目があり、居住者それぞれの年齢や家族構成、収入や仕事、家屋の素材や状態、ガス・水道・電気の状況、それからソーシャルワーカー(以下、SW)が訪問の時々聴取した住民の悩みや日記などの情報が盛り込まれている。その内容によって貧困度の点数がつけられ、下位から順に連帯プログラムの対象となる。それはたんに外から見た視点で作成したカルテを用いてボトムに暮らしている人を選んでいるにすぎず、住民視点をいかしたプログラムの構成、ボトムから出た意見を取り入れた政策づくりということではない。

例をあげるなら、チリには貧困者を対象としたいくつかの補助金制度がある。補助を得るにはいずれも数多くの手続きと申請書類が必要となる。総収入やカルテの点数基準などの被受給資格をクリアした上で、申請の理由や獲得後の使い道などを盛り込んだプロポーザルが要求され、それは日本のアカデミズムにおける助成金申請と同様のタイプのものである。文字といえは自分のサインしか書けず、それで支障のない状況下に生きてきた人びとには、申請書を記述する技術はない。また、そうした申請機会が貧困者にとって即金獲得という実質的な価値がある一方で、獲得するには「われわれは貧困者なので困っております」という形で自らの状況を説明し、「給付されたら子どもの教育のための環境を整えるのに利用します」と書く必要がある。これは、字が書けなくても暮らせる空間に、支配的な集団で当然とされる書類システムが、ひいては外部文脈が侵入しているといえよう。給付金という魅力的なものを享受するためには、これまでかかわりのなかったシステムであっても従わざるを得ない。さらに自らの窮状を訴えるためには、外部でいわれている「貧困」という表象とイメージを用いて自分たちを表現することとなる。外部から名づけられた「貧困」と自らを認めていくことで、「貧困」はやはり悪であると、公的な書類に記載された内部発言によっても裏づけがなされ、真実のように語られることになる。こうして、チリにおける貧困者はダブルスタンダード状況におかれる。「貧困」の外部が社会の中心的構造になっているがゆえに、幸せをはじめとするあらゆる価値の基準を外部からもたらそ

うとする。この外部文脈の侵入が、意図せざるして暴力的であることは、‘善意’にもとづく介入であればなおさら見落とされがちであろう。

3. しあわせの外部性：「第一世界」の文脈の侵入

1981年の経済学者 A. センによるエンタイトルメントについての議論以降、様々の分野における貧困研究をごく簡単に要約すると、貧困者は能力を発揮する場を剥奪された状態にある。それゆえ、^{ケイパビリティ}潜在能力を高め、Well-being にむかうための選択幅（＝参加機会や情報など）を増やすことが貧困克服のための方法である、ということになる。潜在能力とは、人が自ら価値を認める生き方をできるかどうか、個人の生活を真に豊かにするためにどんな行動をとるか、それを行なうための能力のことである。潜在能力と選択の幅は、それぞれの人間の、現実とのコミットメントの仕方によって形成された規範や、価値観によって決まるとされる。したがって、貧困の克服のためには、貧困者に「投資」をして彼らの潜在能力と選択幅を増やすことだという（セン 1999, 2000）。

この潜在能力アプローチが個人の行動に重きをおいた点は、合理性や統計数値を重視しがちな開発学や経済学はもちろん、人類学にも有用な概念かもしれないが、どのようにしたらその潜在能力を高めることができるのかを指示しない点では、曖昧な概念である。それは、現実とのコミットメントの部分の詳細や、コミットメントの仕方に関心があるわけではなく、結果として形成された「好ましくない」規範と価値観に目が向けられているために、その指示にも関心が向かないのであろう。

ここでとりあえずセンにしたがって、「貧困」をチリ的事情に即して眺めるならば、次のことに留意する必要がある。①人間は Well-being を求めるものだという前提にたっているが、そもそも生活する環境や個人によって人間の幸せはちがう。貧困の克服といったときに、貧困層からの脱却を幸せというのか、あるいは貧困の状況下で新しいテレビを買うなどの実質的で身近なよろこびをいうのか。安易に資本主義的視点からの幸せを述べてしまいがちなことへの留意。②選択幅を増やす機会を拡大する必要があるとしたら、どのような機会をどのように増やすのか、ともに考えるのが大事なのか、そのありうる方法とはいかなるものか。そして、③彼らの潜在能力はなぜ低いのか、どの点で誰の視点から低いとされるかを考えること。これらの点をチリでの具体例に照らして、以下で考えてみたい。

前章でもとりあげている筆者の調査地である VG は市内でも指折りの極貧地域だけに、チリ政府をはじめ、NGO 団体や国連によって、いくつかの貧困克服プログラムが実施されてきた。VG には様ざまの様相をした家屋があるが、一般的に薄い材木で組み立てられて大枠をつくり、その間にダンボールを挟み込んだり、卵の入れ物の厚紙を重ねたりして壁を造り、必要な箇所を塞いでゆく（画像 21）。屋根にはトタン素材もみられるが、多くは発泡スチロールの上にビニールを重ねている場合が多い。床は踏み固めたとはいえ、土がむき出しのところほとんどという状況である。

貧困克服プログラムでは、そうした家屋に必要な資材や机、椅子を寄付しようという具合に計画される。貧困からの脱却には教育が不可欠であり、勉強ができる環境としてまず机や椅子を、そして家族が揃って食事する場所を、という発想である。しかし実際にそれらを寄付したとしても、しばらくするうちになくなっていることがある。当面の生活費を

都合するために売ってしまった場合もあれば、ドラッグを買う資金として換金することもある。そうした現実直面した投資家は、なぜ机を売ってはいけないのか説明しようとするとき、彼らにとって何がしあわせなことなのか、という疑問にぶつかる。毎日が同じように過ぎていく日常において、油で揚げたパンや豆を潰したスープが定番の生活に肉を添えることのほうが彼らの現在にとってよりしあわせなのだとしたら、どのように彼らに説明することができるだろうか。貧困克服計画では、目の前のしあわせをがまんして長期的な見通しを立てろというが、子どもが学校に行ってそこで教育を受けたとして果たしていまの生活が変わるのか。その是非はともかく、投資者がもたらしたいと描くしあわせ——「第一世界」の文脈におけるしあわせの基準を投影してよいのかどうか。

個人が「潜在能力」をもつにいたる過程やそれを後押しする諸要因を考えずに、「潜在能力をいかに資本主義的にするか」だけを問題にするのでは、A. センの論理どおりに貧困が克服されることは難しい。貧困者が、彼らの文脈において永遠に「机を売る」選択をし続ける可能性もありうる。だとしたら、何度投資を繰り返したとしても政府の目論み形では、貧困は克服されないだろう。あらためて、彼らの感じている現実はどういうものなのか、いかに現実とコミットしているのか、彼らにとっての自由やしあわせとは何なのか、彼らの生きる文脈を汲み取ることが必要であろう。その場合には、貧困といわれる暮らしの外部からの特権的な物言いも、本質化されている「貧困」像も、第一世界といわれるところの住人にとってのしあわせの要件や資本主義的価値観もいったん棚上げして考えてみなければならない。

世界レベルで開発にかかわる人間や政策立案者など、いわば「貧困」を外部から見つめる人びとは、自らがたどってきた道筋がほかの全ての国にとってもただ一つのコースなのだと思っており[小田 1997:61-62]、道筋のはじめの方にいる彼らは悲惨で悲痛な面持ちの笑わぬ人びとだとイメージし⁴⁷、それを悪だと考え、その状況にある彼ら自身が「脱出」を望んでいると信じる傾向にある。貧困の暮らしは、世界に通用する大都市サンチャゴ内部の「底辺」という意味で「第四世界」として位置づけられもする。わかりやすく序列化した貧困のとらえかたでは見落としてしまう「第四世界的状況」⁴⁸に暮らしているかもしれないにもかかわらず、である。貧困者はそう単純に生きているわけではないのだ。あたりまえに悩み、まじめだったり気まぐれだったり、適当だったりしながら彼らの文脈のうちに生きている。ダブルスタンダード化に応じて、各個人の属性に応じて、複数の文脈を生きているとも言える。ということは、複数文脈をもつ個人として曖昧さも持っているということなのだ。

センとともに貧困の定義が多様化、複数化されたとしても、なにをもって貧困と言うかの基準をつくるのは外部の人間であり、当事者たちの見解や生活実感や、複数の文脈に生きるさまは参照されにくい。それは、外部の人間の手によって基準がつくられ、「解決」策がつくられ、それに基づいて施策や援助が行われ、評価されるという閉じたシステムといえよう。

このシステムは、不衛生な環境や犯罪の多発と再犯、怠惰な生活や無教養などといった資本主義的スタンダード（資本主義的価値観にとっての世界が満たすべき要件）にあてはまらないような事柄を貧困者の負の属性として特徴づけ、一方でそれらを是正するべく連帯や統合、社会的排除からの解放という名の下に救い出そうとする。所得が絶対的に不足

しているという場合の貧困は悪であるとしても、そこに生活する人びとが悪なわけではない。にもかかわらず、資本主義的ではないという理由から人びとの思考やハビトゥスを丸ごと問題化するのが、現行のシステムのやり方といえよう。

あるとき、高級地区で廃品回収をした帰りの親子が幹線道路で事故に遭い、9歳の息子が亡くなった(2003年8月12日 *La Tercera* 紙)。記事によれば、ダンボールを積んだ荷車を引いていた親子はバスの前におり、バスを追い越した車が息子に接触した。ここで記事が問題にしたのは、加害者の不注意や、荒いといわれるサンチャゴのドライバー問題ではなく「貧困者の子どもの労働」であった。「こうした悲しい事件につながるような子どもの労働は良くない、やはり貧困は撲滅すべきである」という趣旨のその記事は、世間一般にごくまっとうな記事として受けとめられる。だが、この出来事からまさか子どもの労働を問題化されることなど、息子を亡くした父親は考えもしないであろう。こうした記事が「悲惨で悪しき貧困」をイメージづけ、逆にイメージが記事を書かせている。まずは「貧困」に「」がついていることに気づき、取りはずすこと。そこから思考をはじめることでは「貧困」の問題は開かれないであろう。

第3章 「貧困空間」の民族誌

サンチャゴというグローバルな都市に生きる貧困者にとって、都市内部での空間的移動はもはや不可欠であり、自然な営みである。先述のとおり彼らの営みには、客が好みそうなものを思案し、対応する力を発揮している。世界の動向に敏感で、クライアントの好みを予測した反応は、柔軟かつ流動的である。この都市のあらゆるところに浮遊するようにあらわれている貧困について、これまでの人類学が馴染んできた「貧困の文化」という固定的で静態的な貧困イメージの払拭をねらいつつ、ここでは「貧困空間」の民族誌を描きたい。

1. 貧困が沈殿／浮遊する空間としての都市

チリ国家連帯の支柱となっているプログラム実施のために、選定された「貧困」者たちを訪問するSWは次のように苦言をもらす。

「頭にくる。毎週家庭訪問をするけれど、冬はとくに11時だろうと昼だろうとベッドから起きもしないで、体を掻きながら「今日は何？」という調子。わたしは朝6時から用意して来ているのに。(彼らに)規則正しい生活なんて言っても仕方ないし、する必要もないと思う。プログラムが完全に間違っていて役に立ってないのは確かで、政治的に必要なだけ。」
(2005年10月ロ・エスペホ区SW談)

ソーシャルワーカーが怒る気持ちもわかるが、起きる必要がないものを責められる貧困者の立場もわかる。起きる必要がないのが貧困沈殿空間である。貧困のハビトゥスを身体化させる環境であり、そうした身体によって形作られたものでもある貧困地区とは、貧困濃度が濃く、沈殿しているかのうようである。しかし逐次その要素は更新されながら滞留している。したがって、環境に適応した身体的・感覚的要素を強固にする循環があるために閉じているように見えるが、実際には決して閉じることのない貧困空間の母船のような場所である。都市に浮遊している貧困を、この母船から伸びたアメーバの偽足のようなものとしてイメージしてほしい。貧困者は親しんでいる環境や感覚を身にまといながら都市の中を移動し、グローバル化に対応するなど必要に応じてその形を変え、グローバルな要素をその体内に摂りこみながら母船へと戻って融合する。摂りこまれた要素は母船のローカルな条件に応じて取捨選択される。貧困空間とは、貧困地区という物理的な場所そのものを中心的基盤としながらも貧困者の身体性や流動性に伴って、ときにアメーバ単体として、あるいは集合体として都市を覆っているのである。

2. 路上で育まれる身体

貧困空間の母船における生活の中心は路地(*pasaje*)すなわち路上である。そこにはゴミが散らばり、交通事故に遭った縁者を祀るアニミータ(*animita* 小さい祠)があり、犬やネコや野良ヤギがおり、住む人が素足で過ごし、夏には子どもたちが水浴びをし、クーデター記念日には若者たちが悪乗りして騒ぎを起こす。ときに友人同士や家族のけんかが起こり、日々の退屈のぎや、口うるさい妻や彼女から逃れた男たちが屯するところでもある。路上で展開される話の多くは、知人友人の噂話や、草サッカーやプロサッカーについて、あるいは恋愛などの日常的な世間話だ。筆者が付き合っていた路上の人びとは、どういうわけか同じような意見と態度をとりがちで、たとえば「このあいだ来た日本人の女の子はか

わいいと思う？」と問いかけると、「かわいい」とひとりがいえば「そうだ、そうだ」といいながら、批判的意見や対立を示して議論を交わすよりも同調し、その共有感覚に満足して酒を注ぎあって盛り上がる。話の内容は二の次で、情報伝達や意思疎通以上に、関係形成・関係確認に役立っているこれらの会話は、意味や価値の共有による連帯とともに、空間的で身体的な連帯をも育んでいるようにみえる。路上とは、そうした連帯や社会関係を基盤とした暗黙の了解のようなものが共有され、個々の価値観が形成される場であり、また、アメーバになって摂り込んできた素材が吟味され、ローカルなものとして根づく場でもある。言い換えるなら、路上とは貧困者にとってもっとも身近な共同性の場であり、準拠枠といえよう。路上に面した家屋には玄関や扉という空間的な境界がないわけではないが、実質上は鍵の存在しない各家屋に親戚・隣近所の人びとはあいさつなしで自由に入ることができる。そのことが路上をプライバシーが曖昧に開かれた環境にしており、そこに生まれ育ち、暮らす人びとは、それに応じた個のありかたと人と人との関係性を身体化しているのである。こうした個のあり方は、個室を与えられて育ち、家族内においてもプライバシーが尊重されるような環境におけるものとはかなり異なったものになると推測できる。なかでも、個人間の境界や連帯のあり方の差は大きいであろう。そこで、このような社会関係の核としての個人について、貧困者の個人の身体配慮について取り上げたい。

まずいえるのは、G地区における肥満率は5割を超える⁴⁹という数字の通り、太った人が多いこと、さらには、歯がない、視力が弱い、素足率が高い、爪が硬い、口笛がとおる、などである。こうした身体で暮らす背景を考察するために爪への配慮を例にとってみよう。彼らは爪を切らずに削る。栄養の偏りに起因するのか、多くの成人の爪には筋や溝がいくつもできており、手の洗浄頻度が低いことで溝に汚れが入り込む。爪の周囲の皮は厚くタコになり、爪は硬いうえに皮に食い込んでいるので通常の爪きりでは歯がたたない。したがって彼らは爪が伸びるとヤスリのようなもので削る。それを重ねていくうちに爪の断面はつぶされて徐々に厚くなる。すると肥厚した爪の下にまた汚れがたまることになり、そのようにして日常的に黒く硬く分厚い爪ができあがる。これは爪切りがない生活だからそうなるのでも、配慮を怠っているわけでもない。爪切りでメンテナンスする暮らしと比べて配慮の仕方が違うのである。

もうひとつの端的な例として、歯がない人が多く見受けられることがある。それを欠損ととらえるNGOや政府貧困克服計画では、差し歯を限定数提供したことがあり、G地区にも、EUの行った“極貧克服プロジェクト2002”の一環で差し歯をすることになった人びとがいた。該当者には診療ののち、必要最低限の数だけ差し歯が施された。それから間もなくして、差し歯になったある男性は、歯に詰まった食べかすを気にして指で除去を試みたあと、手近にあった釘を楊枝がわりにし、口内を傷つけた。そして傷口から雑菌が入り込んで膿んでしまい、結局4針縫うこととなった。そのとき、歯科医やSWなどの開発側の人間は、その男性が不衛生な手で口内をいじったこと、日ごろから手が汚いこと、釘を楊枝にしたことなどの落ち度を指摘した。

ここでの問題は、開発者がこの一連の出来事の原因を男性の落ち度とした点であり、また、歯がない人には歯を与えるのが当然だとする思考である。もちろん歯をほしがる貧困者も多くいるが、歯はあってしかるべきものという「あるべき姿」を描くことは、同時に、貧困者が今後われわれに近づくべく「歩むべき姿」＝脱貧困イメージを描いていることに

ほかならない。人の暮らしとは、その人が身を置く環境を体現し、その身体性がまた環境と生活空間を形成しているのに、仮にそうだとわかっているにも、貧困者の暮らしとそこに形成されている空間や環境は「排除対象」ゆえに無視されている。



画像 25：チリ国家連帯プログラムでは歯のほかに、弱視矯正(メガネ) プロジェクトも実施され、その一環でメガネを試着する VG 居住の男性

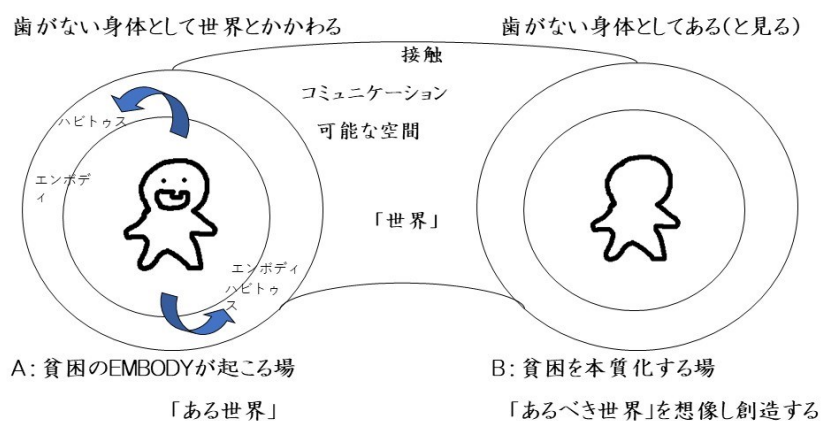
3. 「ある世界」と「あるべき世界」：人はどこから来て、どこへ行くのか

この貧困克服プロジェクトにもその一端が見られる「貧困」の問題とは人間＝身体の見方、世界の見方にかかわる問題である。開発者や貧困の母船地区外部の人間にとって、貧困者とは接触可能かつ同時代に生き、そこにいる存在である。キリスト教的にいうなら兄弟であり、国家的にみれば同じ国民である。であればこそ連帯しなければならないと考え、彼らを救うことは自らの使命だとする人もいる。そのことが、貧困者＝自分たちに近づけるべき人びと、として自明化しているのが現状なのだ。

貧困空間が世界を覆っているように、現代世界のとくに都市においては、きれいに切り分けられるような固有のものは存在しない。イデオロギーとしての「あるべき世界」というのはどの世界にもあり、一方でイデオロギーにそぐいきれない現実の「ある世界」が存在する。関根はこの「ある世界」にこそ現実性と個別性へむかうベクトルがあるのだといい、そして、研究者自身がそこから思考することが個別性を持った一人の存在としての人類学的実践の語りともなるという[関根 2001:323]。本論文における貧困空間という視点の試みは、貧困の母船地区の「ある世界」に降り立った筆者の、貧困という暮らしの現実とそれが覆っている空間をよく見る方法の模索である。そして、それと同等の重みで、われわれ自身とわれわれの「ある世界」を問い直す実践でもある。なぜなら、「貧困」問題で厄介なのは、開発者や貧困母船地区以外の人間が貧困者の未来に描く「あるべき世界」が、自分たちがすでに実現したという意味では「ある世界」だからである。優劣や支配・被支配関係がかかわる場合の「ある世界」と「あるべき世界」はすでに分かちがたく交錯しているのであり、その世界の切り取り方や他者の捉えかたには、われわれが自らを問わないでいられる認識論のゆがみが見て取れるのである。貧困母船地区にアメーバが取り込んだものが根づいているとき、実際はそれ相応のローカル性を帯びて存在しているのだが、われわれの「ある世界」のものと同通っているために、「われわれの現在」と「貧困者の近未

来」は当然のように重ねあわせられ、無前提に「同じ世界を生きている」という認識となっているのである。重要なのは、貧困母船地区はどのような歴史の深度をもって形成され、そこで多くの時間を過ごす人びとはいかなる身体性を育んできたのか、これから描く未来はどのようなものであるのかを考えることであり、それは貧困の母船地区の文脈で考えてゆくことでしか可能にならない。「ある世界」からはじめること、あるいは真に「下から見る」ということは、言い換えれば、そこで育まれた歴史と身体を、あるいはそこだからこそ育んだ歴史と身体を、実感とともに踏まえることであろう。そして、この実感や生きた人間らしさを含めた現実の「ある世界」からはじめることとは、結論であると同時に始点でもあり、なによりもプロセスだということを強調しておきたい。

貧困概念図



【図1】

このある世界と、あるべき世界について示したのが図1である。ここでは実際にプロジェクトとして実施された「歯」を例に考えている。研究者や先進国の側に位置する、筆者を含む貧困ではない人びとがいる空間をBとして、貧困者たちがいる空間をAとする。AもBも交流可能な同じ世界にいる。そういう意味で、世界をドーム状にあらわしている。

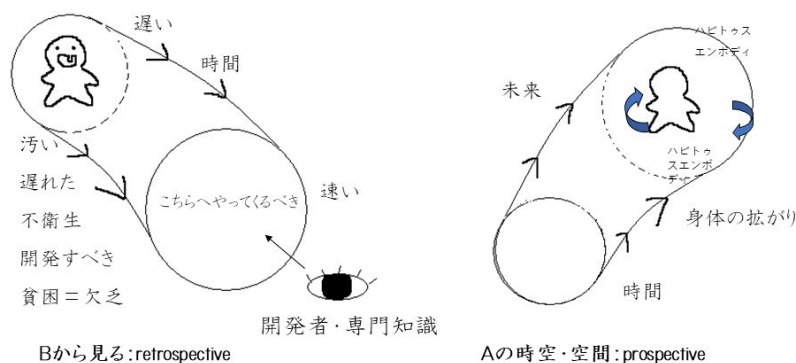
Bからみると、貧困者は「歯がない身体」である。歯がない身体であれば、歯科医に診させて歯を与えよう、ということになる。予防の面では良いかもしれないがAにとってその処置なりかわりは一過性のものに過ぎず(そのうえ歯科治療は高い)、そのメンテナンスの継続性は資金の面からも、彼らの知識の不十分さからも、情報の入手方法を考えても、馴染みにくい。歯ブラシは彼らにとって靴を磨くツールであり、高価な消耗品である。実際にプロジェクトが実施されたとき、歯を与えられた側は戸惑う、というすれ違いが生じる。それは「彼らが同じ世界に住んでいるという錯覚」あるいは自明性によって引き起こされている。

つまり、Bは「歯がない身体」をみて、われわれのようにすることを目的(最良)とし、それに近づけようとする。しかし、彼らは既に歯がない身体をとして工夫をしながら生き

ている（それで生きていける空間が貧困の場である）。その、歯がない身体をとおして生きる空間がAである⁵⁰。歯がないことをとおしてかかわる世界のかかわり方、空間Aと、Bが感じている空間は異なる。現実接触可能で、交流可能な貧困者たちだけに、同じ世界に生きていておってしまう、それが間違いなのである。そこを間違うから、Bは「歯がない身体」をそれ以上のものとしてみることができず、この世界に生きるならば「歯がないと不便なので与えよう」と考えてしまう。つまり、貧困者の後姿だけをみて提言をしながら、妥当な説明した気になっていただけでなく、実践をしてしまっていたのである。人類学は全体論的視点を持ち、かつ、当事者あるいは被支援者と向き合えるとするなら理論上はAとBの両方を天秤にかけてうまくひらいて論じることのできる学問であるはずである。

貧困の人類学においては、われわれはまず貧困とは何かからリハビリしなければならない。現状では、一般的にも研究上でも貧困ということばは多くの説明を必要としない。仮にしたとしても、各貧困地区の状況や暮らしぶり、統計的数値にとどまる。それは研究者から見た、あるいはBからみた、われわれとは違う他者に対する態度というよりも、正すべき悪い状況下にある対象として認識される。したがって、各分野での研究史では、社会問題としてのスラム、スラム形成動向、スラム住民の態度分析、スラム住民の生活実態調査となる。これを反省して、経済学では「合理的な愚か者」であることをやめる A.センの路線へ、開発学では住民参加型(貧しい人の意見を聞き、貧しい人の視点から見た開発)提唱をし、人類学では貧困者=弱者とみだててその主体性を読みとこうとした。そこでは弱者に主体性を見ることで、彼らを取り巻いている、いかんともしがたい権力とのかかわりのもとで、彼らがいかに生きているかを(抵抗しているかを)言おうとしているが、それは後姿から前を向いた姿を想像しているにすぎないともいえる。

「下からの視点」とは？



【図2】

これらの研究のいずれもが、貧困を問題にしていながら貧困を問うてないのではないかと
思う。つまり、不合理な利口者になることも、住民参加を唱えることも、弱者に寄り添っ
たと自負することも、いずれもがBの世界における自己反省の側面が強く、貧困に生きる
人間についてはあまり見ていないのではないだろうか。

言いかえるなら、こうした貧困研究の現状は「自明化している本質主義」であり、その
貧困の自明性の内容とは、①当然のように都市のなかに存在するものであり、②怠惰で不
衛生であり、解消と隠蔽の対象であり、③つねにマイナスイメージのともなう悪である。
同じ社会空間に住んでおり、Bからみて遅れてこちらにやってくる存在であるがために、
貧困が問い直されにくい構造となっていたといえる。

あらためて以下の6つの事例を通して「貧困のみかたの再検討」を行いたい。各事例に
ついて想定される図1および2におけるA（ある世界・貧困者）の思考・対応と、B（ある
べき世界を貧困者に見る、開発・支援者）の立場からの思考・対応と、そしてBとAの中
間にあるB'とA（たとえばソーシャルワーカーなど）の思考・対応である。

①ジョセリンに障害があるのはドラッグのせいだとは思わないけれど、そうなのかもしれ
ない。妊娠してからタバコもやめたしドラッグもやめたし牛乳も飲んだ。考えても仕方な
いことだけれど時々考えてしまう。わたしのせいでなくても、障害があってもな
くてもジョセリンがかわいいのにはかわらないんだけど。（K.K2002年9月）

②夫がドラッグの取引相手ともめて、わたしはその相手から頬をナイフで切りつけられた。
悲しくて仕方がない。もう話したくない。口をあけると頬も痛むの。息子が刑務所に行っ
たばかりでどうしてまたこんなことになるの。（M.S2004年10月）

③この辺で痩せている人はほとんどがドラッグをやっている。でも好きな人ができるとや
めることもあるの、女は赤ちゃんができるから。それに男は自分が吸ってても女には吸っ
て欲しくないって思うものだから。男って勝手。（M.G2003年8月）

B：人間性に対する犯罪としてみる、ドラッグの販路を断つ、ドラッグの存在に驚かない
B'：麻薬克服プロジェクト実施：刑務所，中毒克服施設：実質的社会防衛・悪の巣窟，貧
困外へ出ないよう食い止める

A：①必要があればやめなければならないことはわかっている。子どもへの愛情、②身内
の逮捕やもめごとに対する悲哀、③必要があればやめるし、簡単にやめられないので
施設を頼る。

④この子は生まれてすぐに捨てられていた。冬だったから家でしばらく様子を見るしかなか
った。母親の見当はついてるけどどこにいったかわからない、しょっちゅう色んな男と
付き合っては大声でけんかして出て行ったり出て行かれたりそんなことの繰り返しだった
人。この子は11歳になるけど、話ができないの、ちょっとトンタ（親しみのこもった、
おバカさん、の意。脳性麻痺で、知的障害はほぼないが身体麻痺があり発声が困難）で彼
女にとっては良かったのかもしれない。（未婚の母親代わりの60歳の女性とその両親と4

人住まいの C.C2002 年 2 月)

B : 今後を見据えて子どもの施設送りを検討する

B' : 児童手当および施設の紹介

A : 面倒を見続ける

⑤甥 (服役中) は人を殺したことはない、でも火をつけたことはあるんです。付き合う仲間が悪いだけ。彼はいつもわたしの母(彼の祖母)には優しいし、わたしにも何でも話してくれる。

B : 逮捕・起訴。出所後も度々監視に来る。

A : 刑務所に差し入れに行く。帰りを心待ちにする。

これらの事例にでてくるドラッグをはじめ、殺人や放火といった内容は非日常的なものだが、④のドラッグをたばこに置き換えたとしたら、筆者の発言といっても通るだろう。筆者は貧困の生活に身をおいていて、なぜ彼らが矯正対象となるのかがわからなくなることが度々あった。貧困者も同じ人間であり、喜び、悲しみ、人を助け、思いやりもあり、人を攻撃し、身勝手に生きている。それはわれわれと変わらない。そして殺人や放火は貧困の暮らしの外でも起こるにもかかわらずなぜ、という疑問である。それは「貧困=悪」と同じように「貧困者=悪」とされているからである。貧困は命を奪う可能性があるという意味で絶対的に悪であるが、貧困者は悪であるとは限らない。貧困の自明化についてここまで述べてきたが、この自明化の蔓延によって生じるもう 1 つの問題がある。それを⑥で説明したい。

⑥自分は flojo (怠け者の意) だけれど、自分ではそうじゃない。人(La gente や SW)がそういうだけで。(H.S2004 年 8 月)

H.S.は当時 23 歳で定職についていなかったが、必要に応じて段ボール回収を行い換金するカルトネーロだった。だいたい昼頃に起床するルーティーンだったことでいつも訪問するソーシャルワーカーに怠け者といわれていた。H.S.にしてみれば、当面必要な額を換金ができる段ボールを「きちんと」確保し、回収に間に合うように目覚めている。その暮らしぶりを B から怠け者と命名されることによって、B の言説を内面化しつつある。つまり、A による B 言説の内面化しつつある状況が生じているのだ。支援のかかわりを通して、A による B 的貧困観の内面化がおこると、ダブルスタンダード化が起こるという問題の発生現場である。最後に、日本の身体障害者 (自称、宇宙塵) の語りを引いておきたい。

「ぼくはナマケモノでいたいんだ、と宇宙塵はいう。好きなように生きたいんだ。着てるものはボロでもいいんだよ。だから放っておいてくれ。ただし「怠ける」というのは、自分に対してではなく、社会に対して、なのだ。自分には自分のペースがあり、基準があり、それにしたがって自分なりに生きている。しかし、健常者社会が自分に押し付けてくるペースには従わない。抵抗する。それがナマケモノでいるということ」[辻 2001 : 169-170]

宇宙塵は⑥とおなじナマケモノということばを用いているが、宇宙塵にとってのナマケは資本主義への抵抗を彷彿とさせる「抵抗型スローライフ」であるのに対し、H.S.は「自然体スローライフ」である。両者ともに外部の押し付けにあっているという共通性はあるが、貧困者の場合はやはりAの時空を生きている。その時空で育まれる天然体ライフについて、とりわけ身体配慮について次でみていきたい。

4. 路上に交錯する「環境世界」

貧困者と、そうでない人間とを区別するとしたら、それは育まれた身体の違いであり、そうした身体で世界とかがかわる、かかわり方の違いである。歯の具体例に照らして言うなら、われわれ資本主義社会に馴染んだ身体性をもつ開発者側の人間からすると、貧困者は「歯がない身体でそこにいる」と見える。そこでは、彼らが「どこから来たか」しか見えていない。そして、歯がないことの弊害——顎の退化、咀嚼頻度の減少による脳刺激の減少＝思考能力の低下など——を防ぐという専門的見地から、貧困的現実と乖離した提案をしてしまう。専門家の世界においてそれが正しいことだとしても、彼らは「歯がない身体で世界とかがかわって生きている」のであり、彼らなりに「行こうとしているどこか」があるのである。それを考慮せず、差し歯のメンテナンスが貧困者の生活世界において俄かに馴染むものではないことを想定しないならば、それは暴力的な実践というほかない。人として暮らすことの背景への配慮なく発動される専門的実践は時として傲慢であり、自己の前提に無自覚な強者が、より事態を悪化させているという現実はいき直す必要があるだろう。貧困者たちのハビトゥス、つまり彼らがこれまで蓄積してきた身体性と世界とのかかわり方はどういうもので、描かれるだろう未来はいかなるものでどこへ行くのか、そのことを踏まえることが「下から見る」ことすなわちボトムアップのひとつの方法といえよう。

ある日、筆者がG地区の友人Kと区役所の待合室で並んで座っていたとき、むかいにトマトの缶ジュースを飲む中産階級の女性がいた。Kはその缶を廃品回収の対象つまり収入としてみたが、わたしはこの国にも体に悪くなさそうな飲み物があつたのかという感動とともに購入のための情報源としてその缶に注目した。「下から見る」というのは、「貧困という底辺」から見るということではない。その人の育んだ身体と空間とのかかわりかたを軸とした生活実感から立ち上がるということであり、支配・被支配や、貧困かそうでないか、という区別とは無縁の思考法である。

この、あるモノの価値や意味が人によって異なること、この当たり前のことが、とくに貧困者相手には見落とされがちである。見落とすならまだしも「後進的で、貧しさの由来になるような排除すべき価値観」など見落としてよいものとして片づけられもする。貧困者が価値を置くものが何であるのか、それが取るに足らないものかどうかを決めるのは、彼ら自身である。価値観とは、その人が暮らしを営む世界全体との相互関係によって身体化され、必要な取捨選択や修正や改訂が絶えず行われている。だがその修正は必ずしもグローバルに対応したものだけではなく、個人の事情でそれぞれの文脈によってなされているものである。トマトジュース缶のエピソードからわかるのは、Kとわたしは触れあえる近さの、あたかも同じ空間にいながらにして、それぞれの過去の経験や諸般の事情＝文脈

に応じた別の世界をまとっているということである。ここで、こうしたそれぞれの世界について述べた「環境世界」の議論を参照しておきたい。

「環境世界」とは生物学的な種ごとに異なる世界認識であり、環境から主観的に作り上げる世界のことである。これを提唱したユクスキュルは、ダニの例を挙げる。ダニの環境世界は酪酸だけに反応する嗅覚と、獲物の皮膚にかんする触覚と温覚という3つの感覚だけを頼りに構成されている。ダニは植物の枝先で動物が下を通るのを何年も待ち続ける。動物が下を通ると、温覚によってそれを察知し、酪酸に反応して飛び降りる。そして触覚によって、動物の体毛のない皮膚をさぐりあて、穴を開けて潜りこんで血を吸う。血を十分に吸い終わるとダニは地面に落ちて卵を産んだ後、死ぬ。認知対象としての酪酸と、行動対象としての酪酸との相互限定だけがダニの内界を形作り、環境世界とのあいだに円環関係が成立する。これがヤーコプ・フォン・ユクスキュルの機能円環説の眼目である〔ユクスキュル 1970〕⁵¹。さらに、ヤーコプの息子であるトゥーレ・フォン・ユクスキュルはこの機能円環説について、人間にとっての環境世界である「状況」に適応できるよう拡張した〔T.ユクスキュル 1979〕⁵²。トゥーレによれば、人間もまたダニと同じように環境全体からある部分を切り取って内界を形作る。ただそのときに、ダニが生物学的で本能的な欲求から形作っているのとは違い、「自由な想像(freie Phantasie)」によって形作るという。つまり、貧困者がトマトジュース缶を認知することで、「あのしっかりした缶は高く売れる」という過去の経験から状況を瞬時に構想し、未来と行動を形づくる。個体の内面と周囲の世界とは分離不能な全体を形づくっており、それにもとづいて行動されるということだ。その自由な想像を可能にするオプションは、身体と環境とのかかわりから選択肢として身体化(embodiment)されているものである。

路上には、環境世界が交錯しあっている。サラダばかりを食べる上流階級の女性と清掃員はおなじ空間にしながら、ことなる環境世界をもち、かといってまったく接触がないわけではない。清掃を終えてスラムの家に帰ってきた友人のMは、サラダブームは持ち帰らなかったが、サラダを貪り食う女性が前髪を貼り付けるようにしてピンで留めていた流行は見逃さなかった。

われわれの未来が過去、現在と切り離せないように、貧困母船地区あるいは貧困沈殿地区で多くの時間を過ごす貧困者もまた同じように切り離せない過去、現在、未来という時間の流れのなかに生きている。そして、相応の価値観を形づくっている【図1:A】。

たとえば人類学者として貧困濃度の濃い空間において家屋に充満するにおいを感じたとき、どう記述するかを考えてみる。それをひとたび「くさい」と記述することによって呼び起こされるのは、それを言語化するにあたって出てくる価値の指向性である。すでに感覚自体に価値指向性をもっており、これはソーダスいうところの「身体化(embodiment)」である〔T. Csordas 1994〕。彼は「身体は歴史を持っており、文化現象である」とする立場から、身体を分析の中心にすることで、文化・自己・経験についての理論を再定式化する方法論的機会を得られると考えている。重要なのは、対象化されたモノとしての身体に文化や精神が書きつけられるのではない、ということだ。たんに、血流や細胞や皮膚という物質としての存在だけではない、「現象としての身体」を扱うことであり、貧困という環境を貧困者の身体の拡がりにとらえる主張と重なるものである。このことは、くさいと感じるのが悪いというのではなく、「におう」ことを「くさい」と疑いなく記述する自分の感覚

には価値指向性が含まれていることに留意すべきだと教えている。身体は精神や周囲の世界から切り離されてある一個のものではない。身体とは、世界と精神とを結びつけてひとつの体系を構成する諸関係の束のようなものだ。このような世界と身体の関係性を的確に述べるのは、メルロ＝ポンティであろう。彼の「世界はほかならぬ身体という生地で作られている」[M. ポンティ 1966 : 279]ということばは興味深い。メルロ＝ポンティの身体論においては、身体と世界がたがいに包み込みあい、飲み込みあう関係性にあることが述べてられており、その相互依存的関係によってこそ人間が存在することが可能になるとする。路上で生まれた身体という生地によって、彼らが織り成す世界もまた、貧困者が存在するのに必要な時空である。それを能天気な善意や揺るぎがたい進歩史観的前提によって気づかないこと、軽視したり無視することは、貧困者が人間として存在することを認めていないのと同じかもしれない。資本主義的身体が考える、「世界が満たしているべき要件」は、絶対ではない。

5. 「小さき人びと」がうみだすグローバリゼーション

概念やパラダイムは流動する世界を相手にするだけに、すぐに現状に見合わなくなってしまし、いつのまにか本質化してしまう。研究者や専門家はその自覚が不可欠であると同時に、書き換えるにあたっては、概念をとおして見極めようとする相手に見合った視点を模索して、そこから概念を再考する必要がある。それだけではなく、概念を支える知識集団側も同等に解剖の俎上にのせなければならない。他者をとらえるとき、どのような身体として現象し、世界との往還関係をもっているのかを考えること——そのひとつの方法が民族誌なのだろう。路上の出来事の人類学として、「貧困空間」のような都市に浮遊して沈殿する貧困のありさまを民族誌的に描くことである。

都市に浮遊する貧困と、貧困の母船地区からアメーバの偽足のように都市を移動する貧困者と、そのいずれもひっくるめたものが貧困空間である。「われわれ」も開発者も貧困の母船地区に住まわれない人間もすべて貧困空間に覆われていると考えることで見えてくるのは、つながったかにみえる空間のまとまりのなかには、多様性とそれに応じた身体性があり、価値観があり、時間の流れがあり、世界があり、それらは一律のものとして捉えられないということである。専門家や研究者も、そこに何某かの母船を形作るアメーバなのであり、自分たちの身体性を問わないままではいられないはずである。

人類学は、生活世界つまり「人がそこで生まれ、他人とさまざまな関係を結び、〈顔〉のみえる関係とその連鎖からなる場を生き、死んでく世界」[小田 1999]においてローカルを研究することでこれらのことに気づけるはずなのに、いつからか強者集団、学問集団の一員でいることに慣れてしまった。顔が見えるだけに、また、同じ空間に生きて接触や会話が可能なだけに、見落としてきたことを自覚するべきであろう。たとえそれが世界を席卷する偉大になった概念であれ、貧困という、解決しがたいといわれる対象が相手であれ、問い続けることにもまた意味がある。われわれの世界では、「われわれ」を問わずに発する問いがあまりにも多い。まず問わねばならないのは、われわれ自身である。

貧困は全世界において社会問題化されて久しく、チリにおいても貧困者は下位に位置づけられ「排除」されているという前提が一般的になっているが、当然ながら彼らはつねにそうした外部（あるいは侵入してくる）表象を意識して日々の暮らしを営んでいるわけで

はなく、複数の文脈を重ね合わせて生きている。グローバリゼーションの流れのただなかで相応の影響を受けつつ、受け流しもする。したがって、受身でグローバリゼーションの要素を取捨選択するだけの存在としてではなく、彼ら自身がグローバリゼーションをうみだす動きをとらえてみたい。この視点のヒントとなった『連帯経済の可能性（ハーシュマン 2008(1984)）』に少し触れておくと、著者ハーシュマンは「小さき人びと」としての周辺者の挑戦に目を向け、ラテンアメリカの草の根活動とのかかわりを通じて新自由主義的グローバリゼーションに異議申し立てを行い、周辺者との連帯をめざしている。それは、弱者の代弁をしているのではなく、「弱者の声を聞くこと、そしてその声に応えることとはどういうことなのか」という実践的な模索であった。そのなかで彼は、反米大陸といわれる南米諸国における、草の根の営みの、小さくて静かな変化を積み重ねることを重視している。劇的な革命ばかりが社会を変えとは限らず、小さいものも、やがて大きなうねりともなりうると。つまり、方々で営まれているプロジェクト……というほどの名前を持たないかもしれない些細な何か、そして当人たちも必要に応じて行っているだけかもしれないものが、もはや国境をこえて、トランスナショナルな様相を見せたり、そればかりかネットワークをもちはじめたとしたら、これまで想定されなかったような、たとえば貧困の暮らしをもうすこし楽にする方法や、貧困脱却の回路の発見となるかもしれない。このことは、まだことばが練りあげられていない途上であるが、当面はそれを「第四世界的状況」（「第四世界」と名指されながら変化をはらんでいる場であり、またその状況）⁵³といい、あるいはそのプロジェクトや要素を「ハイパーエレメンツ」という表現で思考を続けることを試みている。

5-1. アルピジェラという民芸品

そのハイパーエレメンツのひとつとして今回同定したのがアルピジェラである。1973年から15年続いたチリ軍政時代の貧困地区において、人びとの連帯は強固であった。福祉政策の見直しから失業率が高まり、男性の仕事がなくなり、女性が稼いで家庭を守るしかなくなった。貧困地区では共同鍋や作業所が組織され、それらはときに反軍政運動の拠点となる経験をしながら一定の機能を果たしつつ1990年代半ばまで続く。そうした作業所で編み出されたのが、アルピジェラである。アルピジェラとはスペイン語で麻や綿で平織りした織地を意味するが、チリでは、刺繍と端切れでつくる民芸品をさす。それは、軍政下で捕えられて行方不明になった人間をさがしている人や、拷問で死亡した家族をもつ者が、政府を批判する手だてとして、行方不明・死亡者の衣類の端切れや手に入る素材の寄せ集めて作りはじめたものである。困窮した生活で資源がないときには、糸の代わりに毛髪を使ったりもした。刺繍とパッチワークで、アンデス山脈と女性の労働姿を描くのが基本的な決まりごとであった。なかには軍人による拷問の様子や、警官隊による虐殺風景の図を描いたことで捕まって拷問を受けた女性もいた。いずれにしても反政府表明のツールとして作られ、時代が下ってからはそれを記憶しておくために続けられ、やがてチリ独特の装飾民芸品として定着し、観光客相手のみやげとして売られるほか、気持ちを込めた贈答やお礼の品としてやりとりされてきた。

そうした歴史をもつアルピジェラが、「連帯基金 (Fundacion solidalidad)」という NGO の支援のもと、スラムの女性の間の一部で現在でもつくられ続けられており、2001年には

サンチャゴ随一の Los Dominicos という観光民芸品市場にアンテナショップができ、同時に、フェア・トレードの商品として販売されるようになった。2006 年にはネット販売デビューを果たしている (<http://www.fundacionsolidaridad.cl/>)。ネット上のアルピジェラは、事情があってサイト上では明記されていないが（この事情については後述する）、現場では「手作りの 3D アート」という、製作現場にいたわたしからは想像のつかない呼ばれ方をされていた。写真の通り、アルピジェラはたしかにパッチワークで多少のふくらみはあるから立体的ではあるのだが、極めて 2D の代物であり、3D アートということばから受けるどことなくポップなイメージとはかけ離れている。3D というのはおこがましいような、気恥ずかしいようなものなのだ。販売サイトにはアルピジェラがどういう文脈で生まれたものなのかの詳しい説明はなく、「貧困者や政治犯のワークショップ」という言及にとどめ、チリの貧困女性が手作りした誇りあるフォークアートという宣伝を前面に押し出している。



画像 26 :
LB の隣組的女性たちにアルピジェラを教わる筆者



画像 27 :
LB でのフェアで店番をするようす。背後にかかっているのが画像 26 で作成したアルピジェラ

5-2. アルピジェラが国境を超える

実際に筆者が通ったアルピジェラ製作の場は、茶飲み話をしながら親戚同士やご近所、友達同士が20人ほどでアルピジェラをはじめとする何かの共同作業をする、隣組のようなところである。軍政下のような反政府拠点になる意味での連帯はもはやないが、かつて極左地区として有名だったその辺りならではのこと、ブラジルに亡命して帰ってきた人や、軍隊に石を投げていた人たちばかりの集まりで、その彼らがほのぼのと集っている。地区の公民館 (SEDE social) を借りて (使用料は無料)、近所の寄り合い処のような雰囲気、食料の交換やうわさ話など生活が濃厚ににじみ出ている世間話の空間である。いつもアルピジェラを作っているわけでもなく、クリスマスが近ければ、フリーマーケットで販売するための「ベレン (聖家族の馬小屋の置物セット)」を作り、聖母被昇天前には巡礼のためのローソクと手持ちの燭台を作り、復活祭前には卵やウサギをモチーフにした装飾品を手作りする。それ以外の時期に、世間話がてらアルピジェラの作業をするといった状況であり、作業所には筆者のような者も出入りが可能で、手伝えるのだ。裁縫は苦手だとうっかり漏らした筆者の教育に燃えたスラムの年配の友人である女性が、「裁縫は女のたしなみ、できないとだめ」といいだし、筆者はアルピジェラの修行させられることになった。そうして裁縫練習の筆者が一端を担い、茶の間のような現場で作られたそれが、ネットに出されて世界のどこかで見られて買われていく。そのうえ、「3Dアート」という格好の良い呼び名までついている、その落差と近未来的な体験の実感をとおして、アルピジェラはハイパーエレメンツのひとつになり得ると考えたのである。

ここでは、チリの民芸品がフェア・トレードのネット販売という方法によって国境をこえていくというただそれだけのことだが、貧困者 (の営みや、都合や、思いつきを) 主体として見た場合の「貧困の国際化」 (貧困空間の国境越え) という意味で、大きな出来事である。これがハイパーエレメントであるかどうか、また、ハイパーエレメンツという想定自体の検証も含めて今後検討していかねばならないが、まずは、「方々で営まれている些細なプロジェクト」としてアルピジェラを同定できるであろう。

6. 「様々な他者の価値観のあいだに生きる」こと

6-1. 差別を成り立たせる文脈: 「社会的承認」

フェア・トレードの商品を購入する人が、その取引に賛同する理由は何であろうか。詳しい検討はここでは割愛するが、資本主義的労働搾取や不当な価格取引で困窮し、その不平等のからくりが構造化して抜け出せずにいる途上国の人びとを救うためだろうか。あるいは資本主義先進国に住まう者の償いの気持ちかもしれないし、単純に商品を気に入っただけのことかもしれない。チリのアルピジェラ販売サイトを見る人の多くは、おそらく、貧困者でありかつ労働を余儀なくされている女性という「複合差別」下にある追いつめられた人びとが作った商品を購入するという目的を認識するであろう。そして、アルピジェラを購入することは貧困女性の手助けとなり、同時に販売側の貧困者にとっては貧困克服の手立てであり、現代的な生存方法であると感じるかもしれない。しかし、ここで注目しなければいけないのは、彼らがつらい状況にあるかどうかではなく、「複数の文脈を重ね合わせて生きていること」である。彼らが生活のつらさを訴えて (代弁されて) フェア・トレード市場に出ているからといって年がら年中、悲痛さを背負って暮らしているわけでは

ない。フェア・トレード市場では、彼らは貧困者役割ともいえるような立場にあることが前提とされるので、彼ら自身もその役割をふつうのこととしている。これは、アンフェアな状況にある人びとを救うという文脈にのっとった役割であり、フェア・トレードを善意で推進する先進諸国の人びとの使命感にもとづいている。そういう意味で、彼らはさまざまな他者の価値観のあいだに生きている。

しかし、ふと、人は「文脈をこえている」「文脈から自由になっている」「新たな文脈を生きている」ことがある。それが一時的で、別の文脈の侵入をうけながらであっても、そうして生活を営んでいる。その、何かの拍子に文脈から抜け出ているような瞬間をとらえること、これが「些細なプロジェクト」を見据える意義である。

アルピジェラ販売サイトの宣伝文句として、作り手・売り手が貧困状況にあり、労働を強いられ、時折政治犯という、不幸な境遇を控えめながらも強調するその裏には、そうした属性が同情を集めやすいという事実があることは否めない。支援団体の関係者によれば、むしろ好んで知らせたい点なのだという。サイトを見ただけではもちろん作り手の実際の暮らしぶりはわからないし、どういう事情で、どのように商品を作っているかの本当のところもわからない。それにもかかわらず、ありがちな不幸な境遇をうたうことで差別や虐げられた状況を自明のものとするに、筆者は若干の懸念を持っている。フェア・トレードそのものの実践について批判するのではなく、そのやりかた自体がすでに上から目線のプログラムになってはいまいかということだ。「アンフェアで不幸な状態にある彼ら」と強調しすぎるのが逆に、アルピジェラ作製の茶飲み空間に、言説空間の、差別を成り立たせる文脈を侵入させるからである。

「差別を成り立たせる文脈が侵入してくる／される状態」が問題であるのは、いままで当人が考えたこともなかった思想が、たとえそれが同情や憐れみ、慈愛、さらには売り上げという実益を伴っていたとしても、自らを否定する形でやってくるからである。

そもそも差別を成り立たせる文脈とは、どのような文脈なのか。少なからず複数の文脈に生きる筆者自身の経験にてらしてみると、本章での舞台となる国際協力の現場においては「女」「専門家規定に満たない年齢（30歳未満）」「大学院生」「学位がない」「医療従事者ではない」というこれらの要素は、諸待遇やあらゆる場面でマイナスにはたらいだ。しかし文脈によってはこれらすべてがマイナスではないのは明らかなことで、「女」「若い」「大学院生」「人類学」という要素がプラスになる場面はいくらでもあるだろう。となると、ある社会なり集団には差別を成り立たせるだけの共有される価値観・身に付けられたものがある。筆者のこれらの当時の属性は国際協力や開発事業分野の世界においては承認が受けられなかったが、開発業界が筆者のすべてではないという事実があれば傷をそう深くせずに済む。しかし、貧困者の場合はその属性すべてがマイナスとされ、社会的に承認されない。むしろ全否定すべき存在として社会的に承認されてしまっている。社会的承認とは、必要があるから生まれたに違いないものだが、使い方を間違えたり、権力構造の中で発動されて流布し受け入れられてしまうとたちまち人を傷つけかねないものともなる。

6-2. 「些細なプロジェクト」の可能性

話をアルピジェラの空間に戻してみると、アルピジェラ製作現場の女性たちにとっては、アルピジェラが3Dアートとなっている空間、つまりネットの向こう側の承認など必要がな

い。必要がないのに、一方的に救うべき存在として承認されている。作り手としては、買ってくればそれでいい。たとえば「貧困のなかでさらに虐げられている女性の救済」を先進国の慈善活動に熱心な人びとたちにヒットしたらそれも良い。それはたんに商売の都合であって、彼らが買い手の価値観と同じであるわけではない。

このネットを通じたアルピジェラの販売は、上述のような懸念や一方的な承認構造があるにしても、先述のチリ政府主導の「貧困克服プロジェクト」とは異なる可能性を持っているように考えられる。他の多くのプロジェクトのように、文脈を侵入させる用意はあり、実際に侵入させてもいるが、それを固定化させないからである。買い手は売り手を「第四世界」だと認識しているが、そこは第四世界的状況にある場なのである。「第四世界」は実在しておらず、それは議論のための名付けである。その名づけによって、第四世界という「文脈の固定化」がおこっているといえる。この文脈の固定化は遍く起こっており、筆者がチリで調査を始めたころ、いつも出入りしていた低所得者居住区で、受け入れてくれて「ありがとう」とお礼を言ったときだったと思う。いまや友人となった女性は「わたしたちは貧しいけれど心は広い」と言っていた。ありきたりの聞き流してしまいそうになる発言だが、「スラムだけど整頓されている」「貧困者だけど几帳面」こうした発言は「文脈の侵入」によるものではないだろうか。こういう文脈にとらわれないでも確かにある（と思われる）生活のやりくり場面が「第四世界的状況」なのである。そこにこそ、「貧困」から多少なりとも自由になる可能性が秘められていると考えている。

6-3. 小さな人びとのプロジェクト

グローバリゼーションがラテンアメリカの先住民にいかなる影響を及ぼすかについて『グローバルとローカルの共振：ラテンアメリカのマルチチュード』で編者はつぎのように述べている。

「今日のグローバリゼーションは、グローバル資本主義によって主導され、先住民の生活に否定的な影響を及ぼしている。しかし、これを否定したり無視したりしても、何ら展望は開けてこない。

先住民の可能性は、アイデンティティの多様性を認め、トランス・ナショナルな公共圏を創出するような新しい選択としてのグローバリゼーションを促進することによって拓かれる。先住民のローカルな行動はすでに、従来の地域共同体や主権国家の境界線を越え、グローバルに再編成されつつある社会空間に共鳴している。グローバル社会におけるローカルで多様な行動の共振や、ローカルな行動とグローバルな秩序との共振が、静かに進行している」(石黒・上谷, 2007:14-15)。

ここで述べられるとおり、アルピジェラをめぐる動きもこうしたグローバルとローカルの共振とも言えなくはないのだが、それよりむしろ、アルピジェラの売り手として最善の動きをしているという事実をまず中心に考える必要がある。国境を越えてネット空間に飛び出るトランスナショナルな様相も持つアルピジェラの様相ではあるが、それが共振であるとかトランスナショナルと名付ける以前に、チリはアルピジェラを出す必要があった、ということなのである。ローカルは基本的に個人の好みやニーズに根ざした日常感覚に支配されている。それを「グローバルへの抵抗」や「グローカル」と言ってしまうとは多くを見失ってしまう。世界と切り離された個人など存在しない。だからといって、「世界とつ

ながっている」ということと、「上あつてのローカル」というのはまったく異なる。前者の自由さ、文脈にとらわれないでもある営みのありさまを示してくれるのが、アルピジェラなのである。⁵⁴

些細なプロジェクトは、小さき人びとたちなりの理由や意地や工夫や競争心といった日常に根差した事情によって営まれている。それは、世界の大きな流れと既存の言説からいえばローカルの営みとしか言いようがないが、あらためて、そのローカルとはあくまで「上のないローカル」なのである。こうした暮らしぶりの詳細を見続け、小さき人びとの声を聞き続けるかぎり、終わりはない。概念が概念化した瞬間から本質化してしまうことを考えれば、流動的なものを固定化しないための方策として当然のことでもある。

さまざまな定義は便宜上必要であるが、こと人や人間の生活といった可変的なものについての定義とは、「～である」というようにある時間を切断する形で断定して述べるよりも、「どういう状態にあるか」という説明をしたほうが正しい⁵⁵。断定調の、状態を示していない定義——たとえば「貧困とは～である」というと枠組みからはずれるスラムの日常の、ある種の豊かさや想像を超えた営み（ある種の第四世界的状況やスラム住民が描いている未来や「環世界」）を見落とすことになる。

第4章 開発現場の人類学

1. 文化人類学と支援

支援現場に文化人類学の専門家として入り、試行錯誤を重ねて時を経るとそれなりの達成感もあるのだが、何が役に立っているのかはいまだによくわからない。計画していたことが軌道に乗って形になればそれが成果だが、伝達する技術や教える知識があるわけではない専門家なので、どの部分でどのように被支援者の気づきを引き起こせたか、やる気を引き出せたか、などは目に見えない。文化人類学の手法（フィールドワーク）は、コミュニケーションの得手不得手、言語のセンス、ひとやものの変化に対する気づきや、日常の細部へのまなざし、異なる環境での生活への慣れや不慣れなど、あげたらきりがなくらい、個人の能力に依拠している。しかも、現地で成長することもある。もはや人類学としてまとまっていることのほうが不思議になるが、支援現場に呼ばれる＝現場では使えると思われている節があるのもまた事実である。

人類学の場合、支援現場に入るときがスタートである。それは、手に職のある、つまり入るときから支援につながる技がある医療職の人びとはわけが違うのだ。それゆえに筆者はすぐに役に立てる技がないことをコンプレックスに感じながら支援に携わっていたところがあった。月日が流れるうちにことばが上達し、友だちができ信頼関係が築かれ、ときに喧嘩や問題が起こりつつも支援に必要な資源をとみにみつけたり創りだしたりすることを経て、プロジェクトが形を持つてくる。そういうものだった。

とくに医療にかかわる専門家は「病気・病原菌あるいは治療箇所を見るのは得意だが、患者の社会的背景にまで目配りをするのは苦手」という傾向があるとされてきた。そこで視点を補うのがフィールドワーク職人の人類学であり、それが概ね間違いではないことは、目下、日本の医学教育に人類学が導入されつつあることで証明できるだろう。2017年ころからコア・カリキュラムとして科目に入れ込まれるほか、人文社会科学的視点を含めた臨床検討会を当たり前のものとする試みが始められようとしている。

文化人類学の支援における役割とは、ひとことではいうとファシリテートである。フィールドワークによって支援の現場に必要な人的物的資源を見つけ、つなぎ、円滑に活動をすすめ、促進して軌道に乗せ、やがて消えていく（ことが理想であると思う）。実際のところは、人類学であろうがなかろうが、現場で役に立てばよい。だがそれが、あえて人類学というまとまりのなかで、ある程度その経験（とくに失敗や成功のプロセス）が共有されることには意味があるだろう。

1-1. ことばから見る

ファシリテートあるいはファシリテーターということばを筆者が初めて使ったのは、2000年にチリにおいて地域リハビリテーションを始めようとした時だった。当時の日本では男女参画の促進という意味で用いられていたのをよく耳にした。地域リハにおける医療従事者の立ち位置について、当初はアドバイザーということばを選んだが、鼻息荒く医療従事者の視点で地域リハを進めていこうとするスタッフたちにとって、アドバイスということばは、上から目線（の前提）を後押しするものであったため、住民の潜在能力を見つけたりそれを引き出したりすることが時に必要な活動にはそぐわなかった。

ともすると支援者と被支援者が上下関係になってしまう支援の現場において、ことば選びはとても重要である。筆者がかつて従事したのはチリの貧困地区における支援だった

め、思考を進めるプロセスとして、チリにおける貧困支援の現場で語られることばに注目しながら核心にむかいたい。ことばの選びかたを考察するということは、その語り主の癖を知ることでもある。ファシリテーターが人的物的資源を見つけてそれぞれをつなぐには、資源やアクターそれぞれの思考傾向や癖を知ることが肝要になる。

序章でも述べたとおりチリにおいては、社会的現実として空間的にも接触可能な貧困者⁵⁶をいかに減らしていくかが課題であり、いまま社会防衛の観点から貧困は問題化されている。チリ国家連帯計画をはじめとする政策やさまざまな組織によって貧困率は数字の上では改善の一途をたどるわけだが、気になるのは、貧困層に分類されていた人びとに一時的であれ収入があればそのまま貧困層を脱したと数えられる点である。例えば1日1ドル以下の生活を貧困ラインとして区切る場合、1.1ドルの収入があればその人は貧困から除外される。だが、除外された人は「脱貧困者」となったことで年金や補助金がもらえず、貧困者だった時よりも苦しい思いをして結局は貧困に逆戻りする。これは数字で人を区切ることのむつかしさあるいは横暴さを示す例であるが、いずれにしても、政府の示す貧困の減少はあくまで数字上のことであり、生活実感として改善されたかとは別の話である。貧困率が減少しても所得格差は相変わらず大きく開いたままで、失業率も減少してはいない。貧困者の救済というよりは、相手を自分の意のままに管理すること、にむかっていた。つまり、支援＝管理といっても過言ではなかった。

筆者がたびたびチリ国家連帯計画開始時の大統領演説を引き合いに出すのは、リアルタイムで聞いていてなんとなく不快だったからである。すぐにはその理由がわからなかったが、それは、嫌悪感と同時に嫌悪すべき思考傾向が他人ごとではなく、自分たちも同じという思いがあったからだ、いまになって思う。政府はもちろん、支援活動を行う人びとは、その被支援者とは対極的な生活や価値観を持っているのが常であり、被支援者がそうした価値観を持てるようになることの手助けをしているのだから、その価値観の見直しをせまったところで理解してもらいにくい。価値観は無意識にうちのことばにあらわれる。そして、相手を受け身にしてしまうことばというものがある。チリにおける「連帯」がそうだ。これは自発的なものでなく、善意と救済の名のもとに押し付けられる管理であり貧困者は断る力を持たない。「兄弟」と呼び掛けられ手を掴ませられる。そうして受動的に、プログラムに入れ込まれることになる。であれば、支援において相手を受け身にしないかわりかたはありうるのだろうか。

1-2. 「受動的差し控え」：支援の心得のひとつとして

相手を受け身にしないかもしれないヒントとなる次のようなエピソードが、慈善のイメージをめぐる論考のなかで述べられている⁵⁷：

「ある人がエルサレムからエリコへ下る道でおいはぎに襲われた。おいはぎたちは服をはぎ取り金品を奪い、その上その人に大けがをさせて置き去りにしてしまった。たまたま通りかかった祭司は、反対側を通り過ぎて行った。同じように通りかかったレビ人も見て見ぬふりをした。しかしあるサマリア人は彼を見て憐れに思い、傷の手当をして自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き介抱してやった。翌日、そのサマリア人は銀貨2枚を宿屋の

主人に渡して言った『介抱してあげてください。もし足りなければ帰りにわたしが払います。』[聖書：ルカによる福音書 12 章 30 から 37 節]

人の困難な状況への対応をめぐり、慈善とはかくあるものか、という聖書の「善きサマリア人」の物語である。これを引き合いに、次のような架空の物語とそれへの対応のバリエーションが展開される：

「山を散策している 1 人の男が猛吹雪に遭い、道に迷い、腹を空かせて疲労困憊の状態で、死の危機に瀕している。雪の向こうに、窓の中から明かりがこぼれる丸太小屋を見つけ、そこへ向かい、扉をおしひらく。そしてジャケットを脱ぎ、暖炉の側で温まり、煮えているポットからスープを汲んで食べ始めようとした。」

レビ人の場合：そこへ別の部屋から祭司とレビ人がやってくる。「おまえ何をしているんだ？ここはわれわれの所(私)有物だと知らないのか」といって彼を掴んで、しかし法的には正当な力として雪の中に放り出す」。

サマリア人の場合：そこへ善きサマリア人がやってくる。彼は疲労困憊の旅人が何をしているのかを見ている。自分の所有物を勝手に他人が使い、自助行為をしていることを見る。サマリア人は何もしない。旅人が食事を終えて床の上で休む準備をしだすのを見守る。旅人が眠りにつくと、サマリア人もまた休んだ。晴れた翌朝、ふたりはことばを交わさずに別れる」。[Waldron 1993:232-233, 大川正彦「所有の政治学」pp. 180]。

つまり、レビ人のパターンでは自己の所有物を勝手に使われたことを怒り、ぶつけるのに対して、サマリア人のパターンでは慈善の受け手がまったく受動的存在ではなく、自助活動を行い、自分なりに生存を維持しようとしている。Waldron によれば、サマリア人は他人が自分の所有する資源をうまく利用するのを受動的に認めているという。これが、「受動的差し控え(passive forbearance)」という態度である。

いまいちど、チリ国家連帯計画を「受動的差し控え」にならってみると、「それに割かれる予算のすべてを彼らが自由に使うのを見守ってみよ」ということになる。それは無謀だと反対意見が噴出するだろうが、なぜそれが予測できるのかといえば、国家側が思い描く形に貧困者を管理し、社会的防衛の観点からの統合(実際には排除)のためには彼らの好きにさせるわけにはいかないのである。自らの財産をなげうって相手を救えば、自らの立場が危うくなる。足元が崩れない範囲での連帯は、こうした意味で急勾配にならざるを得ないのである。

もちろん筆者は「受動的差し控え」という態度を、支援のすべての現場で推奨するわけではない。たとえば政府開発援助の予算をまるごと見守り資金とするのは無理なことと承知のうえで、しかしながら、こうしたかかわりかたがあり得るのだと知り、意識するだけでことば遣いくらいは変わるかもしれない。些細な提案であるが、小さきものからの出発点が大きくなうねりに変わることもあり得る。被支援者の能動性を尊重するならば、たとえば本稿序章第 2 節でも引用したチリ国家連帯計画開始時の大統領演説における「(貧困者は)不利な状況にある兄弟である」という発言も、「不利な状況にあるが、兄弟になろう」といえるようになるのではなかろうか。つぎの節ではこの心得を念頭に置きながら、“鳥の目”

からの具体的実践について追っていききたい。

2. 地域リハビリテーション (CBR) の紆余曲折：“鳥の目” 7 割の民族誌

本節以降、貧困下に生きる障害児と医師というさらに絞り込んだ対象とともに話を展開していきたい。ここからの主題はリハビリテーションである。リハビリテーションとは、中世においては、領主や教会から破門されたものが許されて復権することを意味した。人間であることの権利や尊厳が何かの理由で否定され、人間社会からはじき出されたものが、もとの状態に戻れるようになることがリハビリテーションである。本章では、現代におけるリハビリテーションの主な3つの分野——社会的・職業的・医学的——のうちの医学的リハビリテーション¹⁾、ことに身体障害児の身体機能の回復と治療にかかわる問題を扱う。具体的には、サンチャゴ市にある小児国立リハビリテーション研究所において、医療従事者によって実践されているリハビリテーション(以下、リハ)と、リハを施される患児と、それらを取りまく現状について考察する⁵⁸。

2-1. リハビリテーションは誰のために 問題の所在

チリのペドロ・アギレ・セルダ国立リハビリテーション研究所(Instituto Nacional de Rehabilitación Pedro Aguirre Cerda 以下、INRPAC)は、首都サンチャゴ市内の東南部に位置し、0歳から25歳までの身体障害児を診療するチリ唯一の国立のリハビリテーション施設である。国立といえども、決して充分ではない額の予算範囲内で運営しており、およそ近代的とはいえない古い平屋建ての病棟には55床の入院機能を備え、リハ専門医、整形外科医、歯科医、理学療法士、言語療法士、作業療法士、心理療法士、栄養士、看護師など、リハ専門スタッフ30名のほか、ソーシャルワーカー、準看護師、技師装具士などのスタッフをあわせて総勢約100名で組織されている小規模な病院である。患児数は年間延べ6000人を数えるが、そのうちの約8割もの患児家族が医療保健制度によって診療代を免除される貧困層、あるいは極貧層という社会階層⁵⁹に属す、前章でみた貧困空間に暮らす人びとである⁶⁰。

INRPACでは3ヶ月を基本とした入院リハが行なわれているほか、外来診療と通院患児を受け入れており、事故に遭って一時的に身体機能が低下している子どもや、半永久的に麻痺が残ってしまった子ども、先天的な病気による身体障害のために治療を続ける子どもたちが、歩行訓練や発話訓練などをして、運動機能を回復するための様々のリハを行なっている。そうした場面に毎日立ち会っているINRPACの専門スタッフたちが、いつも感じている疑問があった。「なぜ患児はリハによって一定の身体機能を獲得して退院しても、またしばらくすると身体機能が低下した状態、場合によっては、もっと悲惨な状態で繰り返し戻ってくるのか？」ということだ(画像28~30を参照)。

例えば、ある子どもは数ヶ月前に、リハの効果で手が動くようになって退院していったが、再び病院に戻ってきたときには元の通りに凝り固まり、自分でできたはずの食事動作さえできなくなっている。あるいは、動くものを目で追っていた子どもが、宙一点見つめるだけの無表情な状態になって帰ってくる。こうした繰り返しを経験的に知っている専門スタッフたちは、患児が退院していくときや定期的な診察のときに、せっかくの入院とり

ハの効果が喪失しないように、本人や患児を世話する家族にたいして、病院で行なっていたように家庭でも訓練を実施しなさい、と、いつも助言する。子どもの回復や機能の発展を切に願う家族も、その助言を真剣に聞いている風に見える。しかし、この繰り返しが止むことはない。



画像 28 :

入院中の脳性麻痺患者 M くん。作業療法士とともにリハビリを行い、表情も豊かで首も自立しほぐれているのがわかる。



画像 29 :

画像 28 の M くん、退院前のようす。母親エディスさんの膝の上で、視線も定まり、左手には麻痺があるが緊張もなく、首も座っておりリハビリ効果が維持された状態にあるといえる



画像 30 :

画像 28, 29 の M くん、退院後しばらくして再入院した際の様子。視線が定まらないためパッチをし、両手とも緊張があり自立できないためこうした椅子にはめこまれる。また首にカラーが必要な状態となっている

障害をもつに至った原因によって、リハの経過と治療効果は様々であるが、事故による短期間の運動能力低下の回復をはかる場合は別として、脳性麻痺や二分脊椎といった先天的な病気に伴って必要とされるケースでは、とくに日常的継続が重要である。多くの場合、身体機能を回復する努力をして、いわゆる通常の機能状態に近づくことはできても、完全に戻れることは少ない。リハの継続があつてはじめて、通常の状態に近づいた機能を保持することが可能となり、効果が持続される。日常的にリハが行なわれないう限り、いったん回復した身体機能は徐々にまた失われてしまうのだ。だが、継続性という考え方は、必ずしも患児とその家族に浸透していないのが現状である。医師や療法士が注意してなお浸透しないその理由とは何なのか。

2-2. 病院リハビリテーション IBR : Institution Based Rehabilitation

INRPAC で行なわれるリハは、当然のことながら、専用の機器類や道具に囲まれている。院内には訓練に適したマットがあり、麻痺のある子ども用の食器があり、矯正用の装具や最新式の車椅子がある。そのなかで障害児は「患児」となり、スタッフは指導をする。しかし、障害児の人生のなかで、院内における生活はほんの一部である。病院の外では、障害児は患児ではない。彼らが生活の大部分を過ごしている院外環境において、いかにリハを継続することができるのか、スタッフはそこまで想像を働かせる必要がある。



画像 31 : INRPAC の理学療法室。専用器具がそろっているのは当たり前のように思えるが、そのあたりまえが患児のくらしにはないことの想像力を奪いがちである

日本に話を移してみよう。福岡県北九州市の小倉に、北九州市立総合療育センターという施設がある。ここでは、INRPAC と同じように 0 歳から 18 歳までの障害児をアテンドしており、ここ数年の間に、やはりリハの継続に重点をおきはじめた。まず障害児の介護人に継続することの重要性を理解してもらい、障害を持つ自分の子の世話の仕方や、基本的なリハ知識を得てもらうために、母子入院プログラムを実施している。それは、6 週間ずっと障害児とその親と一緒に病棟の一角にある部屋に住み込んで、「リハとともにある日常生活」を送るプログラムである。2001 年に初めてこのプログラムが開始され、6 週間たって、母子入院に参加した母親が退院する時に、院長に尋ねた。「で、先生、わたしは家で何をしたらいいんですか？」と。院長をはじめ、専門スタッフは皆、度胆を抜かれたという⁶¹。

母子入院プログラムが実施されはじめたとき、スタッフはみな、この新たな試みに期待を寄せていた。そして母親たちも、プログラムを通して自分の子が障害児であるという事実を受け入れ、障害は「治る」ものではないということを知り、障害を持った大人になる

のは避けられないことなのだと学ぶ。それならば、その子に母として何をしてあげればいいのか、ということを考える機会になっている。院内生活のなかで、子どもにすべき基本的なリハの動作方法や、病院で受けるべき訓練プログラムなどを理解していく。だが、それはあくまで院内での暮らしであって、彼らの家庭とは別の環境なのはいままでのない。

リハとともにあったはずの 6 週間の日常生活を終えてなお、家庭で何をしたらよいか、という母親の質問にあって慌てた北九州総合療育センターの専門スタッフは、急遽、「家庭で参照するためのリハの基本マニュアル」を作成した。しかし、家に持ち帰った母親たちの誰もが、それをうまく実行できなかったと報告した。なぜなら、それは病院にいるスタッフが、病院の中で考えられる範囲のリハについて説明したものだからである。試行錯誤の末、北九州では現在、家庭の知恵として母親から家庭で行なえる訓練に関する情報を集めて冊子を作成している。

北九州で起こったことも、チリでの繰り返し帰ってくる患児も、その構造は同じである。「最新の施設内で一応の日常生活動作の能力を身につけたとしても、自宅に帰るとその古風で貧しい建築的・設備的あるいは人的・経済的条件の下ではもとの木阿弥になる例も稀ではない」[砂原 1980:166]なのであって、この構造を解決するためには、医療従事者側と障害者側との、双方に働きかけなければならない。

2-3. 医療従事者の事情

先に述べたとおり、専門スタッフは、患児が大半をすごす家庭生活を念頭におきながら、その子に見合ったリハをするべきであろう。その子の家の広さはどのくらいなのか、その子はどんな遊びが好きなのか。



画像 32、画像 33 : INRPAC におけるアニマルセラピーのようす

INRPAC では週 2 回、犬やウサギとの触れ合いによる、精神的・身体的癒しを目的としたアニマルセラピーを行なっている。セラピーに参加していた患児の T は交通事故による頭部外傷のため、入院当初は左半身に重い麻痺があり、歩行どころか起立もままならなかった。だが T は、毎回やってくるハスキー犬がお気に入りであり、その犬の手綱を引いて散歩させることを目標にして、歩行訓練に励んだ。1 年後には彼は歩行器なしで歩けるようになった。リハを必要とする子どもたちは、何がきっかけでやる気になるかわからない。逆に、考えもつかない理由で投げ出してしまうこともある。となれば、子どもの嗜好性や家庭の

ありかたに重きをおく必要があるだろう。しかし INRPAC に限らず、医療従事者が、患者の社会・文化的環境まで目配りをしない傾向は強い。その理由には、まず、病院のなかという特殊な環境下でいつも働いているために、院外環境への想像が限定されるということがある。さらにもうひとつ、医療従事者ならではの、独特の人間観をもたざるを得ないことが、より強い規定要因となっていると考えられる。

医療現場の実体験から、医者という世界について分析したグッドによると、「医学の生活世界の内部では、身体は新たに医学的身体として構成される。それはわれわれが日常生活において関わる身体とは明確に異なる」[グッド 2001:122]と言い、それは、解剖を体験した医学生が、「皮膚を取り除いた後には下肢の持つ意味はすっかり違ってしまいます。以前あった意味をまったく持たないのです。今や皮膚は、それは日常生活では他者と関わる手段で、つまり、皮膚に触れるということは……その人と親密になるということですが、いまやそれが目の前でくりひろげられていることのごく一部となり、オレンジの皮みたいなもので、ほんのちっぽけな部分にすぎないものになるのです。そしてその皮膚を取り除いた瞬間、このまったく異なった世界にいることになるのです。」[グッド 2001:123]というように、医者が 1 人の人間を見るとき、それが患者であると認識した瞬間に、その個人をとりまく環境や社会全体への関心が吹き飛び、患者の身体内部を見るようになるということを示す。医者は、ふつうの人間が認知している人間の身体とはまったく違った宇宙を、人間の身体にみるようになるのだ。しかし、「解剖が人間性を失わせる経験であるということではなく、それが医学的眼差しに相応しい人間観を再構成するのに重要な役割を果たしているということである。つまり、人間を身体として、症例として、患者として、あるいは遺体として見るということである。人間という概念は文化的に構成されるものであり、自己や他者をどのようなものとして経験するかは、文化によって形成される複雑な人間観による。そして、医学的関心の対象である人間というものを再構成するには文化的な「作業」が必要なのである。」[グッド 2001:125]。

この人間観は、INRPAC の専門スタッフたちにも共有されているといえるだろう。医師や療法士になるプロセスにおいて、医学的眼差しをもつ身体になり、それがもっとも当然でいられる院内にこもっているために想像力を欠いてしまい、患児の身体だけに関心を寄せてしまう。また、地域社会の中で生活している人間の再構成のための文化的な「作業」に重きがおかれていないため、患児をとりまく環境全体が軽んじられてきたと考えられる。

医療やリハの素人である筆者でさえ、リハ施設に身を置いていると、リハをするのは良いことで、しないのは悪いことだと自然に考えるようになる。それは医師でも療法士でも、INRPAC のスタッフは皆、考える以前に身体化している価値観であろう。だが、障害者の立場にたってみると、患者でも患児でもない個人には各々の社会生活が存在するわけであり、リハが入り込む隙間があるとは限らない。つまり、院外における人びとの日常生活においては、INRPAC スタッフや INRPAC に長く身をおいていた筆者が、生活の中におけるリハに高いプライオリティを与えているようには考えられていないのだ。障害児とその家族の生活のなかでは、どんなもののプライオリティが高いのか、家庭環境はどうなっているのか、院内におけるよりよいリハの遂行にとっても文化的作業が必要となってくる。「施設、病院にはそこでしか行なうことのできない訓練、治療の必要な障害者を必要な期間だけとどめるべきであって、できるだけ早く、リハビリテーション的条件の整った地域社会に帰され

るべきであろう」[砂原 1980:164]。むしろ、リハビリテーションが行なわれるべきなのは、地域⁶²においてなのである。そして、その地域にはそれなりのハビトゥスが集積しているということを忘れてはならない。

2-4. 地域リハビリテーション CBR: Community Based Rehabilitation

地域と医療

近年の日本の医療現場では、地域医療という、人びとの生活のなかの健康管理の部分から、いふならば、発病の予防までも視野に入れた領域に注目が集まっている。また、地域に出て行く医療には、在宅ケアや訪問看護などもあり、通院が困難な高齢者や病人、障害者に医療サービスを届けようとしている。こうした流れのなかでは、受益者側、つまり患者側の利点について目がいきがちだが、実は二次的効果として生まれているだろうこともまた、重要だと思われる。それは、医療従事者側が地域を知る、ということである。

チリでは恒常的な地域医療が実施されている例がほとんどない。自治体や施設のソーシャルワーカーが個別に地区訪問をして問題を発見した結果、不具合のある人の通院が促されることはあっても、NGO やその他の支援・援助組織による活動を除き、医者や専門家が訪問に出かけることはほとんどない。また、自治体レベルで訪問医療の制度を実施しているところもあるが、それは日常的な訪問ではなく、緊急の需要があったときに動くもので、しかもまだ情報の浸透度が低かったり、医者側の交通手段がなくて訪問できなったりなど、うまく機能していないのが現実である。リハビリテーション分野においては、地方の私立の施設において、交通の不便さのせいでめったに通院できない患者のために、療法士が個別に家庭を訪ねて行くといったローカルレベルの地域におけるリハが行なわれている例はあるが、首都圏の事情とは異なる。というのは、INRPAC の場合、年間の延べ患者 6000 人、つまり年間 4000 人ほどの患者が来ており、それだけの数の患者の個別家庭訪問など、30 名に満たない医師と療法士の専門スタッフがカバーすることは、時間的にも人的資源においても、とうてい不可能である。それに、チリにはまだ院外活動に手当てを出すだけの保健制度が確立しておらず、経済的にも実施が困難なのである。しかし、リハの継続性をいかに保つべきかということを考えてとき、もはや地域や家庭に出て行くことは不可欠であるし、また、INRPAC スタッフの人間観を再構成する作業の必要性を考えても、地域リハ推進は必然だったと言ってもよい。

2-5. INRPAC における地域リハビリテーションの実施

当初の疑問——なぜ患児は繰り返し戻ってくるか——を解消するためには、地域リハの実施が効果的であった。INRPAC では、1997 年に数名の専門スタッフが国際協力事業団（現、機構・JICA）の個別研修で日本へきており、そこで地域リハの存在を認識した。その後、研修生のひとりがチリで地域リハを実施する希望を含みこんだ、リハ技術の移転プロジェクト⁶³を JICA に申請し、2000 年から 5 年計画でプロジェクトが開始されることとなった。

ところが、プロジェクトを開始したものの、JICA の担当部である医療協力部ならびに、支援を行なっている国立リハビリテーションセンターにとっても、地域リハにたいする技術協力というのは初めての経験だったため、プロジェクト初期のうちに人類学者を導入することが決定されたのである。まず、細かい地域調査をおこない、どのような地域リハの

可能性があるのか、それは日本の手に負えるものなのかどうか、そうした判断を行なうこととなった。日本では、前出の北九州市立総合療育センターが、地域リハの先駆的存在である。そのセンターの試行錯誤ぶりからもわかるように、日本においてもまだ地域リハにかんしては模索状態であった。こうした経緯のなか、地域調査担当としてチリに派遣された筆者は、まずサンチャゴ市全体の障害児像を把握するため、INRPAC の患者に限らず、公立の障害者学校に通っている学生の家など、約1年の間に340軒ほどの家庭訪問を行なった。そこからだいたいのニーズと、障害児の生活環境をつかみ、INRPAC と日本の力で行ないうるチリの事情に見合った地域リハ像を同定していった。

地域リハの目的には次のことが挙げられる⁶⁴。①障害者の生活の質の向上：障害者の暮らしやすい地域にすること、障害者自身が障害を持って生きるのに必要なことを理解すること、②障害者の社会的統合および包括、③地域開発・社会開発：貧困という事情で困難があれば、地域や社会がそれを解消する力をつけ、また、障害にたいする地域社会の意識向上を図ること、④リハを日常生活へ埋め込むこと、である。

地域リハを行うときにもっとも重要なのは、最終的に障害者自身や地域がイニシアティブを持つことである。そのためには当初から障害者と地域の需要に耳を傾けるボトムアップ方式を基本として、彼ら自身のものとして軌道に乗るまでの提案と手伝いをするのが、INRPAC と JICA プロジェクトの役割である。トップダウンの押し付け方式では、上からの働きかけがなくなった時点ですべて終わってしまうからだ。チリに地域リハを根づかせ、長期的自立を図るためには、障害者と介護者と地域のモチベーションを高めることと、低コストで実現可能であること、さらに目に見える効果が必要となる。

そこで INRPAC では3レベルに分けて地域リハを開始した。医療従事者主導の「在宅ケア」、障害者と地域主導の「自助グループ活動」、地域と医療従事者主導の「地域センター」である。これらの3つはどれかひとつだけ行なったのでは意味がなく、うまくバランスをとって、パラレルに行なうことで初めて効果が出る。例えば、ひとりの障害児は INRPAC で定期診療をうける傍ら、院内で必要なリハを行い、日常的には隣人や障害児同士で組織したグループ活動に参加することができ、情報を集めに地域センターに行く、ということである。

INRPAC による地域リハの実施は、チリにおいて、国立機関による初めての試みということで、今後の地域リハモデルとして注目されるのは必須であった。そこで、モデルとして成功させるために INRPAC の位置するペニャロレン自治区に居住する患児を対象にはじめた。ペニャロレンだけでも患児は200名以上いるので、在宅ケアにかんしては寝たきりの患児の家庭に限って行なっている。外出可能な患児については比較的近い距離に居住する患児とその家族に働きかけて、地域の集会所に集まって活動を行なう自助グループを組織した。グループ化することによって、ともすれば孤独になりがちな患児とその家族同士の交流がうまれ、必要な情報交換が可能となり、また、機会があるごとに INRPAC スタッフを地域へ呼んでリハ知識を得る勉強会を行なうこともできる。相手がグループであれば、スタッフにとっても時間と資源の節約になるので好都合である。

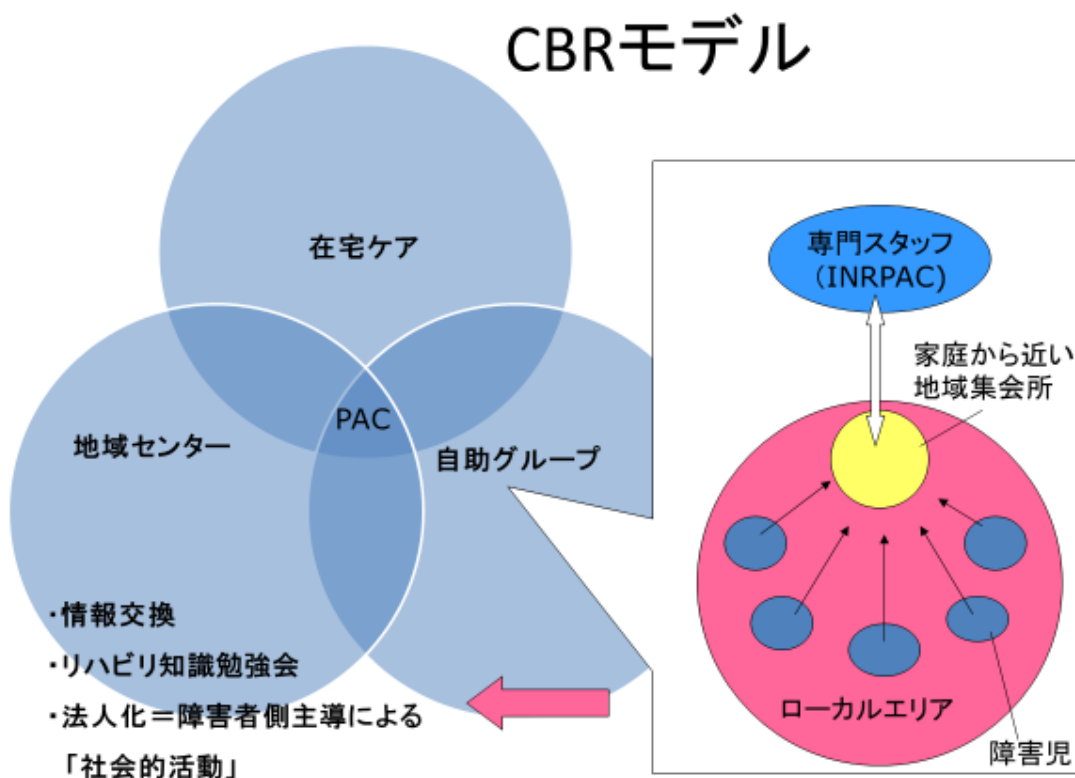
このグループ化のアイディアは、筆者がチリで実践可能な地域リハの、より良いモデルは何かを模索しているときに、とある患児の母親との会話から生まれたものだった。彼女は、自分の家庭でどのように子どもにリハをしてよいかわからないから、スタッフに実際に家に来てもらって、家の資源を使って教えてほしいのだと述べた。彼女の仕事は教会の

掃除・雑務であったため、教会の裏庭に住んでおり、極貧層に分類される暮らしをしているとはいえ、家屋に広い敷地を持っていた。だから必要なら他の家族を呼んで、一緒に学びたいということだった。

このアイデアを実施するために、再度、患児家族に対する提案調査をおこなった。すると、INRPAC のスタッフおよび筆者の予想とはちがい、思いのほか需要が高いことがわかった。スタッフは、まさか母親たちが他の患児やその家族と交流をもちたいと思っているとは考えていなかった。もっと閉鎖的で、淡々と暮らしているように考えていたという。

母親たちは、自分の子どものためにリハ知識を得るのはもちろんだが、それとは別の理由も持っていた。貧困の暮らしをする女性の仕事でもっとも多いのは、家政婦業である。もし、障害児の面倒を見ることができます、という売り文句を持っていたとすれば、就職に多少有利に働く可能性もある。また、障害児を持つ親同士で、子どもを預けあうこともあるため、自分の子とは違った障害を持つ子どもの面倒を見られるようになりたい、という希望も出た。結果としてこのグループ化は実現した。十分なスペースがある家庭が少なかったために、地域の集会所を借りて実施する形に変更したが、それによっではじめからうまく地域を巻き込むことができたのは、副次的とはいえ大きな収穫であった⁶⁵。

次の章においても本 CBR モデルの作成プロセスとかかわる内容を扱うため、実際の計画について図3を提示しておく。



【図3】(2001年内藤作成、カンファレンスで初提示した図)

【CBRモデル】2001年に提案(その後、随時改定)実施した内容について

- ① 行程表を作成する(内藤2001年から2002年までに89バージョン書き換える)

- ① 院内 CBR チームを組織する
- ② ミニセンター（現在はリハビリテーション地域センター Centro Comunitario de Rehabilitación : CCR）と併存した活動とする。ミニセンターには病院スタッフが日替わりで常駐する。場所は自治区の協力を得て新たに開所するか、既存の集会所等を利用する。マットや歩行具、簡易なリハビリ用具を設置し、利用者が必要に応じて通所する。その他、リハビリ医療にかかわる情報センターの機能や相談窓口を置き、将来的には病院の患児にかぎらず、ひろく障害者全般の施設にする。
- ③ グループ訪問リハビリテーション
 - ・ 5～10名の患児とその家族や介護者でひとつのグループをつくる。
 - ・ そのグループは比較的近隣に住んでいる、徒歩 20 分圏内を想定する。
 - ・ グループの患児のどれかの家屋もしくは近隣の集会所に、メンバーが集まる。
 - ・ 病院スタッフは必要に応じて療法士、看護師、ソーシャルワーカーがまとまって赴く。
 - ・ 家屋を使用する場合は、些細とはいえもてなしの出費が予測されるため、毎回でなくともいいができるだけ持ち回りにできるとよい。
 - ・ 上記を満たす限りでは、患児として参加および脱退が自由なグループとする。
 - ・ スタッフ訪問時にグループ以外の近隣の人や知人友人などの参加も歓迎する。
 - ・ スタッフは地域・家庭において可能なリハビリを教授するほか、日常生活用具を用いて装具を考案する。参加者にケア方法の入門的指導を行ってもよい。
 - ・ モデルケースではまず 1 グループ結成し、徐々に増やす（はじめのグループから次のグループを先導する人材を輩出するのが理想的である。グループ間交流も将来的に想定する）。はじめのうちはグループ活動についての啓発や先導の必要性が予測されるが、一定時期が過ぎたら伴走にきりかえ、その後は自助組織となるように見守る体制をとり、CBR チームは支援を徹底する。
 - ・ モデルケースでは個別家庭訪問により CBR 活動の説明を行い、リクルートする。

（2）CBR モデルケース実施地区について

- ① モデルケースのため、今回選定した患児の居住地区で、病院の位置する自治区内とする。
 - ・ 病院と同じ自治区内とするのは、自治区役所への働きかけを念頭に置いている。
- ② 親戚や隣人との紐帯が比較的強い。
 - ・ 患児の介護者が留守をするときには親戚や隣人がケアをする。
- ③ 小さい単位の地域組織（隣組的なまとまり）があり、それごとに集会所 (SEDE) を持つ。
 - ・ 家屋での実施が不都合な場合に利用する（区長および担当ソーシャルワーカーの内諾を得ているのであとは各 SEDE 管理人との交渉をする）。
- ④ 患児の母親・介護者の多数は主婦か、仕事がある場合は通いの家政婦、子守をしているため、障害児ケアの素養は就職のアピールにもなりうる。
- ⑤ 段ボール壁で木枠の家屋が多く、住人はその性質上、補修・増改築に慣れている。
 - ・ CBR 活動実施のためのスペース確保にともなう大工仕事や、やってきたスタッフの指導により日常生活資源をもちいたリハビリ用具の創作が可能である。
- ⑥ 家屋のコンディションの問題はあるが、物理的なスペースがないわけではない。
- ⑦ 冬場（雨期）は泥濘で水はけが悪く、徒歩圏内でも車椅子での移動は困難が予想される。

その場合も継続性を重視して中止にはせず、移動手段を検討する必要がある（その場合に SEDE を利用し、自治体行事として配車を依頼する等）。

実施後、継続するにあたり「支援者として」（永久にいない者として）の対応

■ CBR チームへの「宿題」

「CBR 実施計画」（『CBR ソーシャルサービス（CBR チーム作成）』）

「ペニャロレン区の社会背景をもった家族の現状分析を実現する」

「CBR モデルの実施開始と評価」

「社会内、社会間の連携を確立する」

「活動結果をチームで討議評価して次の計画をたてる」

「具体性に欠ける実施計画となった理由を考える」

「チーム会議で長いこと話し合い、悩んだ挙句だした回答だったのだが、実際のところモデルが妥当だとわかっているのに何をどのように動いていいのかわからなかった」というリーダーの話を受けて、「モデルの完成が目的化していることをはじめとする成果主義の「罨」について認識すること

2-6. 小括：リハビリテーションは誰のために

一連の INRPAC 地域リハ活動をスタートさせてから、スタッフははじめて患児の家庭訪問をし、彼らの家で子どもと会い、院内で会うこととの違いを知った。スタッフはそれまで、患児とその家族が貧しく、ひどい居住環境にいることは想像していたし、知っているつもりだったという。だが実際に訪問してみて、院内環境と家庭環境の差はもちろん、劣悪な生活環境の現実スタッフの想像を超えていた。次のような現実である。

患児 J 1 歳（脳性麻痺）：祖母 40 歳・父 21 歳・母 20 歳

父母はマリファナ所持で服役している。日ごろ面倒をみるのは祖母である。家は父とその友人で建てた木造二階建てで、寝室 2 つと台所が 1 つある。トイレは家の入り口から外に数メートル離れたところにある。ダンボールとベニヤの組み合わせでできた壁は、所々雨漏りをする。屋根はトタンを置いてあるが、やはり雨漏りがあるので発泡スチロールを詰めて対処している。雨が降ると音がうるさいので発泡スチロールがあると少し防音効果があると思うのと、祖母が笑う。寝室以外の床は土がむきだしで、犬 2 匹と猫 1 匹が自由に出入りしている。寝室に所狭しと置かれたベッドは、中央がくぼんでいてまっすぐの姿勢では寝られない。脱ぎ散らかされた衣類と食べ物の残りかすのせいか、カビ臭さが充満している。祖母は、週 2 回の高級住宅地で家政婦の仕事をしており、その間は J を隣人に預かってもらっている。

2001 年 8 月

患児 Y 6 歳（脳性麻痺・四肢不自由）：父母蒸発・叔母 26 歳・叔母の夫 28 歳・従姉 7 歳

知人の家の裏庭に木造の家を建てている。玄関に扉はなく、穴があいているだけの出入り口で、窓にはガラスがなく、布をカーテンにして吊るしている。床は、すのこ状になっているが、打ち損じた釘が出っ張っていて、はだして歩く Y の従姉妹はたまに傷を作っている。Y は 2 階部分で寝たきりで、話すこともできないが言うことは理解し、反応する。母

の姉である叔母が、Yが生まれてすぐから面倒をみているが、叔母の夫には反対されている。叔母の夫はペンキ塗りをしており、叔母自身は青空市で野菜を売るのが仕事である。

2002年1月

この2つの事例は、どちらも両親が不在という点で多少特殊かもしれないが、家屋状況や、介護人の仕事状況の点では特別な事例ではない。INRPACの患児としては、こうした環境の家庭のほうがむしろ一般的であり、そのにおいや汚れた状態から腰掛けるのが憚られるソファのある家が多数あったのも事実である。

事例のJの家庭では、祖母は週2度の家政婦が朝8時から夜8時過ぎまで拘束され、週に1度服役中の娘と娘婿の面会に行き、隔週に1度Jの治療のためINRPACへやってくる。日曜には福音派の教会にミサへでかけたあと、信仰上の兄弟たちと集まる。毎日何かしらの活動があり、ゆっくり編みものをしながらJの相手をする時間と余裕が感じられないという。この状況で、院内で助言されたリハ動作を実行しようとしても、Jを安定して寝かせることができる場所も、時間的余裕もない。祖母には祖母の生活サイクルがあり、Jをかまうことはあっても、Jのリハのために割く時間は彼女のサイクルには組み込まれていない。

こうした生活環境のなかでリハを埋め込むにはどうしたらよいか、シビアな現実との出会いは、INRPACスタッフにとっての、人間観再構成のための文化的「作業」=社会的リハビリテーションに他ならなかった。INRPACで行なわれ、地域リハで目指されているリハビリテーションは、まぎれもなく障害者のためのものである。しかし、これまではINRPACのスタッフの誰もが「どれほど多くの時間を受け持ち患者と過ごしたかとか、どれほど親切にケアしたかとか、どれほど良いラポールを彼らとの間に作り上げたかとか、どれほど病態生理か何かの知識が驚嘆すべきものかとかではなく、評価を決めるのは症例の呈示(患者の身体がどれだけ異常か)なのだ」[グッド2001:137]というのと似た感覚を持っていたため、人体という小宇宙の探求をメインにリハを行ってきた。社会・文化的側面を参照しないがゆえに、患児が繰り返し戻ってくる理由がわからなかったのだ。

障害者は身体的機能を喪失しているために、日常生活に不具合を生じやすい。それを理由に社会からはじき出されてしまわぬように病院へ行き、リハを行なっている。しかし現実には、障害者は病院のなかでは「患者=医療的身体」であって、社会的人間としての側面を見落としがちである。医療従事者は、医療的身体内部についての詳細な地図を持っており、それを探索することに長けていても、障害者の日常的世界の地図は持っておらず、不慣れである。地域リハとは、あるいは、障害者にとってのリハビリテーションを考えることとは、医療従事者が障害者の日常的世界の地図を探しに行くこと——医療技術という専門性の高さゆえに日常的世界からはじき出た人間が、はじき出る前の状態へと戻ること——でもある。2017年というごく最近になって日本で医学教育に人類学が導入されようとしている理由はここにある。

INRPAC専門スタッフは、患児家族の生活の場に繰り返し身をおいてみて、リハのプライオリティが低いことに気づいた。それを上げるためにはどうしたらよいか、そのためには彼らの生活サイクルを知る必要があり、空いている時間をみつけ、そこにリハを埋め込むことを考えなければいけないことも知った。そして、隙間に入り込むにはどのようなリ

ハがあるのか、考え始めた。2003年2月には、獲得可能な資源、たとえば豆の袋を使って手首動作の訓練をすること、家の天井に簡単な滑車をつけてぬいぐるみを吊るして、それを引っ張ることでぬいぐるみが上下すれば、腕のリハも楽しめるだろうこと、安く手に入る木材で家庭に歩行訓練用の手すりを作ること、こうした家庭におけるリハの考案のセミナーを開催するに至った。

INRPACにおいて地域リハビリテーションを計画するという事になったとき、筆者にとってまず困難が予想されたのは、患児と家族をどう引き込んでいくか、ということだった。しかし予想に反してその浸透度は早く、その意味では歓迎すべき誤算であった。だが一方で、もうひとつの誤算は、専門スタッフに社会的リハビリテーションが必要だったことだ。いわば医療従事者の職業文化ともいえるべき、強固な考え方と自信をもつ彼らのまえて、一体誰のためのリハビリテーションなのか、ということに常に考えさせられた。

筆者をはじめ、おそらく JICA も国立リハビリテーションセンターも、そして INRPAC スタッフの誰もが、地域リハの推進には適切なリハ知識と技術を持った医療畑の専門家がプロモーターを務めるものだと考えていたと思う。地域調査を終えて、地域リハプランを提出してなお、その実施には人類学的立場がもっとも適切とされることになった。ボトムアップが生命線ともなる性質の仕事においては、受益者のニーズと彼らの生活を、彼らの視点から知っている者が中心に進めてゆくのスムーズなのだ。また、まったくのリハ素人でへたな知識がないぶん、様々な立場と論理を往還することも要因かもしれない。

何かのプロジェクトや行為を実践しようとするとき、その対象をとりまく社会・文化的環境全体を調べてからはじめる、というのは文化人類学的な思考からすれば、至極当たり前のことのように思える。しかし、少なくとも医療現場で患者を見る医師の視線は違っており、その視線こそがプロジェクトの推進にとってもっとも大きな障害であった。

追ってやや詳しく扱うが、国際協力や開発プロジェクトなどを実施するときに文化人類学的視点が重要視されはじめたのは[角田 2001:132][CHAMBERS1997]「住民参加型」という考え方の浸透にもなっていたことであった。しかしこれが当然視されてくると、職業文化に強く規定されている人間が、聞きかじりのままこれを唱え始めることもまた起こりうる。住民参加と言った場合に、それを押し付けるのでは意味がない。住民を誘導するような魅惑的な機会をつくり、自然に参加を余儀なくしてしまうような仕方が必要なのだ。そうでなければ、いかなるプロジェクトも根づくことはない。そこで、住民参加型の導入とともに、社会・文化的側面の参照に重きがおかれるようになってきたのである。また、文化人類学の導入によって効果が出た例が増えてきたこともあるだろう。多様な人びととその価値観のあいだを縫って、様々な立場の内部と外部に理解をよせながら社会的実践に貢献していくことができるのは、文化人類学の有為性といえるだろう。

次に、ここまでのチリ国内の異なる階層間の話よりもさらに大掛かりな齟齬について、日本の優位性に起因する、チリと日本の国家間の「文化摩擦」と支援に携わる専門家の事情あるいは実態を取り上げる。

3. 支援現場の「文化摩擦」：チリの医療従事者と日本の医療従事者の齟齬

3-1. 来日研修員の「暴言」

「日本から学ぶことは、ほとんど何もない」というこの発言は、ある国際医療開発援助プ

プロジェクトの一環で日本にやってきたチリ人の理学療法士が、約4か月の研修プログラムの総括として、こう発言した。プロジェクトを運営・推進する日本国内委員会の席である。日本政府関係省庁の役人、各種行政法人の関係者、各医療機関の総長や院長といった人びとが一堂に会している。場が凍りついた。プロジェクト長をつとめる国立医療機関総長の怒鳴り声が、張りつめた沈黙を打ち破る——「日本こそが高度な技術と知識を持っているのに、途上国のおまえらが何を言うか。呆れるほど傲慢で生意気だ！」と。

3-2. 開発援助の現場をフィールドにする

このプロジェクトには主に3つの活動がある。5年間に渡ってチリ国立身体障害児リハビリテーション病院（以下、病院）を中心に、(1)チリ人病院スタッフを日本に受け入れて技術や知識を教えること（年間2~4名、各人1週間~4ヶ月・期間は研修内容や専門によって異なる）、(2)日本から専門家をチリへ派遣して必要な技術と知識を「移転」すること（年間5~8名、各人1週間~2年間赴任するが、専門や「移転」知識の内容によって異なる）、(3)日本から必要な機材を供与すること、である。

すでに CBR 実施については述べてきたが、さかのぼって筆者がこのプロジェクトに参加した経緯にふれておく。チリにくる以前、日常の呪術的行為やいわゆる民間信仰についての文化人類学を専門としていた筆者は、リハビリ医療や障害児について素人であったが、日常生活の微細に注目する調査ができそうだとということと、スペイン語話者であるという理由で派遣されることになったのであった。つまり(2)の範疇において、プロジェクト前半では病院患者が住まう地域・環境調査の専門家として、後半では地域リハビリ実施指導として赴任したのである。プロジェクト発足時の国内委員会では、拠点病院が位置する地域はもとより、やってくる患者たちの社会的・文化的背景についての基本的情報についても、まったくといって良いほど不足していた。チリでは貧富の差が激しく経済階層がはっきり分かれており、病院の患者の8割は貧困層に区分される人びとである。しかしそれが具体的にどのような状況であるかわからないので、人類学的調査にもとづく彼らの生活環境や価値観といったもろもろの報告を筆者が担うこととなったのだ。のちにその成果を受けて、当該地域で可能な地域リハビリを計画し実行することを求められたのである。

そのようにして、いざ開発援助にかかわってみると、たんに期待された主目的を遂行するだけで終わることができなかった。それは、複数の異なる文化の間に、あるいは、ど真ん中に放り込まれた人類学的フィールドワーカーの必然であったといってよい。なぜなら、このプロジェクトが、国を越える異文化間における活動であるうえ、専門の異なる職業文化、同業種でも立場や地位の異なる階級文化、という意味での異分野・異文化の人びとがひしめきあう現場でもあったからである。

たとえば日本からチリに派遣された専門家は、各種医師、各種療法士、各種技師、看護師、データベース構築、実務調整、地域環境調査といった多岐にわたる。チリにもこれらに対応する病院スタッフたちがいる。さらに、プロジェクトの本来の主役であるチリの身体障害児（患者）がいる。そうになると、プロジェクトを有意義に展開するために患者について調査するのならば、それと同じくらいの力を注いで、患者を相手にする病院や専門家についても知る必要があるのだ。そしてそれはチリだけでなく、自らを含む日本側についてもフィールドワークすることであった。プロジェクトの理念では、日本側がチリに「教

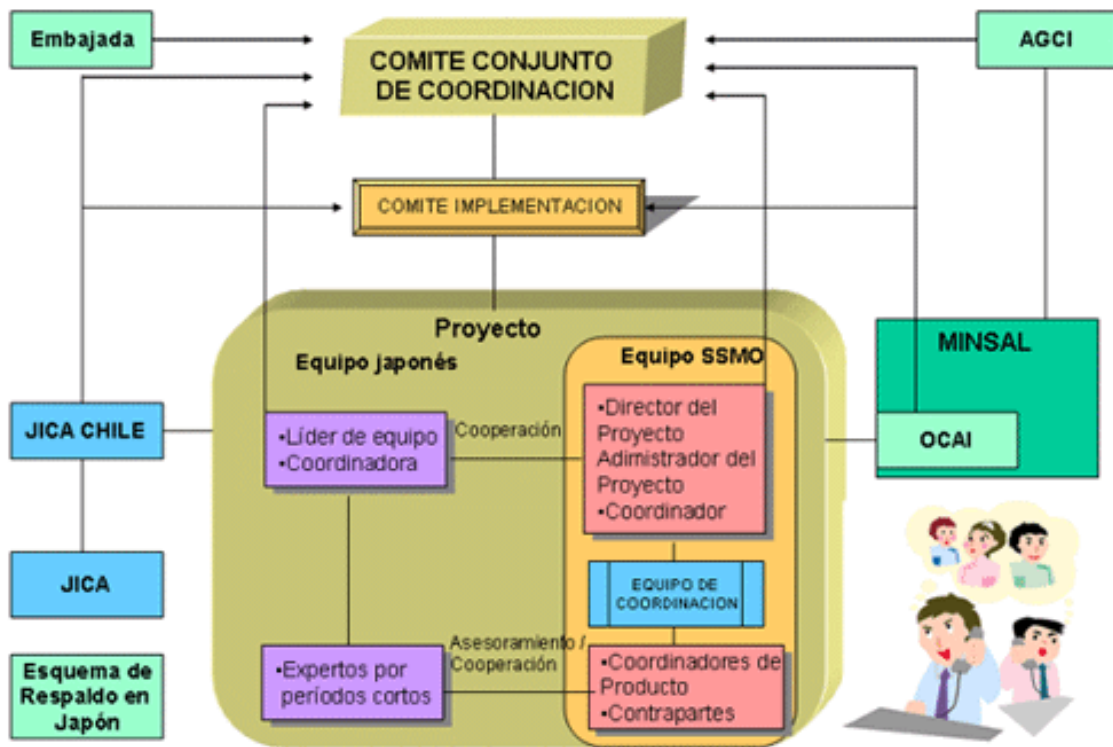
える」ことをとおして、チリのリハビリとサービスの水準を改善させ、ひとつの大きな目的——チリの身体障害者の生活の質の向上を目指していた。日本側は教えてしかるべきであり、分析・調査されて提言されることなど、あるはずもないことであった。

本節であつかうのは、こうした複合的な意味での異文化がせめぎあうプロジェクトの現場であり、筆者自身もまたひとつの専門文化を担っていたために、「教え、教わる」ことのむつかしさに巻き込まれながら進行したフィールドワークの実際である。

3-3. 「途上国」の彼ら：教える態度・教わる態度

冒頭の発言をした研修生は、チリ人のリハビリと医師とともにプロジェクトの初期に先陣を切って日本にやってきて、全国の主だったリハビリ施設をまわって研修を行った。そして、行く先々で、チリで行われているリハビリの素晴らしさを説いた。なぜなら、彼らにとって日本のリハビリは参考にならず、チリで行われていることのほうが必要だと思ったからである。こうした態度は、彼らを担当した通訳から援助機関の担当者に伝えられて問題とされたほか、当然ながら日本各地のリハビリ施設でも不評を買い、なかには、それ以降に順次やってくる予定だったチリ人研修生の受け入れを拒否するところまでできた。

チリのプロジェクト本部ではこの事態をうけて、在チリ・チリ人プロジェクトリーダーが日本研修予定のあるチリ人たちに対して、派遣前に個別指導するようになった。「日本の先生方に逆らったり口答えしたりしないように」「コメントをする場合は穏やかに」「できれば褒めたたえること」という内容である。日本研修済みのチリ人たちから後継者へ、実践に役立つ返事として語り継がれた日本語が「はい、先生」だというのも、笑えぬ事実だ。一方、日本人の医師をはじめとする専門家がチリへ赴任する期間は決まって、この「暴言研修生」は休暇に出されるようになった。つまり、彼女を一時的にプロジェクトからはずして仕事を休ませ、院内で患者治療に携わることを禁止し、日本人専門家の目の届かないところへ置くのだ。日本人帰国後にはもとの仕事に復帰するものの、年に数回こうした「配慮」がなされるようになったのである。この「暴言研修生」は、チリでは患者に絶大な人気を誇るベテラン理学療法士であり、彼女の不在が繰り返されることで、患者離れが数十件起こり、さらにチーム労働を基本とする院内のリハビリシステムにも波風が立った。しかし、現場における日本の意見は絶大である。日本側プロジェクトリーダーがひとたび「教わる人はふつう謹んでその教えを受けるべきものです」、「教えにきてくださる先生方の気分を害すべきではない、異動は暴言を未然に防ぐための配慮です」といったら受け入れるしかない場である。



【INRPAC 提供：スタッフに対して行われる JICA プロジェクト説明に用いる概念図】

この概念図では日本政府（ODA）とチリ政府は対等に描かれ、また各国が組織する国内委員会および各国専門家組織（Equipo）・専門家とカウンターパートもそれぞれ対等の関係性とされる。日本大使館、JICA チリ事務所、JICA 本部、チリ厚生省、チリ国際協力庁などの上部組織が「合同調整委員会 Comite Conjunto de Coordinacion」をもち、その下位に「実施委員会 Comite Implementacion」と中央部にある「プロジェクト Proyecto」の日本委員会（現地日本人長期専門家：プロジェクトリーダーおよび調整員）と SSMO（サンチャゴ首都圏東部衛生局 Servicio de Salud Metropolitano Oriente）が組織される。しかし、実際のプロジェクト内容は左下部にある「日本支援スキーム Esquema de Respaldo en Japon」（このプロジェクトに関係する各省庁組織や JICA 役職者や担当者が組織する日本国内委員会が別に存在する）が決定し、その各種決定事項を通達・調整・受け入れをするのが「プロジェクト」の日本人長期専門家の役割となっている。先の、「暴言研修生」の研修先はここで決定されたものであり、研修内容の希望をきくような仕組みが整っておらず、あくまで日本のスキームで進めることが通常運営となっている。

3-4. 開発援助は誰のために

「日本から学ぶことは何もない」とは、日本のリハが遅れているから学ぶことがないのではなく、「チリの現実に役立つものではない」ということだ。日本の医療が相手にしている患者の障害のレベルが、チリでは存在し得ない重篤さであったり、道路や交通機関のバリアフリーなど公的な環境整備のありかたもまた異なっている。環境に適した技師装具や

車椅子に必要な機能や技術も当然違ってくる。チリの患者の家庭状況や生活環境から考えると、日本で施されているリハをそのまま移植しても役に立たないのだ。

チリの障害児の親たちは、自分の子どもが歩くことを第一の希望に挙げることが多い。まして貧困家庭の場合は、共働きのために障害児自身の自立が必要となる。急で脆い階段、世話をしてくれる人間の不在、家から離れた所にある共同トイレなど、歩行できない障害児がひとりで時間を過ごすことが困難な要因をあげればきりが無い。とにかく歩いてほしいという希望の裏には厳しい現実がある。そのようなところで、重度障害者用電動車椅子の扱い方や、障害児への苦痛が少なくてすむように起立も歩行もしないリハの方法など、必要がないということなのだ。

生活環境からくるニーズにもとづいて、チリでは多少乱暴で子どもが泣いても、歩かせるためのリハを行っているが、日本側はそれを、急がせすぎで発達段階を考慮しない旧式の「途上国」の野蛮なやりかたと見なして改善を試みてきた。「暴言研修員」に向けられた、「日本こそが移転すべき高度な技術と知識をもっているのに、途上国のおまえらが何を言うか」というこの日本側の思想の根本には、科学技術の普遍性に対する信念と、絶対的な技術的優越性の確信があるといえよう。しかし、どのような技術協力プロジェクトであれ、相手国側の必要を満たすことを目的としている。相手国の社会が何を必要としているのか、その社会的な要請を汲み取らなければ技術協力は不要であるばかりか、相手国側の組織の人間関係に影響を与えて崩すだけの障害にもなりうる。仮に技術を提供するのならば、社会のニーズを謙虚に受けとめるという、相対的な視点を取り入れながら成されるべきであろう。「技術協力」とは、「移転」、「移植」、「日本のコピー」をすることではなく、「新しいものを両国が協力して作る」ことである。だが、こうした根強い技術的優越性の確信は、教える者の優位性ともなってしまうのが現状である。これ自体も問題だが、プロジェクトの主役である、リハビリを必要とする患者やその家族がすっかり置き去りになっていたことも問題である。専門家同士の、プロジェクト内部での関係調整や利害の妥協点さがしをするのに労力が費やされ、しかるべき活動が主役にまでたどり着かないのだ。そうなるからこそ、多くの開発援助において、置き去りにされた主体への注目を呼びかけることが、現場にいるフィールドワーカーの役目ようになってきたともいえよう。

4. 専門性という異文化

これまで述べたような、相手の背景をくみ取りきれぬゆえの残念な誤解に満ちた現場にたちあつたフィールドワーカーとして筆者は、国内委員会での提言を試みることにした。開発援助の主役を主役にするためには、その手前のさまざまな問題を解決しなければならなかったからだ。半年におよぶ患者家庭と病院内のフィールドワークの報告として、ヒエラルキー化したプロジェクトのあり方と、チリを途上国扱いしていることなど批判ともとられる指摘をし、チリの患者たちの推察されるニーズを報告し、暴言研修生の発言が暴言ではないという説明をした。途上国からやってきた人たちの反発ではなかったのだと、いまのままではチリの患者たちに、プロジェクトの目指すものは届かないのだ、と。この提言は、チリでのフィールドワークによる結果であると同時に、日本側の改善すべき思想傾向と特徴を指摘し、「教える」ものだった。プロジェクトに参加している誰もが善意に基づいてかかわっているのであれば、それを専門性や文化の違いによるちょっとした行き違い

で台無しにしてはもったいないのだと、そう述べたつもりであったのだが、列席者の先生方の反応は空虚であった。筆者の属性が提言の理解を促すのにプラスに働かなかったのは否めないであろうが、それがなくても人類学的指摘は非科学的なとるにたらないものであったのかもしれない。さらに、医師や療法士たちは、診断法や手術技術といった明確な事柄をチリ人に教えるのに対し、筆者の場合は人類学や地域調査の専門家といわれても、教えることはないのだ。「ものの見方教えます」とでもしか言いようのない専門性に基づいて、国内委員会のような席で「教え」たとしても、非科学的なものとして直ちに信用されないのは仕方のないことだった。調査と称して長い間チリにおり、スタッフや患者と遊んでいるようにしか見えないその仕事ぶりに象徴されるような行動規範の根本的違いもまた、理解されにくかったのであろう。

開発支援の場においてフィールドワークが提供するものとは、時間がたつてじわじわとわかってくるかも知れないものである。あるいは、時間をかけるなかのどこかで出会った発言や発見をきっかけに閃くものだったりもする。いずれにしても始める時にはなにも確証のない営みだ。現に、このプロジェクトでは、ある患者の母親の発言を手がかりにして、考案も実施も絶望視されていた地域リハの実行に至った。母親の発言をモデルとして国内委員会に提言してなお、できるものならやってみてくださいと突き放されたわけだが、幸い考案したモデルは軌道に乗ってプロジェクトはその成功を認めることとなったのである。

これはフィールドワークが得意とする、現場とくに弱者の声への注視の賜物といわれるかもしれない。いわゆる住民視点といって、彼らのニーズに耳を傾けるべきだということはこれまでに言い尽くされてきたとおりであろう。そしてそれはすでに1970年代から指摘されていることでもある[川喜田二郎 1974『海外協力の哲学』中公新書]にもかかわらず、なぜそれが30年たった今も改善されないのだろうか。フィールドワーカーが住民視点に偏ってしまうのは、開発者視点が横行しているからである。ならば開発者視点が優勢になる由来と、そうならざるを得ない事情を問題視して解決していくべきであろう。援助とは、開発者の事情もあわせてともに方法をさがし、目的をさだめて協力して作り上げていくしかない。フィールドワーカーは、いわば強者の論理と事情をも俎上に乗せていける唯一の存在かもしれない。

専門というものを追求して高めるためには、相応の自負が必要である。だがその自負は何かと引き換えに得るものではなく、他の専門や背景の違う相手に寄せる思いに加えて持つべきものであろう。人に教えることとは、教えることをとおしてフィードバックされる何かを受けとめて教える側も成長することでもある。確かに教える側はその道の専門家であり、「先生」であれば、地位や名声や威厳がセットになっているものだ。その優位性は妥当で確かなものなのか、自分の専門に向けるこだわりと同じように他の専門や立場にもそれがあつてを認めているかどうか、そして教える立場に胡坐をかいてはいまいかと、自覚的になりたいものである。フィールドワーカーにとって「教える」というアクションは、相手の文化背景や置かれている文脈への、本当の意味での配慮を怠らない基本姿勢の大事さを再認識する行為そのものなのだ。

5. 「人類学の専門家」とは：自他ともにみとめる不確かさのなかで

開発プロジェクトでは、通常の場合、派遣される日本人専門家はすべての滞在日程や訪

問先、仕事内容を事前に決められている。しかし人類学の専門家は、調査次第で仕事の方向性を決めていくという性質上、滞在先と日数以外はほとんど未定のまま派遣してもらうこととなった。また、人類学者にとってすべての日常生活は情報源であり、勤務時間と時間外の区別はないといっても過言ではない。したがって通常の専門家のように定時出勤して帰宅するというルーティーンからも外れることになるため、こうした人類学的傾向が、開発現場の常識に馴染みにくいのは明らかであった。

筆者は、勤務後や休日には病院の職員と出かけ、患者家族の家に遊びに行き、ただそこに暮らす者としてのごくふつうの日常生活を送っていた。あたりまえのことだが、こうした日常的なつきあいによって各方面からの情報が増え、交流のパイプが太くなる。また患者や職員たちとの付き合いを通じてプロジェクトや仕事について話すことで、それまで不透明であった理解を前進させる機会ともなり得る。患者はともかく、プロジェクトにかかわっていない（プロジェクトチームメンバーではない、しかし大半の）病院内のスタッフからも「日本人たちはいつも何をしに来ているんだろうと思っていた」という意見を聞くことは珍しくない。本来であれば、短期で赴任している専門家の筆者よりも、長期赴任の在チリ日本人実務者がプロジェクトをとりまく人びとと密な日常的コミュニケーションをするに越したことはない。しかしカウンターパート⁶⁶以外の人間とのこうした情報の交換や人間関係の構築は、「技術移転」の範疇には入っていないか、重要視されていないのだろう。いっぽうで、そうした日常を重視する筆者の仕事にはわかに結果や成果が出るものではないゆえに、実務者からはもちろん大半の人びとからみて、ただ遊んでいるようにしか見えないのかもしれない。この思いがどうしようもない責め苦になっていったのも事実である。

日本のプロジェクト国内委員会およびカウンターパートから成果を求められるなか、赴任から約3ヵ月後によく、次のような提案と提言を行うにいたった。「地域リハに関する院内チーム結成の提案と促進支援」、「地域リハに関する患者および家族のニーズ報告をもとにしたプラン(モデル)の提案」、「上記2点についての日本国内委員会への報告および提言」、そして「日本国内委員会での人類学の基本的スタンスについての説明」である。プロジェクトの5年間は、一国の歴史からすればごく短期に過ぎない。しかし、上位目標達成のためには長期的自立を見すえた協力が不可欠であり、プロジェクト自体の成功もそこにかかっていると思われた。長期的自立には、リハとエンパワーメントの結合が必要であり、チリの物的・人的資源と都市的状況および貧困環境や家庭状況を考え合わせた結果、患者・患者家族の自己組織化を通じた【図3】のグループでの地域リハの提案を行うに至った。これについては日本・チリ両国ともに医療従事者からの反発および実現不可能性の批判を浴び、とくに日本側国内委員会では、院内チーム結成にあたって、たとえそれが促進であり支援であっても相手の組織を変えることに他ならないという「操作性」を懸念された。もちろん筆者もそれを承知の上であり、大いに迷った点ではあったが、いっぽうで地域リハを真に追求するのであれば試してみる価値があるとも考え、アクションリサーチをしながらの実施は可能であると主張せざるを得なかった。この委員会後から、筆者の赴任時の指導科目名は「地域調査」から「地域リハ実施指導」へと変更された。地域リハに関するプロジェクトはこれまで日本で行われたことがなく、日本においてもそれは十分整備されている活動ではない。その点で、日本では想像を超えた責任と味方の少なさと行く先の不安を感じさせられ、さらに、チリでは院内チーム結成に際しての院内政治に執拗に

巻き込まれて翻弄された。その紆余曲折かつ試行錯誤のプロセスは割愛するが、幸いプランは4年かかってようやく軌道にのり、現在ではチリの全国リハ政策の基幹的要素として取り入れられ、またチリを中心とする地域リハについての「南南協力⁶⁷」案が浮上している。その結果、2005年4月末のプロジェクト終了時評価報告書には異例の「人文科学の貢献」の一文が加えられている。

開発プロジェクトとは国籍のちがう人間同士、また様々な職種や立場の人びと——日本人専門家、チリの医療従事者、裨益者といわれる患者とその家族やそれをとりまく地域、そして人類学者が一堂に集まってひとつの目的に向かう現場である。そこでの多様な視点からの提言や意見をうまく掬い上げて生かすといった協力体制をとっていけるならば、開発はスムーズに問題なく進むであろう。しかし、それはあくまで論理上の可能性であり、開発の現場は人間関係によって左右される。専門的見地からの発言は時として、目的の追究よりも発言者の立場を守る傾向に流れやすくなることがある。そこでは自ずと「途上国という思想」あるいは「専門知の優位性」と発言力が結びついている。日本人医療従事者>チリ人医療従事者>患者とその家族、といった順でヒエラルキー化がなされているのである。日本人医療従事者はチリの障害者の置かれた社会的・文化的・経済的状況を十分に把握していない。また、チリ人の医療従事者は患者家庭の貧困状況に疎く無知である。こうした幾重もの現実の誤認があるにもかかわらず、進んだ技術の所有者であるという認識や専門知の所有者であるという自負、それに基づくヒエラルキーが、これらの誤認の存在を覆い隠してしまう。このようにしてプロジェクトは、現実との十分なコミットメントを欠いたまま進行してしまうことがある。

現場での日常生活をつうじた人間関係の構築や情報交換、遊び歩いているだけと見られかねない人類学的な調査活動が生産する知は、こうした現実誤認とそれを支える構造を明らかにすることによって、プロジェクトと現実との間のギャップを埋めることを可能にする知である。そうした重要なつなぎの役割を人類学的な知が果たしうるにもかかわらず、実際の現場における人類学者はなんとも歯がゆく抛り所のない感覚を味わわれることになる。なぜならば技術移転というスキームは、現地の社会・文化的背景との接合という志向性が弱く、しかもその弱さに無自覚だからである。この接合すなわち「つなぎ」ということが意味するのは、言い換えれば、「技術移転」というスキームを「協力してひとつのものをつくる」というスキームに転換することである。この転換の基礎となるのが人類学的な知にほかならないのだが、単なる情報としてこの知を提供すればいいというものではないところが難しい。これを乗り越えるには、人類学が比較的得意とするボトムに寄せる理解と同じように、トップの論理も把握しつつ、支援現場というフィールドに作用している力学の理解をもとに各専門家同士をつないでいく必要がある。

つまり、支援現場における人類学者とは、委嘱された役割を果たす調査者であると同時に、プロジェクト内部のポリティクスに否応なく参入せざるを得ない存在なのである。このふたつの役割を遂行することで初めて、支援の現場を生き切ることができるといえるのではないだろうか。

次章では、実際の支援現場をフィールドとして、かつひとつのコマとして、また文化人類学というひとつの専門文化を担う当事者としての民族誌から、結論に向かいたい。

第5章 開発現場で人類学

1. 地域リハビリテーション (CBR) の紆余曲折：“獣の目” 7割の民族誌

「画像から、においはわからないのよね、Junko？」

Junko とは筆者のことである。この発言を聞いたとき、思わず涙があふれてきた。公の場では絶対に泣かないと決めていたのに。国際協力機関の専門家としてチリのサンチャゴ市にはじめて赴任してから、およそ1年になる頃のことだった。

ここでの舞台もまた先述のチリ国立リハビリテーション研究所を拠点とする技術移転プロジェクトである。当時の筆者は博士課程に入りたての、開発援助や国際協力まして医療分野とは無縁の人文系の研究をする学生で、修士論文を終えて、どこかスペイン語圏のフィールド調査にでようと検討していたときだった。そんな折、「チリに行ってみない？」というタイミング良い誘いで、しかも筆者の修士論文を読んだ上での推薦だというので、内容もよくわからないままに引き受けた。そして、赴任直前にはじめて日本国内委員会を訪れてみて、とても後悔した。年齢も、社会的ステータスも、専門も明らかに場違いだったのである。この機会をくれた知人もプロジェクトには参加するが、本務の都合で長期滞在が難しいらしく、実質筆者ひとりでの業務となることが必至だった。理学療法と作業療法の区別さえつかない状態のリハビリ分野の素人であり、委員会の席上ででてくる単語の意味がわからない。任務の主目的である「地域リハ」も、それまでの筆者の人生では使ったことのないことばだった。さらに、派遣予定の専門家の日程一覧では、他の専門家スケジュールが細かく埋められているのに対し、筆者のスケジュールは圧倒的に期間が長いせいもあるが、出入国日程と関係機関への挨拶以外はほぼ空欄になっていた。要するに、現地での出たところ勝負で仕事内容が決まるということだ。そのような専門家の派遣に踏み切るとは国内委員会も思い切ったと思う。その頃はまだ今以上に、国際医療協力分野で人文系の専門家が加わることは稀であり、その戸惑いが明示された日程表だったともいえよう。また、「地域リハが可能かどうかの判断」という見方によっては消極的な任務は、地域リハがこれまで日本の国際協力では扱ったことのない領域であり、日本でも実施はむづかしい分野とされていたからである。正直なところあまり期待されていない、プロジェクトの主目的からはやや外れる形であったからこそ、場違いな筆者が入り込む余地があったのかもしれない。いずれにしてもプロジェクトにおいてわたしが異色の存在であったのは間違いない。

1-1. 院内で放し飼いになる

「地域調査」の専門家として赴任することになったわたしは、病院内で唯一地域と接触するソーシャルワーク部門のリーダー、マリソルと仕事をすることになった。カウンターパートといわれるチリ側の受入れ相手である。10歳くらい年上の女性で、建前上は筆者がマリソルに「地域調査法技術」を「移転」する役割を担っていた。だが、移転できる技術としての「地域調査法」など予めあるはずもなく、調査はその場へ行ってからはじまるものだと考えるなら、対象地域や対象となる人びとの数だけ調査方法があるだろう。地域「を」調査するのではなく、地域「で」調査するのだから。

不慣れなチリでの生活においては、まず、地域「で」調査する段階へいきなりは入らず、院内での活動を開始することにした。予想以上に聞き取りが困難なチリなまりのスペイン語に慣れるためと、リハビリど素人からせめて素人程度くらいの知識を増やさないと

は、さすがに何も始められなかったからだ。そうマリソルに希望を伝えると、彼女との年齢差も手伝ってか、最初のうちは彼女が連れまわしてくれた。病院のシステムを学んだり、各部門の診療とリハビリに立ち会い、そのあとにはスタッフ室でコーヒブレイクと称した世間話や噂話に参加したり、たまに移動手段が確保できたときには「訪れるのに適した」患児の家庭訪問へ出かけたりした。ただ、マリソルの仕事は患児家族のデリケートな問題を扱うことが多く、長期滞在期間中ずっと行動をとるわけにもゆかなかった。それで、ほどなくして院内で放し飼いされるようになった。うろうろと自由に過ごしていたが、毎日仕事から上がる前には、その日の出来事と考えたこと、地域リハの種になりそうなメモ的内容などをマリソルに話すという体制がつけられていったという意味で、カウンターパートの管理下にある稀有な専門家として過ごしていた。

1-2. 「手ぶら」で歩き始める

チリ着任から一カ月くらいのあいだ、毎日院内の様ざまなところを出入りしてリハビリ治療に立ち会った。音楽セラピーやアニマルセラピー、乗馬セラピーなどの手伝いをするようになり、入院患児の集団車いす散策に車いすで同行し、院内車いすバスケットボール大会や卓球大会では患児相手について本気で戦った。子どもたちから遊び相手と認定されると、その家族たちとも関係がだいぶ近くなる。入院患児は入れ替わるので、新しく来る子ども、前からいる子がわたしと友だち風に接しているのを見ると警戒せずに近づいてくる。彼らが見たことのある他の日本人は、たいてい50年配の男性医師たちだったし、そもそもチリ自体に20代半ばの日本人の女はあまりいないので、物珍しい存在でもあったのだろう。そして見舞いに来る家族に紹介してくれるのだ。それに、患児の家族、たいてい母親は、多くが親日的だった。「政府開発援助ステッカー」の効果である。日本からもたらされた様ざまな機材には必ず、地球を抱きかかえたODAのロゴマークの下にJAPÓNと書かれた大きなステッカーが貼られる。その近くに国際協力機関のイニシャルがデザインされたロゴシールも並べられる。X線機材や救急搬送車、戸棚や訓練器具など大小を問わずあらゆるものに目立つシールが二つもつくので、患児家族の目にも触れる。そうした日本の寄付が直接的に自分の子どもの手助けをしてきているのだという、想像以上の感謝の念となっていた。その利点にあずかりつつ子どもとの積極的なコミュニケーションをすることで、やがて展開するかもしれない地域リハのための人間関係の裾野を広げておく狙いがあった。だが、単純に子どもと接しているのが楽しかったからとも言えなくはない。いずれにしても、その場に素朴に存在して、「手ぶら」で人びととかかわっていくことが、納得のいくやりかただった。

「手ぶら」とは、いま、当時を振り返って表現したものである。他の医師や療法士などの専門家とちがって、筆者には手に職もなければ医学知識もないから、患児や家族にしてあげられることがなかった。文字どおりの手ぶらだ。すぐには役に立てない、あるいは地域リハを断念する場合にはこのまま何もできないかもしれないという不甲斐なさを感じていた。それだけに、専門家という肩書きを前面に出して、目的任務だけを追究するような態度は取りたくなかった。現場の人間関係を紡いでいく中で、地域リハ構想が立ち上がるのが理想だと考えた。チリ行きの話が舞い込んで以来わたしは自分のことを専門家だとは思えないでいたし、そう名乗ることに恥じらいを感じていた。現場で専門家になっていく

よりほかないからである。その証拠に、病院の現場で過ごすうちに、着任前に書類で読んでもさっぱりわからなかったプロジェクト全体像や、技術「移転」協力の仕組み、プロジェクト推進のうえでの日本とチリの関係、そして病院内部でのプロジェクトの在り方などのほぼすべてを現場において手探りでようやく把握できるようになったのだった。

1-3. 「あたりまえ」に馴染めず悩む

筆者は概ね野放しではあったが、日常的な義務も徐々に増えていた。出勤時と退出時にタイムカードを押すこと、上述のとおりマリソルに一日の出来事報告をすること、火曜の朝に病院の専門スタッフ全員が集まる「臨床検討会」に出席すること、金曜の朝に一週間の「成果」と次週の予定と目標を「日本人専門家会議」で話すこと、三か月ごとに機関本部へ提出する「四半期報告書」の提出だ。病院にはプロジェクトオフィスと称した一室があり、つねに二人の日本人がいた。プロジェクトリーダーと業務調整係である。彼らはプロジェクトの期間中ずっと駐在する長期専門家である。日本人専門家の受け入れや、チリ人研修生の日本派遣、チリ国内委員会や機関チリ事務所、チリ厚生省やチリ国際協力庁などの関連省庁との調整全般の実務を行っていた。オフィスとその隣にある会議室でのデスクワークがほとんどで、あまり日常的には院内を歩き回ったりはしなかった。他の日本人専門家がいなくはいつもわたしたち三人だったので、数少ない日本人同士いさかいもなく、それぞれの業務をこなしてはいたが、リーダーはつねに筆者の「仕事の成果」を気にしていた。やはり、子どもたちと遊んでいるだけにしか見えないから不安もあったのだろう。リーダーのことばをかりれば、「ふつう専門家は毎日成果が出るものですよ」とのこと。整形外科医のように執刀技術を教えて相手がそれを習得すれば成果であろう。それならわたしの場合は、「患児のひとりと友だちになれば、地域リハ展開の味方を一家族得たことになります」といえる。一度それらしきことを伝えたが、冗談でしょう、と言われて以降言うのをやめた。仕事の性質上、にわかには成果が出るようなものではないと腹を括りつつも、毎日聞かれると焦りも生まれる。ただでさえ、自分のしていることがこの先どうなるかわからない不安もあるので、なかなかつらい現場だ。

着任から2カ月目に入る頃にはプロジェクトの概要も把握しおえて、院内でのチリ人専門スタッフや患児との交流もうまく進み始めていたし、比較的自由に使用できる車両がプロジェクトによって供与され、地域に出られる機会が増えそうだった。それで、院内に「地域リハ準備チーム」を立ち上げることにした。専門スタッフが地域リハについてどのようなイメージを持っているのかを知りたかったのと、チリにおいて可能かどうか、実現すれば活動に参加していく彼らの現実的な意見を聞いてみたかったからだ。マリソルにチームづくりについて相談すると、彼女はすぐさま全スタッフへ通達し、リハ医師、理学療法、作業療法、言語療法、看護師、ソーシャルワーク各部門のリーダーがメンバーとして参加することに決まり、チームが結成された。毎週木曜午後二時定例で集うことになった。

はじめての会合に出て動揺した。集まったメンバーはみな、筆者から地域リハの方針が発表されると思っていたからである。そうじゃないと知ると、ではこれからどうするの？とまるで他人事のように言い、雑談をしはじめた。専門家から教えられることに慣れている彼らにとっては当たり前だったのかもしれないが、少なからずショックだった。地域リハがプロジェクトのなかに入り込んできたのは、チリ側の要求だったと聞いていた。チリ

国内委員会のブレーンのひとりが、かつて集団研修で日本に滞在した折に地域医療のアイディアを小耳に挟んだらしかった。そのことがあったので、実際にプロジェクトの一環として地域リハに着手できるかどうかは別として、彼らは地域リハへの意欲があり、必要性を感じているのだと思っていた。しかし現実はまるで違い、その時点では、筆者が地域リハをやりたがっていて、彼らはそれに従うという構図になっていた。

当面は地域リハについての勉強会にするしかなかった。まだその時点でわたしはそう数多くは患児家庭や暮らす地区を訪れていなかったもので、地域リハの必要性を確信するまで時期を待たなければならなかった。

1-4. 日本人だけど、日本人じゃない

地域リハ準備チームに出てきたメンバーがみな部門長であったことにも表れているが、チリは極めて階級意識の強い社会である。そのことは、院内でもたびたび目にした。たとえば、昼食はみな院内食堂でとるのだが、医師や専門スタッフと、それ以外の非専門スタッフや職員は一緒に食べないどころか、後者は廊下に並べられた座席で食べる。日本人は、複数の専門家の滞在が重なる場合はかたまっで食堂内で食べ、たまにそこにチリ側のプロジェクト中枢人物たちが加わったりもした。わたしはできるだけチリ訛りのスペイン語に触れる時間を増やしたかったのでチリ人スタッフたちと食事をするようにしたが、それもいつもマリソルやその仲間の専門スタッフたちに限られていた。カウンターパートと仕事をする以上、自然なこととはいえ、言いかたを変えると限られたチリ人たちに囲われているような状況でもあった。一部のチリ人専門スタッフたちが独占的にプロジェクトを牛耳っているという印象である。それに気づきはじめて筆者は、より積極的に非専門スタッフや職員たちの仕事を見せてもらうようになり、話をする機会を増やしていくうちに、色々な人たちと昼ごはんも一緒に食べるようになり、しだいに距離が縮まったと思えるだけの会話ができるようになった。

そしてある日、よく入り浸っていた滅菌・消毒室の非専門スタッフの女性にきかれた。「ところで日本人たちは何をしているの」と。「プロジェクトを専門スタッフたちがやっていることは知っているし、日本人が出入りしていることも知っている。この消毒器も、他に高価な機材が増えていることも知っているけれど、実際なにをしているのか」という。筆者は、まず自分の仕事を説明しようとしたが、「あなたは Junko でしょ。ほかの日本人。あなたは日本人だけど日本人じゃないからいいの」という。彼女が示したのは、得体が知れない日本人とそれにかかわる独占主義めいたチリの一部スタッフへの不快感だ。彼女のところにやってきた消毒器も、何一つ彼女の意見は聞かれずにある日突然導入されたという。彼女の発言は、プロジェクトのありかたの根本的な問題を浮き彫りにした気がした。病院のサービスの向上を目標に掲げながら、一部の人間だけで進めているプロジェクトとは何なのだろうか。日本人だけど日本人じゃないという言い方はまどろこしいが、つまり、固有名詞で在ることが彼らに安心感を与えるということなのかもしれない。

非専門スタッフのなかには准看護師たちも含まれるのだが、院内で患児とその家族に日常的に接するのは彼らであり、患児個別の好みやちょっとした家庭の事情などをよく把握している。それだけに、彼らをつうじて患者の母親や介護者と話すきっかけを得ることもしばしばあった。そうすると、仮に地域リハを実施することになれば、准看護師を巻き込

まずにやっていくのは無理があろう。患児や家族にとって身近で話しやすいのは、医師や療法士などの「先生」よりも准看護師たちだ。地域リハでは重要メンバーになるはずの彼らも、プロジェクトからは排除されていた。

1-5. フィールドにでる

赴任から2カ月目に入り、筆者は頻繁に病院外へ出るようになっていた。マリソルはソーシャルワーク部門長として院内での仕事が多かったため、もうひとりいたソーシャルワーカーのマルセラの仕事見学という形で、毎日フィールドへでかけた。チリのソーシャルワークではそうした地区訪問のことをTerreno=フィールド、という。しばらく来なくなっている患児家庭を訪れたり、退院直後の患児の様子を見に行ったり、入院予定の子を訪問したり、必要な書類を届けたり、相談にのったりと、サンチャゴ中を廻った。訪問先は九割がた貧困地区である。ドラッグや犯罪が多発するといわれる地区へは午前中に訪問をすませなければならなかった。そうした事実にも十分おのいたが、訪れる家庭環境は衝撃の連続だった。すでに院内で顔見知りになって退院していった子の家庭で、その子が土むき出しの床に座っているのを見て、ことばを失った。窓枠だけがあってガラスのない窓や、扉のない家、天井や壁が段ボールで作られている家、ちょっと座ったら体じゅうがダニの餌食になってしまったソファ、ひどく汚れて撓っていて機能を成していないようなベッド、たちこめるぬれたままの雑巾のようなおいなど、あげたらきりがない。いったいこの環境でどうしたら地域リハなるものが可能なだろうと途方に暮れた。「地域リハ=医療者の個別家庭訪問」と考えていたからだ。そうした暮らしぶりのなかではリハビリが継続されにくいことも確信した。

地域リハの主目的は、リハビリの継続にある。怪我による一時的疾患をのぞき、麻痺はリハビリをいったん止めてしまうと、せっかく向上していた機能も元通り動かなくなってしまうから、良い状態を維持するためには続けるよりほかない。そのことは患児と家族にも理解されていたが、実践されてはいなかった。患児と家族はリハビリを家庭でやるスペースも時間もなく、日々のルーティーンの中においてリハビリは優先順位の高い事項ではないからだ。医師や療法士は患児と家族の怠慢が原因だときめつけていたが、リハビリを継続できない理由が家庭環境などの背景にあるということを認識する必要がある。そのうえで、地域リハの適切なあり方を構想しなければならない。

それからは単純にマルセラにくっついて患児の家庭を訪問するだけでなく、少しずつ地域リハの話をしてみるようにした。もし、家庭でリハビリができればどうだろうと。マルセラは積極的に筆者と家族が話す機会を作ってくれた。偶然にも、彼女の夫は文化人類学者だったので、筆者がどういう思考回路でどういうことを望んでいるか、かゆい所に手が届くようにわかってくれていた。1年で350軒近くを訪問できたのも、彼女の協力あつてのことだった。

1-6. 昨日の友は今日の敵

地区訪問をはじめて3ヶ月、つまり着任から4カ月めで家庭訪問軒数もだいぶ増えたころ、フィールドで撮影した入院患児の家庭環境の画像を、臨床検討会でスタッフに見せることを提案した。臨床検討会とは、入院患児の治療方針を各部門で話し合う機会である。

画像呈示によって退院後に患児が戻る環境イメージを持てば、入院中の治療・訓練方針も変わるかもしれないからだ。住環境の様ざまな画像がスクリーンに映し出されると、絶句するスタッフも多かった。予想よりひどいからだ。専門スタッフは基本的に中産階級から上流階級に属する人びとなので、通常の暮らしをする限り貧困地区に足を踏み入れることはない。メディアを通して画像を目にしたたり、実際に車で通りがかったりすることがあるから、ある程度は貧困の環境を知っているつもりになっていた人たちも、現実に日ごろ接している子どもがそこに住んでいるという事実のもたらした衝撃は大きかったようだった。

それからしばらくのちに、筆者は画像による衝撃を地域リハ準備チームでも確認したうえで、家庭におけるリハビリ継続の必要性と、それがなかなか達成しにくい環境であることを改めて説明し、改善に向けての地域リハ構想をチーム全体で考えたいと議題提出した。さらに、地域リハ支援の基本的な立場も提示した。プロジェクト期間だけ地域リハが実施されても意味がなく、専門用語でいう「持続可能なもの」にするためには、現場で調達可能な人的・物的資源をもちいて最低限のコストで実現すること。そして最初は地域リハチーム・病院主導でも、やがて伴走者となり、それから地域・患児家族主導になった活動を後方で見守るという態度だ。そのためにも、チームには患児家族に身近な准看護師と、地域や家庭で使えるリハ道具めいたものをその場にある資源で作ってくれるかもしれない技師装具士も入れるようにと提案した。すぐさま、准看護師も技師装具士もプロジェクトにかかわる立場にないという理由で猛反発に遭った。その反発は、「持てる資源の有効活用」の意味をわかってもらえていない証拠だった。がっかりした。意気消沈しているわたしはその後すぐマリソルに呼びつけられた。開口一番「どういうつもり？」と仁王立ちで睨んでいる。なぜ自分に予め話していない内容を会議で話すのか、と叱られた。マルセラと家庭訪問をするなかで思いついたこと、成果はすべてまとめて自分に見せるようにとの要求もされた。彼女は筆者のカウンターパートであり、筆者が出す成果は彼女のものなのだそう。彼女の突然の豹変ぶりに驚いた。「飼い犬に手をかまれるとはこのこと！」と言いつた。放たれて傷つき、落ち込んだ。

この日はさらにもう一人、副看護師長のエルミアがやってきた。休暇を取っていた看護師長の代理として地域リハ準備会議に出席しており、険しい顔で話し始めた。准看護師を入れることは納得できないといい、入れたほうが良いという理由をあらためて説明しろという。そして、「わたしは頭が固いの。だからわかるまで説明して。納得できなければはっきり言うし、ケンカになっても話すことが必要だと思う」と明言した。マリソルとの一件があったから余計に、意見の食い違いを豊かな方向へ持っていこうとするエルミアの態度が嬉しかった。それからほぼ毎日、仕事がひととおり終わった勤務時間外に彼女と色々な議論をした。チリでは看護師になるのは難関であり、准看護師とは資格取得の上で圧倒的な差があり、同等の立場でプロジェクトの仕事にかかわるのは感情的に納得できないらしいということもわかった。その他、筆者が見た院内の疑問や、チリの階層性のこと、保健制度や貧困こと、家庭での患児や家族のこと、すべてが地域リハ構想につながる様ざまなことを時間を忘れて話した。たしかに彼女は頭が固かったが、それを柔軟にしたいとは思わなかった。むしろ固いなり理解での地域リハとのかかわり方を彼女自身に模索してほしかった。エルミアとの出会いをとおして、筆者は地域リハ準備チームを解散して、地域リハチームを再編成することを決めた。最初で最後の専門家権限を行使して、チーム

メンバーを選んで決めた。このことは日本人リーダーや国内委員会からも懸念の声が上がった。組織のありかたに手を入れていいものかどうか、ということだ。悩んだ末に、もしそれで断念するなら地域リハは実施できないという結論にするしかなかった。チリ国内委員やブレンとも話し合った結果、進める方向で話がまとまった。

新たな「地域リハビリチーム」は、一律各部門長であることをやめ、全専門スタッフとラフな面談をし、本人の同意を得て決めた。各部門のリーダーにもそのことを告げて、もちろん今後も地域リハチームに出入りして構わないどころか、なお一層協力が必要であることも告げた。抵抗したのはマリソルだけだった。そしてあらたなチームでスタートしたのをきっかけに、メンバーそれぞれに順に家庭訪問についてきてもらうように計画をはじめた。

マリソルとの関係は、仁王立ち事件以来穏やかではなかった。確かにある時期から彼女に出来事報告をしなくなっていた。なぜなら、いつも彼女はわたしが思いついたことを、会議でまるで自分の考えのように話していたからだ。チームとしてそれを練り上げていくのであれば一向に構わなかったが、彼女はそれを元手にチームにおける発言力と実権を握る道具にしているように見え、そういう権力志向は地域に根差した活動を行ううえでは、あまりいい影響がないと判断したからだ。何度か彼女に正面からそのことを言ったが、聞く耳をもってもらえず、報復的に公私にわたり散々いじめられた。そうした彼女の行動様式は、開発援助の負の産物ともいえるかもしれない。つねに成果が求められ、成果をあげれば引き立てられる。とくに、このプロジェクトでは「日本研修」という魅惑の機会があったことが大きいだろう。

地域リハチームの家庭訪問についてもマリソルは自らの領域を侵されまいと車両を占領するなどして阻んだが、ついにエルミアを連れ出すのに成功した。エルミアが訪ねたのは彼女も良く知る常連の障害児の家庭で、洗っていない犬猫のにおいと腐った牛乳のような酸味のあるのにおいがまざった臭気がたちこめていた。において目眩がする経験はわたしも初めてだったが、彼女には相当な打撃だったらしく、しばらく彼女から笑顔が消えていた。彼女は、「わたしはまだわかっていなかった」と一言つぶやいたきり、その日はそのまま黙っていた。

1-7. 「ほかならぬあなた」と出会う場で

新チーム結成後、二カ月におよぶ夏休みがはいったのち、臨床検討会で地域リハ報告の時間が設けられるようになった。筆者は地域リハ構想をスタートするにあたって、病院内の治療訓練も含めたトータルの活動であってほしいことを説明した。病院内のリハと地域のリハが連携して、相互に補い合うことができればよいと考えたからである。そして、地域リハの必要性についても全スタッフにむけて説明しようと思い、画像をみただけで患者の暮らしの全てを分かったつもりにならないでほしいことを告げた。「ゆがんだベッドという存在を画像で知ること」と、「ゆがんだベッドに寝て過ごす障害児の身体への影響や、じつはそのベッドに家族3人が寝ていること、彼がそこから見る景色を知ること」はまったく違うということだ。その場ではわたしはこのような説明ができず、口ごもっていた。そこにマリソルが横やりをいれてきた。画像だけで十分でしょう、と。そのときだった。エルミアが冒頭の発言でわたしをフォローしてくれた。よほど家庭訪問でのにおい体験が

強烈だったのだろうが、石頭な彼女の発言は説得力を持っていた。そして、話を聞いていた理学療法士のボスの存在が拍手した。地域リハはスタートしたばかりだったが、少し報われたような気持ちになった。

プロジェクトでは偶然の出会いが重なり連なって地域リハ計画が実現にむけて走り出した。開発援助の現場は想像以上に個人と人間関係に左右される。リーダーの力がなければそのプロジェクトは行き詰まる。配置換えになって良い人材がきたらたちまち成功することもある。それだけでなく「この人だったから」「ほかならぬあなたと出会えたから」という場面に多く遭遇するのが開発援助の現場である。筆者の場合は、参入経緯も偶然であり、たまたまマルセラやエルミアと出会えたことで一応の成功に導かれた。だが一方で、うまくいかない人間関係があることもじつは重要なかもしれない。対立する意見があればこそ、よりよい選択肢を作り上げるからである。多くのプロジェクトでは目に見える成果が重要とされ、モデルやマニュアルの完成を希求する。しかし、支援の相手は人間であってモノではないから、モデルやマニュアルが個々の現場でできあがったとしても、それはその個別の歴史にすぎない。大事なのは完成したモデルではなく、完成までの道のりにどのような紆余曲折があり、プロセスがあり、涙を流した者がいたかということ参照できるようにすることであろう。これからもつづく支援という営みを支援するうえで、そう書き留めておきたいと思う。

第6章 専門知のリハビリテーションにむけて

1. 開発援助と人類学

本論文の序章において、貧困そのものと人類学のかかわりを概観したが、ここでは開発援助・支援と人類学の関係性にふれておきたい。人類学者が開発援助に参画するようになったのは、それまでの民族誌的営為がポスト・コロニアル批判や文化の本質主義批判を浴び、他社表象が客観的な記述ではありえないということについていかに応えて、文化人類学自体を再構築するかという問題に直面していたころである。

貧困あるいは開発途上国に対する支援の歴史において、1980年代からはじまった参加型開発の理念の導入はひとつの転換点であった。その重要なポイントは、支援活動の計画段階から当事者（地元住民）に参加してもらうことである[R.チェンバース 2000, 2011]。チェンバースが提唱をはじめた当時は目からうろこの自省を促す画期的な内容だったかもしれないが、40年経った現在はもはやあたりまえのこととなっている。とりわけ、めまぐるしく流動する世界で実践を余儀なくされている開発分野においては化石化しているに等しい。だが、その「あたりまえさ」に落とし穴があるようにも思う。「自らの常識を疑え」というのは定石だが、では「なにをどうしたら常識を疑ったことになるのか」、その答えを探せるのが人類学的思考であり民族誌的手法だと筆者は考えている。

たとえば参加型開発計画にかんする会合が開かれ、そこに住民が呼ばれていったとしても発言権や決定権は地元の役人や支援従事者にあることがほとんどであり、被支援者の主体性はほぼないに等しいか、場合によって彼ら自身は主体的にありたいとは思っていないケースも多い。このことは著者自身が、JICAプロジェクトにおいて、患者の保護者を地域リハに巻き込んだ当初にぶつかった問題である。知識を持つ人（専門家、著者の例では医師やJICAで赴任した各種専門家）と、もたらされる人（患児やその家族）という関係性がそのまま無自覚に言動に影響しているのである。受け身という名の患者ハビトゥスともいえる、とくにチリのような階層社会では顕著な例である。そこでの被支援者の思いとは「JICAがやってきて自分の子どものためになることをやってくれるのはありがたい」、「無償で病院に送り迎えしてくれるバスが走るのならばひそかにそれを持続してほしい」といったことである。つまり、重要なのは地元住民が主体的であることよりも、「支援によりもたらされるものもいいものか、それが持続するか」どうかである。それがいいもので、自分たちが頑張ることで持続されるのなら頑張る可能性もあるが、コスト（金銭面だけでなく時間的制約やこれまでの生活や人間関係の変化なども含めて）がかかるようなら手はだしにくいということになる。そこで手が出されず結果的に住民参加がなされない場合、プロジェクトは「失敗」となる。現場によって事情は異なるであろうが、実際には、自主的な住民参加を促すまでにはいくつものハードルがあるのだ。参加型開発が定石になることで、住民参加型の開発が目的化してしまったきらいは否めない。それによって、住民参加の強制という事態も起こっている。住民参加はあくまで手段であり、住民が出てこないのならその理由は何なのか、定石とは何なのか、定石となったプロセスはどのようなものだったのか。通時的に、共時的に全体論的な視点（俯瞰あるいは鳥の目）をもって、地元との個別の付き合い（獣の目）をも心がける人類学あるいは民族誌の手法の出番である。

実際に近年では、社会的なニーズに呼応する形で人類学は開発や支援の実践において何ができるのか、を問うなかでエスノグラフィーの手法をもちいた支援に着目した研究が増えている⁶⁸。一例として、メタファシリテーションという、ファシリテートをよりうまく進

めるための技の追究があげられる[和田信明・中田豊一 2010]。メタファシリテーションとは「相手と一対一で、事実を問う質問をすることにより、相手の気付きを引き出す会話術」であり、個別の顔の見える関係において対象との距離が縮める技でもある。エスノグラフィカルに実践を進めることの重要性を説いたものであると筆者は解釈している。また、「専門性を活かしつつも、その支援の技術の束をいちどフィールドでほどいてみて、場の状況に応じて組み立てなおす」という支援スタイル[亀井・小國 2011]や、現場の出来事に柔軟に反応しながら臨機応変な支援現場を生き抜く、比較的若手の研究などもある[亀井・小國・飯嶋 2008][内藤 2014]。これらの研究では「社会的なニーズに対して人類学は何ができるのか」という問いが出発点にあるため、松園の「人類学者とはソフトウェアのようなものである」[松園 2008]、ということばを借りれば「柔軟で役に立つソフトウェア開発」といっても過言ではない。著者自身もこのエスノグラフィーに可能性を見出すという流れに乗ったうえで、付け加えたいのは、前提を疑うだけでなく、前提を疑えなくなっていることへの気づきの必要性である。そのことを次の章で述べて結びへむかいたい。

2. 専門知にもとづくハビトゥス

2-1. 専門家の偏知

「夏休み子ども科学電話相談」というNHKのラジオ番組がある。数人の専門家が待機するスタジオに子どもたちが電話してきて日常の疑問をたずねる企画で、その日に待ち受ける専門家の分野に関連する質問が受けつけられる。かつての放送 1)で、小学校低学年の男の子が「なぜ氷は水に浮かぶのか」という質問をしたときのことだった。理系の専門家は次のように答えはじめた。「氷はね、水よりも密度が低いんだよ。あ、密度ってわかるかな」。「わかりません」と子ども。「密度っていうのはね、ある物質の体積の質量のことなんだ。」と、専門家なりに自らのイディオムを平易にする努力をしながら話し続ける。「冷凍庫で水を凍らせると表面が膨らむのを知ってるかな?」「知りません……。」と子ども。「そうなるんだよ。水が凍ると体積が大きくなるからね、そうすると浮力という力が働いて、だから氷は浮くんだよ。」と専門家。回答は結局、難易度の高いイディオムの連発となった。スタジオがしばし気まずい沈黙につつまれたのちに、「これから習うと思いますから、それまで待っていてくださいね。」と司会のフォローが入り、質問は終わったことになった。実際のところ、体積ということばすら知っていたかどうか定かではない子どもは、あきらかに置き去りにされた。

この番組は、子どもの奇想天外な疑問や、意外に鋭い質問とそれに辟易する専門家の様子や、見事な回答に思わず感心してしまうおもしろさとは別に、子どもと専門家のすれ違いが顕著にあらわれる場面として興味深い。専門家として答えることを要求されている以上、子どもが置き去られる事態はおそらく「専門家の先生の不親切」や「素人に対する説明のへたさ」あるいは「専門的偏知」として説明されうるであろう。専門家もまた、自身の説明不十分さからある種のむつかしさを感じているだろう。なぜこうした事態に陥ってしまうのだろうか。その理由のひとつとして、専門家はその世界の内で通用するイディオムを用いて生きることに慣れているからである。そうすることで、より専門性を高め、とくに科学分野では発展を遂げてきたことがある。だが、専門性を身につけると同時に失ってしまった何かがあるのも否めない。先の例では子どもが相手なのでなおさらだが、いう

なれば専門外の人間への説明言語が失われている状態である。専門世界とは、専門外の間が持つ知識についての想像力が必要とされない状態にあるともいえる。つまり、専門家はその世界であたりまえとされる文脈に慣れており、ラジオでの場面とは、その慣れた文脈とは異なる文脈で話をしなければならぬから困難なのである。子どもの質問が奇想天外に思えるのは、もののとらえ方が、いってみれば「文脈から自由」だからともいえよう。

今日においてはたとえ人文科学であろうとも、その専門知や研究は社会とつながることが要求されるし、そもそも社会や人間についての研究ならばそうあって然るべきかもしれない。そうであるなら、専門に閉じこもる状態では、専門知とは自己満足の無用の長物になりかねない。専門家は慣れた文脈ではない場面において、いかに生きうるのだろうか。専門家になるべくして得てきた知識を身につけた身体——専門家という身体は、専門知の獲得のかわりに何かを失いつつ構築されるのだろうか。

本論は、身体とそれを取りまく環境について、あるいは環境を形作りもする身体について、その相互影響的な関係性に注目しながら、専門家的身体・専門知のつくられかたと、そのありさまを人類学の俎上に乗せる試論である。ここでいう専門家的身体とは、自分のおかれた環境から形作られた知とハビトゥスによって行為し、そこから得た経験と自負によって独自の環境＝専門世界を形づくるような、環境と連続した身体のありかたである。そうした専門家的身体のありかたをめぐる問題について考察し、自省をこめて、専門知の有用性を最大限に活かせる方策を模索（する手始めと）したい。

2-2. グレーゾーンと専門家

ハビトゥスについてはすでに論じたが、あらためて貧困に限らない専門家のハビトゥスについて考えてみたい。筆者の理解では、ハビトゥスとはひとが生きるにあたって日常のなかで無自覚的に身につけている工夫や物事への対応のしかたであり、思考や行為をそれとなく促す背景のような習慣である。そして、過去の生存状況から現在を形づくりつつ、未来志向性ももち、通時的でありながら共時的でもある、とらえどころのないものだが確かに存在する。たとえば電車に乗るとき、「どの車両に乗れば乗換駅で最短でいけるか」という目的に対し、過去の経験・生存条件（階段にもっとも近いのは〇両目だ、とか、ラッシュ時は階段付近よりもエレベーター付近がすいている、とか）から乗るべき車両が割り出され、現在の実践に反映され（乗るべき車両に乗り）、それがうまくいくかいかないかで未来の実践に修正がはかられていく（やはりもう1本早いのに乗らないとだめだ、と認識するなど）。そうした一連の行為がハビトゥスであり、また、ハビトゥスは一連の行為の背景でもある。専門家の身体（知）とは、こうしたハビトゥス（の積み重ね）によって構築されているという想定のもと、事例を見ていきたい。

以下はチリの首都サンチャゴ市において、ソーシャルワーカー（専門家）が貧困地区の住人と会話した場面である。専門家はこの会話をもとに、政府が実施する「貧困克服計画」の一環として「家屋カルテ・物資調達申請書」を作成し、必要な資源を貧困者に供給するという仕事をしていた。⁶⁹（以下、ソーシャルワーカー：A、貧困地区住人：B）

A：「この家の天井は発泡スチロールとビニールですが、トタンのほうがよくないですか？」

B：「あー。そうかな。」

B:「トタンてのはどんなですか。」

A:「丈夫な金属ですよ。」

A:「壁は大半がダンボールですが、木材の割合を増やしたほうがよくないですか？」

B:「そうかな。」

A:「床は土がむき出しですが、マットを敷くかブロックを敷きませんか？」

B:「そうだな。もらえるなら。」

A:「この部屋と部屋のあいだに扉をつけませんか。」

B:「いらぬよ。猫が出入りできなくなる。」

A:「でもここは女の子の部屋でしょう、気を遣った方がいい。とりあえずつけて閉じなければいいでしょう。」

B:「そういうことなら。」

その後、ソーシャルワーカーが話をまとめる段階で「当該貧困者はトタン屋根と木材の壁と正しい床があり、部屋を仕切る扉のある家を望んでいる」と記述された。上記の対話は、開発ワーカーの文脈に貧困者が囚わられも乗せられて応答している場面である。しかし開発ワーカーは、自らの信じる専門的使命にのっとり、貧困者の要望を聞き出せたことで仕事に満足を得るだろう。そして、このソーシャルワーカーのレポートをもとにやってきた役人は、貧困者に「あなたはちゃんとした家に住みたいとのことだったので、所望されたものを持ってきました」と告げて、トタンをはじめとした資材を置いていく。よくわからないままに与えられた貧困者はそれらの「資源」を長いあいだ放置することもあれば、売って現金化することもあるし、別の用途に使ったりもする。これは極端な例ではあるが、この場合の貧困者は、それまで考えたことのない提案を次々にされていくことで、「あえていえば」のこたえを積み重ねている。それがあえての集積にも拘らず、「彼が望んだ事実」となっていったことに注目したい。「まあ6割くらいそうかもしれない」という程度の肯定が積み重なると、本来はグレーゾーンとしてはっきりしないことも、黒白ははっきりつけられることになるのだ。

ところが、この事例でのソーシャルワーカーのように、専門家はその専門性の高さへの自負と仕事の性質から、たとえそれがグレーゾーンを無理にはっきりさせた結果だったにせよ、そう深刻には受けとめない。なぜなら、貧困を改善することが彼／彼女の使命であり、貧困者のグレーゾーンは無知によるものであり、知識を与えてアドバイスをしてこそ、使命を達成できるからである。ソーシャルワーカーになるまでの実習でも、またその後の対応においても、自らが相手にとって理想の社会階層・状況にあるという意味で優位にあり、自分が過っている可能性などは認識しにくい状況を積み重ねてきている。そこでは「無知な貧困者」を自明のものとする。だからこそ、貧困者が寄付してもらった木材やトタンを売って肉を買っていたなどという事実を知ると、怒ると同時に、何もわかっていない、援助しても意味のない人たちであると糾弾してしまう。だが、これは専門知による横暴だといっても過言ではない。この例のような「あらかじめ使用法を限定した資源を与える」という支援のありかたは一般的に行われているのが現状である。それを見直し、「何をどうしたら資源たりうるか」と問うべきであろう。

こうして、ふってわいた資源を好きに使って怒られる貧困地区住民と、冒頭で例に挙げ

た、疑問を投げかけてみたら置き去りにされてへこまされた小学生と。この両者に共通する、専門家との齟齬や距離があるとしたら、それをうみだすもととなっているのは、専門家の優位性という、ときとして横暴なものであり、相手の文脈を推しはかることを忘れてつくられてしまった専門家的身体といえるのではないだろうか。そして、これは日常的に彼／彼女らの「使命」にもとづく実践が行われるたびに形づくられた対応のしかた（ハビトゥス）でもある。電話相談の専門家も開発ワーカーも、いずれもが善意にもとづいて相手に応答すべく向き合っているのに、暴力に転化してしまうのは残念なことである。

そして、もうひとつ指摘したいのは、このような開発の場面での弱者への暴力についての多くの議論は、弱者に寄り添いすぎていることである。その結果、住民視点やボトムアップが提唱されることになるわけだが、冒頭の例のような「住民視点のつもり」や「ボトムアップの押しつけ」という事態に陥ってしまう。まれに自らの横暴に気づいて反省を綴り、強者への批判がなされることはあっても、どのようにして善意が横暴になってしまうのか、専門家の身体がいかに構築されるのかといった議論があまりみられない。なぜなら、途上国民よ、自らのようになれ、という思考のもと、行きつく先を体現している自らを俎上の載せる必要などないからである。だからこそ、弱者に寄り添うのと同じくらいの力を注いで「強者の論理（あるいは専門家の身体）」をひらくべきだと考えている。

2-3. 専門家的身体につくられかた：独特のリアリティ・システム

ここまでは主として専門家の失敗談について記述してきたが、専門家は卓越した技術や知を身につけており迫力があるのは確かなのだ。だからこそ、そのすごさを維持したまま失われたものを復権できるなら、あるいは、失わずに専門家であるなら、それに越したことはないだろう。

筆者が INRPAC 病院に医療の素人として現地入りしてすぐのころ、ベテランのチリ人理学療法士に施設内を案内され、ある入院患児の症例を説明されたときだった。当時、生後 10 ヶ月くらいの乳児が抱き上げられ、彼の手足はぶらんとぶら下がった。ただ眠っている子どものそれとは違って、しなやかにぶら下がっていて、骨も関節も感じさせないまるで人形のように思えた。揺れ動く手足を見ているうちに、血の気が引くのを感じてうずくまって立てなくなり、その場を退散した。この体験のあと病室へ行くのが怖くなった。理学療法士にも合わせる顔がないように感じた。何より、その乳児が「人形のように見える人間に見えないと思ってしまったこと」が貧血の理由だったこと、それについて言いようのない自責の念をおぼえた。しばらく引きこもっていたところだったが、赴任直後の失態を取り戻さねばならないとの思いから、すぐに理学療法士のところへ戻った。すると彼女は気にする風でもなく、実習でやってくる学生でもよくあることだから気にするなと言った。いっぽう、詫びるわたしに対して、何を詫びているのかを訊ねた。わたしが、自責の念に駆られたことについてこたえと、「確かに彼は人形のように人間に見えない。その現実からはじめなければ何もできない。その感傷はあなたのエゴで、そのほうがよほど彼に失礼だ。人類学の専門家には必要ない意見かもしれないけれど。」と言い放って行ってしまった。ここでは少しマイルドに訳したが、エキセントリックな彼女はもっと辛辣なことばをわたしに投げかけていた。そのおかげで今度は、自責の念に駆られたわたしのものの見方が瓦解し、どうしようもなく恥ずかしいような情けないような思いとともに、身を置いている施

設全体が、なじめない異空間に感じられた。

あとになってこの療法士と親しくなり、飲みに行くようになってから知ったことだが、この最初の洗礼は、施設にやってくる実習生の多くに浴びせているものだという事だ。ことばだけではなく、自らの自覚的・無自覚的な感覚さえも鍛えるのが専門性を高めることなのだ。専門家として必要な知識や技術を獲得していくうえでは、感覚のスイッチを切り替えるかのような、独特のリアリティ・システムを築き上げているようである。つまり、文脈を固定化して向き合う必要があるのだ。「オレンジの皮」や「手足が人形のようにうなだれた子ども」は、かけだしの専門家の、まだ専門家になるかならないかの境界上にある者のスイッチのON/OFFの具体的表現のように思う。このようにして独特のリアリティ・システム＝専門世界で生きる術としてのハビトゥスを身につけるのだろう。病院内における患者とは、病原体あるいはオレンジの皮として向き合うという意味で、ぬくもりや感情や社会的背景といった社会との関係性を切って診る対象である。医学知識（専門知）は病院のなかでの患者を診るという文脈において存在している。そしてその専門知は患者の前に圧倒的に優位である。専門家という身体あるいは専門知がある文脈においては素晴らしいことは確認できたと思う。では、その弱点とは何だろうか。

3. 専門家と文脈

文脈の移動と専門知

専門家の弱点、それは「文脈への配慮」である。というよりは、弱くても許されるのが、専門家である。冒頭の例において、研究室や自分の専門的術語になれた世界をとびだしてNHKのスタジオに身を置いた物理学者がうろたえたのは、文脈の移動に慣れていないだけでなく、鈍いせいだと思われる。その鈍さは、専門性を持つこと自体の（自覚的・無自覚的）優位性の認識にある。つまり、焦点となるのは「文脈の移動」だと考えられないだろうか。

筆者はいままでこそ本稿の主題として「文脈」を問題にしているが、大学に入った頃、文脈という単語の存在は知っていたものの、正直に言えばその適切な使いかたや意味がよくわからなかった、という驚愕の事実がある。この業界ではやけに出てくることばで、迂闊に聞いては恥ずかしいのだろうという判断から、それこそ使われる文脈を注意深く観察するうちにいつのまにか慣れてきて、使えるようになった。いまここで問題化しなければ数年のうちに、わからなかった自分のことは忘れたかもしれない。そして仮に忘れたとしてもおそらく問題が起こることはないだろう。専門性を高めていくこととはよいことであり、わからなかった自分を忘れることに教育や学術世界は否定的ではないからである。また、専門性を高めることは、ややもすると優位性にもなりうると同時に、専門外の人間に対して「なぜわからないのだろう」という疑問ともなっていく。しかし専門知を社会へとひらくときに重要なのは、むしろ「なぜ自分はわかる（ようになった）のか」という発想ではないだろうか⁷⁰。

では、2-2のソーシャルワーカーの事例で無理やり白黒つけてしまったグレーゾーンに対して、それをどのようにひろげていったらよいのだろうか。結論から言うと、「相手の世界にはいること」にあるらしい。臨床の現場で次のような事例がある。いずれも認知症と診断された患者の例である。

例 1) 相手の世界をひらくパスワード

患者（大声で叫び続けている。ベトナム戦争などで報道カメラマンとして活躍してきた人物）

看護師（医師に）「〇〇さんは国際的フォトジャーナリストなんですよ」

相手が誇りに思うことに沿って紹介すると、とたんににこにこして穏やかになる。

例 2) 相手の世界にはいる

患者（すでに退職した大学教授）「授業に行かなくては」

療法士「何時からなのですか」

患者「いえ、わたしは退職しましたので」

このように患者に対して、療法士が相手の世界から出ないで応答した場合に、相手が世界を広げるか出て行くという。仮に、ここで以下の対応をすると、

患者「授業に行かなくては」

療法士「あなたはもう退職されていますよ」

患者（混乱）

ということになる。

大井氏によれば、認知症の患者はわたしたちが思う現実的世界が「灰色の霧の中に隠れているらしい」という。それぞれが独自の世界に在るのであり、相手が住む世界を知ることの重要性を強調する[大井 2008]。そんな状態をせん妄や痴呆ととらえ、論理だてて説明を押しつけ、現実に戻そうとしたところで相手が混乱するのは無理がない。敬意を常に示し、ゆったりとした時間を共有し、相手の能力を試したりせず、好きなこととできることをしてもらい、言語より情動を活用するのだという。痴呆⁷¹老人に限らない、人とのつながりについてのヒントである。これをうけて、いまいちど貧困やリハ支援の事例を考えると、自分の世界の文脈での常識や論理的思考からグレーゾーンをとらえていることがより際立って見えてくる。場面によって、グレーなものを白黒はっきりさせることが必ずしも悪くはないかもしれない。しかし、上下関係がありがちな一支援者と被支援者、医者と患者、教師と生徒、つまるところ専門家が優位に立ちがちな場面においては、専門家がその専門性の高さゆえに自ら価値観が正解であると認識し、そのまちがいに気づかずに推し進めることがあり、それが理解されないときは相手の無知さに起因させるという現象が起こる。専門家とは、文脈の移動に鈍く、かつ、自分の文脈に即した形で相手のことばをつかんでしまうのだ。

4. 専門知のリハビリテーションへ

4-1. 人類学という専門

おそらく、人類学者は比較的「文脈自由になる」訓練がなされていると思われる。調査において、どの文脈にいるかを判断して対応する場面にしょっちゅう直面するからである。

ときに、相手の文脈に乗ってみたり、いっぼうで自分の文脈をおしすすめて相手を取り込むことも肝要である。筆者は人類学を志す者の端くれとして、開発支援の現場で他の専門家との協働や彼らの仕事を見るにつけ、生きにくさを感じていた。そのひとつの理由は、支援者の多くが（ときに人類学者もこのひとりとなってしまうたりもするが）当該者の生きる世界で共有される価値観を背負ったまま現地に赴き、支援者と被支援者の関係性は優劣とすりかえられ、支援者の文脈が支援者の文脈に侵入するのがあたりまえの環境となってしまうことの居心地の悪さだったのだと思う。そこに住まう人びとの文脈への配慮を怠る・無視する・無視しても優位文化を移植すべき開発現場ではなんの問題でもないといえることに納得ができていた。

しかし、こうした納得のいかなさを論理的に説得できるような方法をいまだ人類学が持っているとはいえない。その意味では、暴力的だったり横暴だったりする専門家の一端にわれわれもまだいるのであり、そのことに自覚的にならなければいけないが、であればこそ「丸腰の手ぶらのアクション」によって文脈からの自由を心掛けたいと思う。

あるときふと訪れた、文脈から自由になった出会いの場面に、希望を託したい。

チリの首都サンチャゴ市で、高級住宅地の一角にあるスーパーマーケットでわたしは真剣にアイスクリームを選んでいた。ケーキ状にアイスが織りなされた魅力的な商品が約二百円。外箱の写真がじつにそそる。それを買い物カゴに入れたとき、「ねえってば。」と肩を叩かれた。見知らぬ親子連れの母親だ。アイスに夢中で気づかなかったが、少し前からいたようだ。すると「小銭を頂戴。子どもにアイスを買ってあげたいの」という。そうした要求すべてに応えるときりがないので一度は断ったものの、子どもの目がわたしのアイスの外箱に釘付けになっている。さすがにきまりが悪い。ポケットにあった小銭を渡してその場を離れた。しばらくしてスーパーをでたところの横断歩道に先ほどの親子がおり、子どもがアイスを食べていたので少しほっとしたが、母親は別の信号待ちの男性に小銭を要求していた。筆者に気づいた彼女は近寄ってくるや否や「今夜食べるものもないの」といいかけた。筆者は発言をきいていたし母親の下心もわかっていたが無視して、単純な興味から「どこから来ているの？」と尋ねた。そこはJICAによって住むことを指定された高級住宅地の一角であり、その近くには低所得者居住区はなかった。彼らが徒歩で、しかも子連れで来ることは容易ではない。だとすればバス代がかかるからだ。母親は面食らったような顔をしたあとに、不意の質問に素直に答えてくれたので、信号が変わるまでの少しのあいだ、世間話をした。すると子どもが「あなたは韓国人？中国人？」と聞いてきたので、日本人だというと、母親がうれしそうに「はじめて話した日本人よ！」と興奮気味になった。「チリには日本人があまりいないからね」といって簡単なあいさつをしたあと信号をわたっていくと、背後から「ねえほんとにありがとう、話せて嬉しかった」と大声で母親に叫ばれて照れくさくなり、しかし、筆者も嬉しかった。結局、追加の小銭は渡していなかったのに。

たんなる他人同士の出会いをしたふたりは、経済的区分による上下で境界づけられた枠のなかで、「乞う／施す」という目的達成のために、およそ人間同士の出会いらしくないやり取りをする文脈におかれている。それが、不意の問いによって文脈が変わり、ふたりの人間同士の交流になったと言い換えてもいいだろう。彼女と筆者のあいだに固有のものとして生まれた関係性だ。つまり、貧困者とそうでない者の出会いは、「通常」の文脈では関

係性が固定化され、ふたりはその文脈に従う。その文脈はふたりのあいだに境界を設け、それに伴う行動すらも規定してかかっている。しかし、まだチリの「通常」の文脈や境界に馴染んでいなかった筆者の不意の問いによって、文脈が移動し、境界が揺らぎ、文脈にしばられていない状態になったために、それぞれの「個」が顔を出したのである。文脈とはいわば「〈顔〉のみえる関係」という、フーコーのいうシステム＝装置とは違う世界を生きる場そのものである。つまり、母親はシステムとしての関係に依存して、わたしとの距離を瞬時のうちにはかり、小銭をもらうという行為によってそのシステムを強化していたにもかかわらず、「〈顔〉のみえる関係」性の代表的コミュニケーションとして、そのシステムとは無縁の会話に引きずり込まれたとき、一瞬システムから逃れたのである。

4-2. 専門知のリハビリテーション

人は、複数の文脈のうちに生きているが、そのなかの支配的な文脈に絡めとられている。自らが長く身を置く環境によってその知と身体を形成し、逆にまた、その知と身体によって自らの環境を作り上げてもいる。ブルデュの秀逸なハビトゥス論ではブラックボックスに入れられてしまった、なぜ身につくのかという部分の解明は難儀であろう。しかし、グレーゾーンやあいまいなものを、もう少し丁寧に扱うことはできる。専門家はその偏知を自覚し、文脈の移動を自在にこなしてこそ、つまり、リハビリテーションしてこそ専門知を活かせるのではないかと思う。リハビリテーションとは「失ったものを回復する」という意味である。人類学もどのような専門領域も、目的ではなく手段であるとわたしは考えている。解決しなければならないと思うことや、知りたいと思うこと、戦わねばならないことに向き合うための方法である。人類学を含めてさまざまな学問が、学問たるべくして「恥ずかしい自分を消す」ような学問化をしてしまうよりも、かつて自分はこうであった、ということも抱えつついくことが大事である。恥ずかしい経験のないよううまれつきの秀才や天才は、想像力をもつしかないだろうか。

さいごに、「専門知のリハビリテーション」の具体例としてしつこいようだが本章2-2の例に即して記して結びとしたい。筆者が多少なりとも文脈移動から自由になることを心がけつつ低所得者居住区のとある扉のない家に扉をつける現場に居合わせたなら、という想定である。その家流の扉がどういうものでありうるかと模索すること、よそよそしいものを飼いならして生活空間に馴染ませるようにする、その支援を行うであろう。それで扉が暮らしに馴染み、その家流のものになったとき、そんなものは扉の役割とは言えないとか、扉というものの定義からかけ離れているという批判があっても気にならないであろう（使用法を限定して資源を与える思考のもとでは、定義にみあった扉を押しつけがちである）。ある程度の定義の参照は必要かもしれないが、無理に従う必要もない。それで呼び名が“扉「的」なもの”といわれようとも、その家の住人が満足であれば、呼称や定義は問題ではない。異文化に相對するときの、「（開発者にとって）至上とされる技術や資源を土地にあてはめる思考」と、「その土地の文脈における至上や資源とは何か（その技術を土地においてどうしたら至上となりうるか）を思考すること」という違いである。これはどちらかが正しいのではなく、どちらもうまくバランスよく存在していれば良い。ものの見方にちょっとこだわる、という以外の専門技術も何もない「丸腰の手ぶら」で方々を渡り歩くと、多くのことが気になり、たくさんのが気がなくなくなる。開発現場にはそうい

う役割の人間がいることが必要なのかもしれない。ただし、これは人類学的偏知かもしれないという自覚を常に持ちつつ、である。

なお、本研究は以下の科学研究費補助金および研究助成により調査研究が実現した：
科学研究費補助

- ◆基盤研究 (B) 「感情と実践：開発人類学の新たな地平」 2012-2015 (代表：筑波大学・関根久雄)
- ◆若手研究 (B) 「スラム観光をめぐる人類学的研究：ラテンアメリカの現状から」 2012-2015 (代表：立教大学・内藤順子)
- ◆挑戦的萌芽研究 「高密度デジタルデバイスを用いた<ひと>焦点化フィールドワーク手法の開拓」 2015-2017 (代表：早稲田大学・内藤順子)
- ◆挑戦的萌芽研究 「同時代の喫緊課題に対する文化人類学の<応答>可能性」 2014-2016 (代表：京都大学・清水展)
- ◆基盤研究 (A) 「応答の人類学：フィールド、ホーム、エデュケーションにおける学理と技法」 2016-2021 (代表：関西大学・清水展)
- ◆基盤研究 (A) 「ジェンダーに基づく<暴力複合>の文化人類学的研究」 2016-2019 (代表：京都大学・田中雅一)

早稲田大学特定課題基礎助成研究

- ◆ 「まちづくり的地域リハビリテーション活動」の人類学的研究 2015 (代表：内藤順子)

謝辞

2007年に九州大学の博士課程を単位取得退学して日本学術振興会特別研究員(PD)のあいだに書き上げようとしていた博士論文を、ようやく20年の時をかけて完成させることができました。長い時間がかかったのはひとえにわたしの怠惰によるものですが、いっぽうで、絶え間なくチリへ通う機会があったためにつねに変化するフィールドのどこまでもを書こうと欲張ったために、踏ん切りをつけたまとめができなかったということもあります。そうした経緯で今世紀初めの調査からはじまる本研究の主査を快く引き受けていただいた早稲田大学人間科学学術院の竹中宏子先生には心より御礼申し上げます。これまで先延ばしにしてきたことを逃げず挫けず完成にこぎつけられたのは、ひとえに竹中先生の励ましと最大限の配慮をいただけたからにはほかなりません。そして、副査をお引き受けくださった同じく早稲田大学人間科学学術院の名誉教授蔵持不三也先生、同教授井上真先生。審査過程では様ざまなご迷惑をおかけしたにもかかわらず有意義かつ生産的なご指摘をいただき、本研究が集大成ではなくスタートであるとあらためて認識するに至りました。感謝申し上げます。そして九州大学名誉教授でありNPO法人ウェルビーイング主席研究員の關一敏先生。大学院生の頃からのネタに辛抱強くお付き合いいただき、深謝申し上げます。

ふりかえてみると、ほんとうに多くの方々のおかげをもってこれまで研究を続けてこられました。本研究は、千葉大学名誉教授の武井秀夫先生が九州大学へ集中講義でおいでにならなかつたらはじまらなかったことでした。当時、100年前のテーマといわれた邪視についての修論を書き終えようとしていたわたしをJICAプロジェクトに引き入れてくださらなければ、チリへ行くことも貧困や支援やリハビリについて研究することも考えることもなかつたでしょう。本当に貴重な機会をいただき、またチリでのプロジェクト実施期間中とその後もお世話になり続けたことに深く御礼申し上げます。

そしてJICAプロジェクト終了後からこれまでいつも渡航調査に参れたのは、これから記す各先生がたの科研プロジェクトに加えていただいたことによります。「ストリートの人類学」の関根康正先生。関根康正先生には学振PDとして受け入れいただき、また科研事務の担当をさせていただくことで研究はもちろんのこといまや学務に重要なスキルを身につけさせていただけた重要な時期でした。ストリートあるいは「下から」の視点はわたしの研究の方向性を大きく変えるものでした。そして「感情の人類学」の国立民族学博物館共同研究と科研の関根久雄先生。感情を研究の俎上に堂々と載せるだけでなく、むしろそれが必要であることを知らしめる一連のプロジェクトは人類学にとってももちろんわたしにとって刺激的でありまた研究の展開をうむものとなりました。あわせて国立民族学博物館の鈴木紀先生にも国立民族学博物館共同研究において支援のテーマでの研究の方向性を考えるきっかけを頂戴しました。そして、「応答の人類学」の代表清水先生およびそのメンバーのみなさま。何かにつけて筆の遅いわたしを見捨てずに博士論文の完成まで潤沢な調査資金をいただきましたことを心の底から感謝申し上げます。

科研でお世話になった先生がたのほかに、研究会や学会などの機会に様ざまな知識や刺激やコメントをくださった阿部年晴先生、波平恵美子先生、小田亮先生、竹沢尚一郎先生。憧れの先輩方には励まされてきました。

そして、フィールドの家族と仲間と友人たちに。Hernan SOTO、Angelica GUTIERRES、

Marisol ROJAS とりわけ Amigas Onsen チリの母 Marcela GARCIA、チリの姉妹 Marianela SARUE、あなたがたがいなければわたしのチリでの調査はなしえませんでした。
Un millon de gracias.

あらためて 20 年の長きにわたり、読み書きから研究の何たるかまでずっと実践の共同体のなかで導いてくださった関一敏先生。就職も喜んでくださいましたが、やはり博士論文こそが恩返しのように思います。渋谷の宮益坂で初めてお会いしてからこれまで、いつかは博士論文を書くものと思っていたけれど、いまようやく。筑波で野草をついばんでいた元気いっぱいの、スペイン語だけしか武器のない猿娘が……遅くなりましたがここまでの展開を収めることができます。先にも書きましたが、これはスタートだという認識で気持ち新たに邁進する所存です。

最後に、いつも応援してくれていた家族に。いつもしあわせな環境を整えてくれていた両親、励ましと称賛をくれていた祖母に心より、ありがとう。

参考・引用文献および資料

◆序章

浦部浩之

1998「チリがめざす貧困の撲滅：「貧困克服計画」とタルタル市における実践」『ラテンアメリカ・レポート』15(3) 31-39

河合隼雄・鷺見清一

2003 『臨床とことば——心理学と哲学のあわいに探る臨床の知』, 阪急コミュニケーションズ・J・メイナード

1995『雇用・利子および貨幣の一般理論』塩野谷祐一訳、東洋経済新報社

菅原鈴香

2000「貧困概念をめぐる一考察：開発学と人類学からの貢献とヴェトナムの貧困問題調査の現状と限界」『国際協力研究』16(1)：69-7。

砂原茂一

1980『リハビリテーション』岩波史新書

セン・アマルティア

1999『不平等の再検討：潜在能力と自由』池本幸生他訳、岩波書店

2000『自由と経済開発』石塚雅彦訳、日本経済新聞社

2002『貧困の克服：アジア発展の鍵はなにか』大石りら訳、集英社新書

足立明

1995「開発現象と人類学」『現代人類学を学ぶ人のために』米山俊直編、pp.119-138、世界思想社

アードナー・エドウィン

1987『男が文化で、女が自然か？：性差の文化人類学』山崎カヲル訳、晶文社

内藤順子

2004「貧困をひらく：チリ・サンチャゴ市のスラム住民の暮らしと貧困克服計画をめぐる」『九州人類学会報』31：pp.56-62

初鹿野直美

2005「貧困の国際政治学：「貧困削減」の背後の政治力学」『ワールド・トレンド』6月号 No.117：pp.24-27

前川啓治

1996「開発援助と人類学の指向性：方法援助の視点から」『族』27：9-18

松園万亀雄

1999「国際協力と人類学の接点を求めて」『国際協力研究』15(2)：1-10

ルイス・オスカー

1945『貧困の文化：5つの家族』高山智博訳、新潮選書

1970, 1971『ラ・ビーダ1~3』行方昭夫・上島建吉訳、みすず書房

R.チェンバース

2000『参加型開発と国際協力・変わるのはわたしたち』野田直人・白鳥清志訳、明石書

店

ロサルド・レナート

1998『文化と真実：社会分析の再構築』椎名美智訳、日本エディタースクール

Johon Friedmann 1986, The world city hypothesis, Development and change. Vol.17

CAMBI Rosita(ed.)

2003 *Chile sin Pobreza: Un Sueño Posible*. Libertad Desarrollo.

ESCOBAR, Arturo

1995 *Encountering Development: The Making and unmaking of the third world*.

Princeton University Press.

GAMBI, Mauricio

2005 *Pobreza, Crecimiento Económico y Políticas Sociales*. Editorial Universitaria.

Ministerio de Planificación y Cooperación(MIDEPLAN)

1996 Balance de seis años de las políticas sociales 1990-1996.

2001 Pobreza e Indigencia e Impacto del gasto Social en la Calidad de Vida.

2002 Síntesis de los principales enfoques, métodos y estrategias para la superación de la pobreza. División Social Departamento de Evaluación Social

2004a Conceptos Fundamentales Sistema de Protección Social Chile Solidario.

2004b Serie CASEN2003: Volumen1, "Pobreza, Distribución del Ingreso e Impacto Distributivo del gasto Social".

Municipalidad de Peñalolén

1999 Diagnóstico Comunal de Peñalolén 1999.

2001 Diagnóstico Comunal de Peñalolén 2001.

2003 Diagnóstico Comunal de Peñalolén 2003.

OLIVALES, Lilian

2003 *El Círculo Maldito*, Aguilar el Mercurio,

SUSSER, Ida

1996 The Construction of Poverty and Homelessness in US Cities, *Annual Review of Anthropology*, 25:411-435.

VILLATOROS, Pablo y FERNÁNDEZ de Hogar de Cristo

2004a Radiografía de la Pobreza: Una Consulta Participativa a los Usuarios.

2004b Los Pobres y la Televisión: Una Consulta Participativa.

◆第1章

小田亮

1997「発展段階という物語：グローバル化の隠蔽とオリエンタリズム」『反開発の思想 岩波講座文化人類学 3』川田順造編、pp.61-78、岩波書店

田辺繁治

2002『日常の実践のエスノグラフィ』世界思想社

2003『生き方の人類学』講談社現代新書

A.セン

- 1999 (1999) 『不平等の再検討』 池本幸生他訳, 岩波書店
- P.ブルデュ
- 1993 (1997) 『資本主義のハビトゥス』 原山哲訳, 藤原書店
- R.レーヴィン
- 2002 (2000) 『あなたはどれだけ待てますか』 忠平美幸訳, 草思社
- SETA, M. Low
- 1996 The Anthropology of Cities: Imagining and Theorizing the City, *Annual Review of Anthropology*, 1996(25):383-409.
- 1994 Embodies metaphors: Nerves as lived experience, in *Embodiment and experience*, T. J. Csordas(ed.), Cambridge Univ. Press.
- Ministerio de Planificacion y Cooperacion : Division Social, *Pobreza y distribucion del ingreso en Chile, 2001 : Resultados de la encuesta de caracterizacion socioeconomica nacional*, Julio de 2001, MIDEPLAN, Chile
- Ministerio de Planificacion y Cooperacion : *Balance de seis anos de las politicas sociales*, 1996-2002, Agosto de 2002, MIDEPLAN, Chile
- SECPLAC : *Antecedentes comunales de Penalolen 2001-2002*, Enero de 2003, SECPLAC, Chile
- Ilustre Municipalidad de San Ramon : *Gestion municipal '01*, Enero de 2002, Municipalidad de San Ramon, Chile

◆第2章

- 小田亮
- 1997 「発展段階という物語：グローバル化の隠蔽とオリエンタリズム」『反開発の思想 岩波講座文化人類学 3』川田順造編、pp.61-78、岩波書店
- 2001 「越境から、境界の再領土化へ：生活の場での〈顔〉のみえる想像」, 杉島敬志編『人類学的実践の再構築：ポストコロニアル転回以後』世界思想社, 297 - 321
- 関根康正
- 2001 「他者を自分のように語れないか？：異文化理解から他者了解へ」『人類学的実践の再構築』杉島敬志編、pp.322-354、世界思想社
- 辻信一
- 2001 『スロー・イズ・ビューティフル』平凡社
- 2003 「時間という不幸：スローとファーストをめぐって」『環：歴史・環境・文明』Vol.15, 藤原書店, 156-163 頁
- ユクスキュル・ヤーコフ
- 2005 (1970) 『生物から見た世界』日高敏隆・羽田節子訳、岩波文庫
- Csordas, T.J.
- 1994 *Embodiment and Experience : The existential ground of culture and self.* Cambridge Studies in Medical Anthropology 2. Cambridge U.P.
- メルロ・ポンティ
- 1966 (1964) 『眼と精神』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房
- Hirschman, Albert

1984 *Getting Ahead Collectively : Grassroots Experiences in Latin America*, Pergamon Press Inc. (邦訳：2008『連帯経済の可能性：ラテンアメリカにおける草の根の経験』矢野修一他訳，法政大学出版)

石黒馨・上谷博編

1997『グローバルとローカルの共振：ラテンアメリカのマルチチュード』人文書院

◆第3章

大川正彦

2000「所有の政治学——所有的個人主義批判」『所有のエチカ』第7章所収，ナカニシヤ出版

グッド，バイロン・J

2001 (1994)『医療・合理性・経験——バイロングッドの医療人類学講義』江口重幸ほか訳，誠信書房

砂原茂一

1980『リハビリテーション』岩波書店

角田宇子

2001「開発の社会文化的側面」『開発学を学ぶ人のために』第2章所収、菊池京子編著、世界思想社

R. チェンバース

1997 *Whose Reality Counts?: Putting the First Last*, Practical Action Publishing

◆第4章

亀井伸孝・武田丈共編著

2008『アクション別フィールドワーク入門』世界思想社

亀井伸孝・小國和子・飯嶋秀治共編著

2011『支援のフィールドワーク』世界思想社

佐藤寛・藤掛洋子共編著

2011『開発援助と人類学：冷戦・蜜月・パートナーシップ』明石書店

武田丈

2015「参加型アクションリサーチ CBPR の理論と実践：社会科変革のための研究方法」

関西学院大

学研究叢書第168編

内藤直樹・山北輝裕

2014『社会的包摂／排除の人類学：開発・難民・福祉』昭和堂

ノラン・リオール

2007『開発人類学：理論と実践』関根久雄・玉置泰明・鈴木紀ほか訳、古今書院

和田信明・中田豊一

2010『途上国の人々との話し方：国際協力メタファシリテーションの手法』みずのわ出版

R. チェンバース

2000 『参加型開発と国際協力・変わるのはわたしたち』 野田直人・白鳥清志訳、明石書店

2011 『開発調査手法の革命と再生：貧しい人々のリアリティを求め続けて』 野田直人訳、明石書店

2014 Rulal Development: Putting tha last first

Municipalidad de Peñalolén

1999 Diagnóstico Comunal de Peñalolén 1999.

2001 Diagnóstico Comunal de Peñalolén 2001.

2003 Diagnóstico Comunal de Peñalolén 2003.

SETA, M. Low

1996 The Anthropology of Cities: Imagining and Theorizing the City, *Annual Review of Anthropology*, 1996(25):383-409.

1994 Embodies metaphors: Nerves as lived experience, in *Embodiment and experience*, T. J. Csordas(ed.), Cambridge Univ. Press.

Thure von Uexkull

1979 Lehbuch der psychosomayischen Medizin. Urban & Schwarzenberg, Munchen

VILLATOROS, Pablo y FERNÁNDEZ de Hogar de Cristo

2004a Radiografía de la Pobreza: Una Consulta Participativa a los Usuarios.

2004b Los Pobres y la Televisión: Una Consulta Participativa.

Ministerio de Planificacion y Cooperacion : Division Social, *Pobreza y distribucion del ingreso en*

Chile, 2001 : Resultados de la encuesta de caracterizacion socioeconomica nacional, Julio de2001,

MIDEPLAN, Chile

Ministerio de Planificacion y Cooperacion : *Balance de seis anos de las politicas sociales*,

1996-2002, Agosto de 2002, MIDEPLAN, Chile

SECPLAC : *Antecedentes comunales de Penalolen 2001-2002*, Enero de 2003, SECPLAC, Chile

Ilustre Municipalidad de San Ramon : *Gestion municipal' 01*, Enero de 2002, Municipalidad de San

Ramon, Chile

Ministerio de Planificación y Cooperación(MIDEPLAN)

1996 Balance de seis años de las políticas sociales 1990-1996.

2001 Pobreza e Indigencia e Impacto del gasto Social en la Calidad de Vida.

2002 Síntesis de los principales enfoques, métodos y estrategias para la superación de la pobreza. División Social Departamento de Evaluación Social

2004a Conceptos Fundamentales Sistema de Protección Social Chile Solidario.

2004b Serie CASEN2003: Volumen1, " Pobreza, Distribución del Ingreso e Impacto Distributivo del gasto Social" .

ONG, Ahiwa and COLLIER. J. Stephen (ed)

- Global Assemblages : Technology, politics, and ethics as anthropological problems.*
Blackwell, 2005
- CASTELLS Manuel.
2005 *Globalización, desarrollo y democracia : Chile en contexto mundial*, Fondo de Cultura Económica, Santiago de Chile.
- カステル・マニユエル
1999『都市とグラスルーツ：都市社会運動の比較文化理論』法政大学出版会
今村仁司
1982『暴力のオントロジー』勁草書房
渋谷望
2001「消費社会に於ける恐怖の活用」『現代思想』vol129-7, pp. 64-83, 青土社
関根康正
2006『宗教紛争と差別の人類学：現代インドで<周辺>を<境界>に読み替える』世界思想社
2004「序論<都市的なるもの>を問う人類学的視角」『<都市的なるもの>の現在』関根康正編, 東京大学出版会, pp. 1-39,
2001「他者を自分のように語れないか? : 異文化理解から他者了解へ」『人類学的実践の再構築』杉島敬志編, pp. 322-354, 世界思想社
- 高橋正明
1999「排除と統合：近代ラテンアメリカ都市のエリートと民衆」『<南>から見た世界 5 ラテンアメリカ』清水透編, 大月書店, pp. 73-102
- Johon Friedmann 1986, The world city hypothesis, Development and change. Vol.17
- A. セン 1999年(1999年)『不平等の再検討』, 池本幸生他訳, 岩波書店
2002年(2002年)『貧困の克服』, 大石りら訳, 集英社新書
2000年(1999年)『自由と経済開発』, 石塚雅彦訳, 日本経済新聞社
- A. トゥレーヌ 1989年(1976年)『断裂社会』, 佐藤幸男訳, 新評論
- P. ブルデュ 1993年(1977年)『資本主義のハビトゥス』, 原山哲訳, 藤原書店
- 朽木昭文
2004『貧困削減と世界銀行：9月11日米国多発テロ後の大変化』アジア経済研究所
世界銀行
2000『世界開発報告 2000/2001』
2004『世界開発報告 2004』
- 速水祐次郎・秋山孝允・秋山スザンヌ・湊直信
2003『開発戦略と世界銀行：50年の歩みと展望』知泉書館
- 大井玄
2004『痴呆の哲学』弘文堂
- 大川正彦
2000「所有の政治学——所有的個人主義批判」『所有のエチカ』第7章所収, ナカニシヤ出版
- グッド, バイロン・J

- 2001 (1994) 『医療・合理性・経験——バイロングッドの医療人類学講義』江口重幸ほか
訳, 誠信書房
- 内藤順子
2008 「<下からの>人類学的研究——チリにおける地域リハビリテーションの実践か
ら」『国際開発研究』17(2) : 77-91
2009 「生きる文脈の交錯する開発援助の現場から : 「手ぶらで渡り歩く」というアクシ
ョン」『九州人類学会報』36
- ブルデュ, ピエール
1993 (1977) 『資本主義のハビトゥス』原山哲, 藤原書房
- 河合隼雄・鷺見清一
2003 『臨床とことば——心理学と哲学のあわいに探る臨床の知』, 阪急コミュニケーシ
ョン
- アードナー・エドウィン
1987 『男が文化で、女が自然か? : 性差の文化人類学』山崎カヲル訳、晶文社。
イグナティエフ・マイケル
1999(1984) 『ニーズ・オブ・ストレンジャーズ』添谷育志・金田耕一訳、風行社。
- 小田亮
1997 「発展段階という物語 : グローバル化の隠蔽とオリエンタリズム」『反開発の思想 岩
波講座文化人類学 3』川田順造編、pp. 61-78、岩波書店。
- Csordas, T.J.
1994 *Embodiment and Experience : The existential ground of culture and self.*
Cambridge Studies in Medical Anthropology 2. Cambridge U.P.
- イリイチ・イヴァン
2003(1998) 「速度の囚人たち」『環 : 歴史・環境・文明』Vol.15, 藤原書店, 32-41 頁
- アードナー・エドウィン
1987(1975) 「“女性問題” 再考」山崎カヲル訳, 『男が文化で女は自然か : 性差の文化人
類学』晶文社, 121-134 頁
- Lock, Margaret.
1993 *Cultivating the Body : Anthropology and Epistemologies of Bodily Practice
and Knowledge. Annual Review of Anthropology 22:133-155.*
- 松田素二
1999 『抵抗する都市 : ナイロビ移民の世界から』岩波書店
- 新津晃一
1984 「特集 発展途上国のスラムと社会変動」『アジア経済』25 巻 4 号, 2-146 頁
- Scott, J.C.
1985 *Weapons of the Weak : Everyday forms fo Peasant Resistance, Yale U.P.*
1999 「日常型の抵抗」『世界政治の構造変動 3 : 発展』坂本義和編, 岩波書店
- Sharp, A. Lesley.
2000 *The Commodification of the Body and its Parts, Annual Review of
Anthropology 29:287-328.*

Shilling,Chris.

1993(2002) *The Body and Social Theory (2nd edition)*. SAGE Publications Ltd.

Susser,I.

1996 The Construction of Poverty and Homeless in US Cities. *Annual Review of Anthropology* 25:411-435.

辻信一

2001 『スロー・イズ・ビューティフル』 平凡社

2003 「時間という不幸：スローとファーストをめぐる」『環：歴史・環境・文明』
Vol.15,藤原書店,156-163 頁

◆第5章

上野千鶴子

2002『差異の政治学』 岩波書店。

関根康正

1995『ケガレの人類学——南インド・ハリジャンの生活世界』

内藤順子

2008「<下からの>人類学的研究——チリにおける地域リハビリテーションの実践から」『国際開発研究』17(2) : 77-91

初鹿野直美

2005「貧困の国際政治学：「貧困削減」の背後の政治力学」『ワールド・トレンド』6月号
No. 117 : pp. 24-27

前川啓治

1996「開発援助と人類学の指向性：方法援助の視点から」『族』27 : 9-18

メルロ・ポンティ

1966(1964)『眼と精神』 滝浦静雄・木田元訳、みすず書房

ユクスキュル・ヤーコフ

2005(1970)『生物から見た世界』 日高敏隆・羽田節子訳、岩波文庫

ロサルド・レナート

1998『文化と真実：社会分析の再構築』 椎名美智訳、日本エディタースクール

CAMBI Rosita(ed.)

2003 *Chile sin Pobreza: Un Sueño Posible*. Libertad Desarrollo.

GAMBI, Mauricio

2005 *Pobreza, Crecimiento Económico y Políticas Sociales*. Editorial Universitaria.

Csordas, T. J.

1994 *Embodiment and experience*, T. J. Csordas(ed.), Cambridge Univ. Press.

Ministerio de Planificación y Cooperación(MIDEPLAN)

1996 Balance de seis años de las políticas sociales 1990-1996.

2001 Pobreza e Indigencia e Impacto del gasto Social en la Calidad de Vida.

2002 Síntesis de los principales enfoques, métodos y estrategias para la superación
de la pobreza. División Social Departamento de Evaluación Social

2004a Conceptos Fundamentales Sistema de Protección Social Chile Solidario.

- 2004b Serie CASEN2003: Volumen1, "Pobreza, Distribución del Ingreso e Impacto Distributivo del gasto Social".
- Ministerio de Planificación y Cooperación(MIDEPLAN)
- 2001 Pobreza e Indigencia e Impacto del gasto Social en la Calidad de Vida.
- 2002 Síntesis de los principales enfoques, métodos y estrategias para la superación de la pobreza. División Social Departamento de Evaluación Social
- 2004a Conceptos Fundamentales Sistema de Protección Social Chile Solidario.
- 2004b Serie CASEN2003: Volumen1, "Pobreza, Distribución del Ingreso e Impacto Distributivo del gasto Social".
- 2007 Resultados Pobreza CASEN2006
<http://www.mideplan.cl/final/categoria.php?secid=25&catid=124>
- Hirschman, Albert
- 1984 *Getting Ahead Collectively : Grassroots Experiences in Latin America*, Pergamon Press Inc. (邦訳: 2008 『連帯経済の可能性: ラテンアメリカにおける草の根の経験』 矢野修一他訳, 法政大学出版)
- 石黒馨・上谷博編
- 1997 『グローバルとローカルの共振: ラテンアメリカのマルチチュード』 人文書院
- 今村仁司
- 1982 『暴力のオントロジー』 頸草書房
- 大井玄
- 2008 『「痴呆老人」は何を見ているか』 新潮新書
- 2009 『環境世界と自己の系譜』 みすず書房
- 小田亮
- 2001 「越境から、境界の再領土化へ: 生活の場での〈顔〉のみえる想像」, 杉島敬志編『人類学的実践の再構築: ポストコロニアル転回以後』 世界思想社, 297 - 321
- 鎌田實
- 2010 『空気は読まない』 集英社
- コリア・ポール
- 2008 『最底辺の10億人』, 中谷和男訳, 日経BP社
- Garcés, Mario
- 2008 *El mundo de las poblaciones, Nosotros los Chilenos-5*, LOM Ediciones Chile.
- 齋藤純一
- 2004 『福祉国家/社会的連帯の理由』 ミネルヴァ書房
- Susser, I.
- 1996 The Construction of Poverty and Homeless in US Cities. *Annual Review of Anthropology* 25:411-435.
- 篠原資明
- 1992 『トランスエステティック: 芸術の交通論』 岩波書店
- スピッカー・ポール
- 2008 『貧困の概念: 理解と応答のために』 坏洋一監訳, 生活書院 (2007)
- 辻信一
- 2001 『スロー・イズ・ビューティフル』 平凡社
- 関根久雄

- 2015『実践と感情：開発人類学の新展開』春風社
- 内藤順子
 2009「ストリートに育まれる身体」『ストリートの人類学』関根康正編, SER80, 245-270,
 国立民族学博物館
 2010「国境を超えた「貧困空間」の創出」「科学研究費補助金基盤研究(A)」最終年度報告書
- バラ, アジット・ラペール, フレデリック
 2005『グローバル化と社会的排除：貧困と社会問題への新しいアプローチ』福原宏幸・中村健吾監訳, 昭和堂 (2004)
- ベイ, ハキム
 1997(1991)『T. A. Z. : 一時的自律ゾーン』箕輪裕訳, インパクト出版会
- 三浦耕吉郎
 2006「<構造的差別>のソシオグラフィにむけて」, 三浦耕吉郎編『構造的差別のソシオグラフィ：社会を書く／差別を解く』世界思想社, 1 - 39
- ヴァカン, ロイック
 2008『貧困という監獄：グローバル化と刑罰国家の到来』森千香子・菊地恵介訳, 新曜社(1998)
- ◆第6章
- 亀井伸孝・武田丈共編著
 2008『アクション別フィールドワーク入門』世界思想社
- 亀井伸孝・小國和子・飯嶋秀治共編著
 2011『支援のフィールドワーク』世界思想社
- 佐藤寛・藤掛洋子共編著
 2011『開発援助と人類学：冷戦・蜜月・パートナーシップ』明石書店
- 武田丈
 2015「参加型アクションリサーチ CBPR の理論と実践：社会科変革のための研究方法」
 関西学院大
 学研究叢書第 168 編
- 内藤直樹・山北輝裕
 2014『社会的包摂／排除の人類学：開発・難民・福祉』昭和堂
- ノラン・リオール
 2007『開発人類学：理論と実践』関根久雄・玉置泰明・鈴木紀ほか訳、古今書院
- 和田信明・中田豊一
 2010『途上国の人々との話し方：国際協力メタファシリテーションの手法』みずのわ出版
- R. チェンバース
 2000『参加型開発と国際協力・変わるのはわたしたち』野田直人・白鳥清志訳、明石書店
- 2011『開発調査手法の革命と再生：貧しい人々のリアリティを求め続けて』野田直人訳、明石書店
- 2014 Rulal Development: Putting tha last first

Municipalidad de Peñalolén

1999 Diagnóstico Comunal de Peñalolén 1999.

2001 Diagnóstico Comunal de Peñalolén 2001.

2003 Diagnóstico Comunal de Peñalolén 2003.

SETA, M. Low

1996 The Anthropology of Cities: Imagining and Theorizing the City, *Annual Review of Anthropology*, 1996(25):383-409.

1994 Embodies metaphors: Nerves as lived experience, in *Embodiment and experience*, T. J. Csordas(ed.), Cambridge Univ. Press.

Thure von Uexkull

1979 Lehbuch der psychosomayischen Medizin. Urban & Schwarzenberg, Munchen

VILLATOROS, Pablo y FERNÁNDEZ de Hogar de Cristo

2004a Radiografía de la Pobreza: Una Consulta Participativa a los Usuarios.

2004b Los Pobres y la Televisión: Una Consulta Participativa.

Ministerio de Planificacion y Cooperacion : Division Social, *Pobreza y distribucion del ingreso en*

Chile, 2001 : Resultados de la encuesta de caracterizacion socioeconomica nacional, Julio de2001,

MIDEPLAN, Chile

Ministerio de Planificacion y Cooperacion : *Balance de seis anos de las politicas sociales*,

1996-2002, Agosto de 2002, MIDEPLAN, Chile

SECPLAC : *Antecedentes comunales de Penalolen 2001-2002*, Enero de 2003, SECPLAC, Chile

Ilustre Municipalidad de San Ramon : *Gestion municipal' 01*, Enero de 2002, Municipalidad de San

Ramon, Chile

Ministerio de Planificación y Cooperación(MIDEPLAN)

1996 Balance de seis años de las políticas sociales 1990-1996.

2001 Pobreza e Indigencia e Impacto del gasto Social en la Calidad de Vida.

2002 Síntesis de los principales enfoques, métodos y estrategias para la superación de la pobreza. División Social Departamento de Evaluación Social

2004a Conceptos Fundamentales Sistema de Protección Social Chile Solidario.

2004b Serie CASEN2003: Volumen1, " Pobreza, Distribución del Ingreso e Impacto Distributivo del gasto Social" .

注

¹ 「支援」と「援助」のことばづかいについて、「支援」とは相手を支えて活動を推進する

／推進する活動をいうが、活動主体は被支援者である。いっぽう「援助」とは相手ができないことを代わりにやること、という意味合いが強い活動である。本論文では事例と文脈に応じて使い分けることとする。

2 [J.M.ケインズ 1995]

3 これまで、1960年代にO.ルイスが調査して以降1970年代初頭までその批判と応答が続いたものの、研究は出ていない。1980年代後半から90年代前半にとくにアメリカでホームレス研究が見られるようになるが、この数自体も少ない。また、ホームレスと貧困は異なる。ホームレスの場合、個人がホームを喪失している状態であり、貧困は例外はあるもののたいていが家族単位で貧困であり、スラム化している状態である。1990年以降から現在までのAnnual Review of Anthropologyを参照してみると、Povertyについて取り上げているのは検索上では161本あるものの正面から取り上げているのは1996年と2019年それぞれ1本しかなく、前者は貧困下の言語形成をあつかった言語人類学的な研究であり、後者はアメリカ合衆国のホームレス研究である。日本においては地理学出身のグループが巡検にもとづく本をだしているほかは特筆すべきものが見当たらない。

4 [O.ルイス 1940, 1970, 1971]

5 「先行研究が希薄」と断言することは、筆者の目配りの不十分さや嗅覚の悪さともかかわるため慎重に作業したが、こういわざるを得ない。参考までに「人類学には貧困の理論というべきものはない」とする資料をあげておく[菅原 2000:72][Susser 1996:411-435]。なお、希薄の理由についてここで十分に問題化して議論することはできないが、見通しとしてはルイスの「貧困の文化」が初発の人類学的貧困研究であったこととかかわるであろう。ルイスの文化人類学の出自はR.レッドフィールドやG.フォースターなどとともにあり、当時は農村研究に端を発する「民俗・都市連続体」にかんする議論に沸いていた。その頃、農村における貧困というのは一般的なことであり、農民が都市に出てそこでまた貧困の暮らしを余儀なくされるのも不思議はなかったであろう。ルイスは「民俗・都市連続体」論批判の線上から、都市に流入した農民がそこで独自に形作った、農村における民俗文化とは異なる文化、すなわち都市における「貧困の文化」に注目し、それを貧困とは区別して、貧困を再生産する構造概念であると主張したわけである。ここでの主題はあくまで文化であり、人類学界において「貧困の文化」への注目を集めこそすれ、貧困という土台そのものは日常化した単なる状況であったがために着目されず、「貧困の文化」についての議論が収束した後には、貧困そのものは人類学の主題としては取り残され、結果的にその後の貧困研究の非積極性の原因となりえたと考えられる。また対象となる地域は研究対象というよりは援助対象としての地位を確立していくことになったことも同じく指摘できるだろう。現にG.フォースターはその後、積極的にラテンアメリカにおける医療援助とくに保健計画に参加していった[Foster and Anderson 1978:7]。

6 [Escobar 1995]は、貧困が問題化されるスタート地点を1950年代のアメリカの開発熱の時代としている。

7 1981年にA.セン、1983年にR.チェンバースらがそれぞれ、経済偏重のアプローチを批判していることから逆照射しての推測が可能である。なお、これらの議論は「一括して貧困者を見ることはできない」という貧困内部のバリエーションを問題化した批判および反省点であり、主として貧困線という数値的基準を批判対象としている。したがって貧困という概念そのものの成り立ちや、枠組みとして妥当かどうか、あるいはその自明性への批判には向かっていない。

8 ある人が、当該社会の法的、政治的、経済的取り決めのなかで正当性を持って自由にもちいることのできる財の組合せの集合を、その人のエンタイトルメントという。

9 本研究におけるG地区の貧困者たちが生活のうえで相対的に貧富の差を感じる場面があるのは確かだという点で、扱っているのは後者ということになるが、いま貧困者と呼ばれ

る人たちが、自らの生活状況のマイナスを相対的に実感したうで貧困と自称してまとまっているわけではない。経済数値的に貧困線付近で暮らしている人びとの現実にとって、その暮らしが相対的貧困であろうと絶対的であろうとどうでも良いことである。この点まではチェンバースおよびセンの貧困線への批判とも沿う流れである。しかし筆者が問題だと感じるのは、当事者の与り知らぬところで不便な暮らしぶりのまとまりを貧困と名づけ、相対的貧困という当事者に関係のない区分したうで、その相対性をはかる主体がまとまりの外部におり、外部の視点から見た相対的な貧しさや特徴＝「貧困の表象」が概念化されていることである。

¹⁰ [松園 1999:5]。さらに、かつての植民地はもともと先住民地域や「未開」とされていたところであり、人類学のフィールドでもある。そこでの開発事業にかかわりを余儀なくされることもあったものの、住民の生活背景や文化には関心を示さない開発に重用されることはあまりなく、また前川によると、人類学も開発に対するある種の不信感を抱いていたこともまた否めない[前川 1996:10]。

¹¹ 2005年度日本民族学会分科会・関根久雄代表「援助実践と人類学：その距離感の模索」や国立民族学博物館共同研究「開発と人類学」鈴木紀など。

¹² 松園は「...先進国の中で日本ほど人類学が援助事業に参加していない国は珍しい—(中略)(人類学は)初期の近代化論的援助政策にもとづく経済と産業技術重視の援助と相いれなかった」とも述べており、開発と人類学の距離は必然であったともいえる。

¹³ 『スラムの惑星』 pp.67。

¹⁴ [GAMBI 2005:39]

¹⁵ [GAMBI 2005:41]

¹⁶ [浦部 1996:31]

¹⁷ Informe del Consejo Nacional para la Superación de la Pobreza: Presentación

¹⁸ 貧困に関する研究では社会学、政治学、経済学のほかキリスト教団体による報告書があげられる。社会学では大学調査実習で貧困地区が対象とされる以外には、貧困層の言語や生活様式などの文化的側面についての民族誌的なものがある。しかしあくまでフィールドとしての貧困であり、概念の検討や開発における問題を扱うものは見受けられず、実際の「貧困」撲滅運動や克服計画に社会学者がかかわることはあるが、調査メソッドの専門家としての参加にすぎない。政治学では南米諸国間との比較からチリの採るべき貧困政策への提言や、現在施行中のプログラム評価が数多くなされ、また経済学では数値的な貧困の変遷や、数値からみた政策分析と見通しについての研究が大半を占める。人類学的に興味深いのはキリスト教団体をはじめとする支援活動団体の報告書である。「貧困」の実態を知らしめる濃厚な民族誌であり、国家の政策が最貧層の視点と見合っておらず、期待と要求に役立っていないことをとりあげ、参加型協力の視点を強く主張している[VILLATOROS 2004:13-14]。しかし団体の活動の宣伝の風味も強いため、「貧困」概念に沿ってその劣悪さを増長して描く傾向もある。チリでは国家主導および各種団体の貧困撲滅政策を取り巻いて、それに連動するような研究が主体となっている。

¹⁹ 貧困者を悪とする理由を考えることは、いくつかの問題系を含む。たとえば、キリスト教諸国においては思想的にハーモニーよりもユニティを重視するのではないかという議論がありうる[『臨床とことば』 鷲田清一・河合隼雄 2003]。そのことは、自国内にいる異質な存在への目配りや介入あるいは統合というかたちで、ハーモニーに寛容な日本人的視点からはとらえきれない文脈がある。また、政府が貧困問題として扱っている部分には、先住民問題を貧困に被せている可能性など、覆い隠されている別の問題が見え隠れする。スケープゴートとしてのありかたもまた解剖していく必要があるだろう。

-
- 20 MIDEPLAN では 1997 年頃から貧困地域を含む低開発地域に関して「内なる境界 (*Frontera Interiores*)」ということばで表現することがある。これは 1994 年に陸軍が地政学的な低開発地域の情報を提供したときの用語である。チリ軍部は低開発を安全保障の問題と関連付けており、軍事政権終了後の立場の保持のためにもそうした情報をかなり協力的に政府に提供している。
- 21 CASEN: Encuesta de Caracterización Socio económica。本章で参照した資料は 2003 年 11 月 8 日から 12 月 20 日までの間に無作為に全国 (イースター島をのぞく) 68,400 世帯、合計約 270,000 人を対象に実施され回収している。
- 22 [Serie CASEN 2003]
- 23 アメリカの経済学者 M.フリードマンはこれを「チリの奇跡」と呼び評価した。たしかに数値の上での GDP の上昇や貧困率の低下などが見られたからだが、いっぽうで A.センはこの期間の経済政策がかえって貧富の格差をひろげ、かつ固定化したとして失敗と位置付けている。
- 24 89 年から 97 年の間に実質賃金が約 27% 上昇し、全国失業率も一時 5,7% まで下がった。
- 25 この政策は 2005 年に終了し、評価期間 1 年を含めた 2006 年の結果では、劇的な効果は見られず、少なくとも政策開始後 2 年時点での貧困層の減少率は 1,8% にとどまっており、過去 5 年の値とほぼ変化がない。しかし政府は減少の割合よりも人口に注目し、「2000 年には約 849,000 人いた極貧層が 2003 年には約 728,100 人となり、約 121,100 人もが極貧層を脱出したのはこの国家連帯政策の成果である」と自己評価している [CASEN 2003:3.]。
- 26 全国共通の貧困層居住環境診断カルテの点数から割り出す [FichaCAS, FichaFamilia]
- 27 はじめの 6 ヶ月は 1 家族あたり 10,500 ペソ、次の半年は 8,000 ペソ、次に 5,500 ペソ、そして 2 年目終了までの半年は 3,500 ペソである。
- 28 チリ国家連帯計画実施の支柱としてブリッジ・プログラム (*El Programa Puente*) を置き、選定された対象家族へ介入する。主に地区の SW が携わり、プログラム規定どおり週 1 度の監視チェックをする。各項目の内容は、家族のあり方について「家族間で日常的に、習慣や生活時間のことやレクリエーションのスペースについてなど話し合いなさい」とか、身元について「全家族が ID カードを持ちなさい」「漏れなく自治区の貧困者カルテに記入されなさい」といった細い指示がある。これらを政府は「社会化」または UNDP に則って「人間開発」と表現している。
- 29 「貧困線が 43,712 ペソで、昨年 40,000 の収入しかなかった人が今年 45,000 になったから貧困を脱したという。それで一体なにが変わるのか」 [La Tercera 2004.8.19 投書]
- 30 2003 年の所得分配は、一世帯あたりの現金収入比較では最低所得層は全所得の 1.2%、最高所得層が 41.2% を占める。金額にして前者平均が 63,866 ペソ (約 120US ドル)、後者が 2,174,676 ペソ (約 4,030US ドル) である。一人当たりの月平均収入では前者が 13,582 ペソ (約 25US ドル)、後者が 819,973 ペソ (約 1520US ドル) である。 [CASEN 2003:3]
- 31 2003 年の全国失業率は 5.8% だが、貧困層の失業率は 20% を超えている [INE]
- 32 チリ全人口 1,505 万 341 (2002 年), チリ最低賃金 111,200 ペソ/月 (2002 年) ※ 1 US ドル = 約 706 ペソ (2003 年 5 月), チリ全国失業率 9.4% (2001 年), サンチャゴ市失業率 18.9% (2001 年), サンチャゴ市貧困率 23.2% (2001 年) = 極貧層 17.4%・貧困層 5.8% (MIDEPLAN チリ企画協力省 2001 年・INE チリ国家統計局資料 2002 年より)
- 33 最新の CASEN2018 ではチリの人口 1875 万人に対し、サンチャゴの人口は 668 万人となっている (35.6%)。1970 年の新社会主義政権樹立以降はつねに全人口の 4 割前後が首都に集中して続けている。
- 34 生存に最低限必要な栄養を満たすための食料品の価格、基本的必要を満たすための非食料の価格合計額を極貧ラインという。世帯における一人当たりの収入が極貧ライン以下

- にある場合、極貧層に分類される。チリ国家統計局で定められている数値では、首都圏在住：17,136 ペソ以下の収入／月、農村部在住：13,204 ペソ以下の収入／月となっている。
- 35 極貧ラインの2倍額(農村部の場合は1.75倍)を貧困ラインとし、世帯における一人当たりの収入が貧困ライン以下にある場合、貧困層に分類される。(首都圏在住：34,272 ペソ以下の収入／月、農村部在住：23,108 ペソ以下の収入／月)
- 36 1986Johon Friedmann, The world city hypothesis, Development and change. Vol.17, 69-83 の分類による。
- 37 生存に最低限必要な栄養を満たすための食料品の価格、基本的必要を満たすための非食料の価格の合計額を極貧ラインという。世帯における一人当たりの収入が極貧ライン以下にある場合、極貧層に分類される。チリ国家統計局で定められている数値では、首都圏在住：17,136 ペソ以下の収入／月、農村部在住：13,204 ペソ以下の収入／月となっている。
- 38 極貧ラインの2倍額(農村部の場合は1.75倍)を貧困ラインとし、世帯における一人当たりの収入が貧困ライン以下にある場合、貧困層に分類される。(首都圏在住：34,272 ペソ以下の収入／月、農村部在住：23,108 ペソ以下の収入／月)。
- 39 ポブラシオン内の作業所に主婦が寄り集まって教えあいながら、民芸品や生活用品の縫製を行なっている。
- 40 サンチャゴの旧市街の中心地に、まとめ買いに限り、新品のあらゆるもの安売りをしている大市場がある。
- 41 VGにも、相互扶助機能はある。滞在中、同じポブラシオンの人間が、友人の家を放火するという事件があり、ダンボールと木造の住居は全焼したが、翌日にはすぐに隣人が集まってきて家を建てた。しかし、このネットワークはあくまで人をめぐるものであり、金銭の貸し借りや、LBで行なわれたような、共同で金を作ってやりくりするというような経済的つながりは認められない。
- 42 ペニャロレン区は人口21万6千296(うち極貧層約9,000人、貧困層約32,000人；区の総人口の約20%)であり、その失業率は12.13%(2002年)である。そのなかのサンルイス地区の人口は48,168人(2002年)であり、区の総人口の22.3%を占め、サンルイスはヴィジャ・ガルバリノ(Villa Galvarino)とヴィジャ・レテリエル(Villa Letelier)のふたつのポブラシオンから構成されている。サンルイスの貧困率の内訳は、貧困層37.85%、極貧層12.45%(2002年)である。
- 43 サンルイス地区における家長の教育歴：無教育11%、初等教育経験46.1%、初等教育修了17.7%、中等教育経験16.1%、中等教育修了9.1%、高等教育経験・修了ともに0%、識字率：51.62%
- 44 この事例について大学院のゼミで発表をした折に「そんなちっぽけな夢しかないのか」というコメントがあった。筆者の調査不足ではないのかという指摘ではなく、純粹に、夢のない世界だ、という趣旨である。たしかに現在の日本に生きる我々からしたらそうした感想になるのも無理がないのだが、相対主義を学んでいるはずの人類学・隣接諸学の学徒もまた、日本という環境による価値観の拘束が見られた出来事である。
- 45 経路依存とは何かの選択場面でこれまでに経験してきた事柄について過去の経路や経験に依存してしまうという経済学概念である。
- 46 Ficha CAS と呼ばれる家族カルテで、主として地区のSWが訪問して作成する。
- 47 日本の大学院生の世界観(注44)と通じるもので、2003年度のチリ大学社会学調査実習で低所得者居住区に入った学生24名のうち20名もが、「貧困者なのに笑っていた」という驚きのコメントを残した、驚くべき感想の束がある。
- 48 「第四世界的状況」とは、「第四世界」として「第一世界」から名づけられるままのごとく「資本主義の底辺」に渦巻き、そのように見えるいっぽうで、ひとつの決めつけでは理

解されるべくもない人の暮らしの日常をとらえていく観点であり、人が複数の文脈を生きる状況そのものとして考えている。

⁴⁹ 肥満はチリ全体の社会問題として認識されており、2006年1月にはチリ厚生省から「肥満対策レポート(*Estrategia Global contra La Obesidad*, MINSAL)」が出された。本書類では、学歴＝社会階層レベルと肥満率の比例を明記している。

⁵⁰ 歯がないから、歯がなくても食べられるように外側が堅いパンは油に浸して柔らかくして食べる。パンを油に浸して食べればよい環境があたりまえになると、歯がなくても暮らしていけるようになる。身体が環境を形作り、環境もまた身体を形作るのである。ハビトゥスの生成現場とは、このようなものとイメージできる。

⁵¹ ジル・ドゥルーズはこのユクスキュルのダニのエピソードを好んで引用する。彼は著作のさまざまな箇所では引き合いに出しており、限定的なダニの知覚のあり方を人間との対比で高く評価する。人間が全的(メジャー)な知覚を持っているという幻想から、マイナーへ引き下がるのが大事であり、それによって見えるようになるものがあると。たとえばドキュメンタリー映画『ジル・ドゥルーズのアベセデー(L' abecedaire)』(ピエール＝アンドレ＝ブタン監督、仏語、1988年)のA(Animal)の項目などで詳しく述べている。「マイナーへ引き下がること」というのが、本論文における「貧困」者というイメージと、「ダニ」や「マイナー」ということばと重なることで劣位や周辺的な存在と同一化しているのではないかと誤解される懸念があるが、そうではなく、人間も理屈とか論理の前に動物であるのだから、限定的な知覚によって生きていることを自覚しつつ「ある世界」からはじめよう、という主張に通じる思考であると筆者は考えている。

⁵² ドイツ語の訳出にあたりドイツ系チリ人 Salvador ENRIQUES 氏に協力いただいた。

⁵³ 第四世界の定義についてももともとは「第一世界のなかにある制度からはずれる集団をさす。事例として難民、アンタッチャブル、先住民、貧困者など」とされていたが、現在では使われ方があいまいになっており、「第三世界のなかで極めて困窮している人びと、または、その他の集団や階級によって極端に周辺化している(難民、不可触民、先住民、貧民など公的システムに取り込まれていない)人びと」のことも指す。世界の現状にしたがうと、「第四世界は第一世界のなかにあるもの」という定義にほとんど意味を見いだせない。問題は、制度上取り込まれているにもかかわらず現実はそうでないということにある。たとえば第一世界という、おもに国家の枠のなかで、内政問題のようにおもわれてきた第四世界について、それがグローバルな現象であることを考えてみると、第四世界が生じる構造そのものにも共通項が見出せる。もしそれがグローバルシステム自体の構造の問題であるならば、生じている(世界規模から見れば)ミクロな個々の事例を第四世界として括り、構造の解明に取り組むことには意義があるであろう。また、この作業をつうじて第四世界ということばの定義や存在自体の見直しと同時に、それにかかわる実践的な方法についても有意義に展開できるはずである。

また、「第四世界的状況」とは、そこにある拡がりであり、場であり、そこに注目する世界の見方であり、民族誌を記述する場所であると考えている。あえて「第四世界」の名づけを背負わせたまま、しかし別の「環世界」であることを念頭に置いている。第一世界に連なるものとして「第四世界」と呼ばれてきたローカル(中央に対する周辺、上下で言えば下といわれる場)には、中央でも下でもない、中央でも下でも構わない日常の暮らしがある(「上のないローカル」)。「第四世界的状況」が指し示すものは曖昧さを

残すが、なにものであるかの確定作業自体に意義を求めるものでもあり、耐久性のあるツールとなりうるかの試論としてこう呼んでみている。

- 54 アルピジェラは個別と普遍の人権ツールとしての一面も最近持ち始めている。それは2005年からはじめられた各国をまわるアルピジェラ展示会ツアーでみられる。作り手の個人的な苦しみに行き場を与える一方で、個別の作品として見られるときにはそれは、他の多くのチリ人にも共有される普遍的経験を喚起する装置ともなる。つまり、その鑑賞行為においては解釈の余白をもつ要素なのである。
- 55 関一敏氏口頭発表による（成城大学2007年研究会口頭発表）
- 56 チリでは1970年新社会主義政権樹立の前後で首都に人口が流入した際に、人びとが空いている土地を探してそこに居住するという状況が続いた結果、都市の内部に貧困居住区が点在することとなった。道路を隔てて高級住宅地と低所得者居住区が向き合っていることもよくある。富裕層が低所得者居住区に足を踏み入れることはまずないが、日常的にその風景や存在を目にし、自分達の生活空間への進入を防ぐ手立てを考えるようになった。鉄柵の建設やゲートドシティ化だけではなく、根本から貧困をなくするという動きにつながったのである。それは表面上は善意にもとづく救済の様相を見せているが、実際には社会的防衛措置であった。
- 57 大川正彦「所有の政治学」（『所有のエチカ』所収、大庭健・鷺田清一編、ナカニシヤ出版、2000年）。また、2003年の九州大学大学院比較宗教学研究室における大学院ゼミのテーマとして当時「所有」が議論されており、本書が取り上げられ、当時の教授関一敏氏がここであがっている慈善、施し、救済など動詞が名詞化するときには所有をうむという興味深い議論を展開されていた。「慈善のイメージ」からの支援との向き合い方については、このゼミとその後の関氏の研究会発表（2007年成城大学）に着想を得ている。
- 1) 世界保健機構 WHO の定義では、医学的リハビリテーションとは、「個体の機能的または心理的能力を、必要な場合は代償機能を活用することによって発達させる一連の医療であって、それによって障害者が自立し、活動的な生活を送ることができるようにすること」。
- 58 国際協力事業団チリ身体障害者リハビリテーション技術協力プロジェクトの短期派遣専門家として、2000年9月から2002年4月まで地域調査指導として断続的に約1年2か月赴任し、2002年12月から2003年3月まで地域リハ実施指導として赴任した中で得た資料による。
- 59 チリでは経済指標の目安として、生存に最低限必要な栄養を満たすための食料品価格と、基本的必要を満たすための非食品価格の合計額を極貧ラインとしている。世帯における一人当たりの収入が極貧ライン以下にある場合、「極貧層」に分類される。また、極貧ラインの2倍額（農村部の場合は1.75倍）を貧困ラインとし、世帯における収入が、貧困ラインよりも少なく、極貧ラインより多い場合に「貧困層」に分類される。チリ国家統計局で定められている数値では、2002年現在、極貧層は17,136ペソ（約2,800円）以下の月収入の世帯であり、貧困層は17,136ペソより多く34,272ペソ（約5,800円）/月額以下となっている。
- 60 前章までの事例にあがった人びとの多くはINRPAC患者を基本として行った家庭訪問およびそのついでで広がった調査先である。
- 61 北九州総合療育センター前院長北原侘さん、およびソーシャルワーカー横田信也さんとの談話より（2005年）。
- 62 地域リハビリテーションといった場合の「地域」とは、「コミュニティ」を指す。ただし、地域リハとは、社会開発までを目標にいたしたWHOのいうCBR(Community Based Rehabilitation)と同義ではなくその一部であるとされる。したがって、コミュニティよりも下位区分を指すとも言われ、明確な定義がされていないのが現状である。INRPACに

おける地域リハの実践をするときには「障害者とその家族の生活圏ならびにそれを取りまく居住区」を意味している。

- 63 国際協力事業団（現国際協力機構 JICA）チリ身体障害者リハビリテーション技術協力プロジェクト（当時・医療協力部：2000-2005）。
- 64 Junko NAITO, *Informe ejecución de RBC 2003*, en INRPAC Santiago Chile, 27 de Febrero 2003, pp.2.
- 65 パイロットケースとしてのグループを組織する際に、「あたりをつけた」のが画像 29 にも登場する M さんの母親エディスさんである。彼女はいわばわれわれ（CBR チーム）や患児の母親たちや地域の役人や住人をつなぐ役割を任せられる、その期待を持てる人物であったため直感的に依頼をかけたわけだが、こうした人物がおそらく地域にはおり「ファシリテーター」ともいうべき存在なのではなかろうか。本論文では文化人類学者が開発支援の現場でファシリテーターとなりうると論じてはいるが、地域におけるファシリテーターをみつけ、繋ぐということを考えると地域のファシリテーターは重要である。支援をめぐる人類学においてはこうした人びとについて追究することも必要であり、今後の課題としたい。
- 66 技術やノウハウを移転するべき相手国(本稿ではチリ)側の人材。一般的に日本人専門家の専門と同じか、または近接の職種の間人が、受入れ役を兼ねてカウンターパートとなる。各専門家に対応して 1 人または数名のカウンターパートがいる。
- 67 開発途上国間における相互協力のこと。
- 68 [亀井・武田 2008][亀井・小國 2011][内藤 2014][小田 2015]
- 69 ペニャロレン区自治体のソーシャルワーカーおよび「貧困克服計画 2002」に携わる役人が 2002 年 8 月に訪問した時の模様である。
- 70 人類学者にとっての常識や物事のとらえかたと、異分野の専門家のそれとが、とくに開発現場において顕著に異なることについて、2005 年 7 月に波平恵美子氏と九州大学比較宗教学研究室において雑談したおりに着想したことである。これが切り口となって主題へと繋がったことを感謝とともに記しておく。
- 71 大井玄氏は認知症ということばよりもあえて痴呆を用いる。侮蔑的漢字であることを理由に書き換えても、結局のところ線引きが変わらない以上言い換える必要はないとのスタンスである。また、認知症という名称のわかりにくさについても否定的見解を示している。